

愛歌(ORT)さん喚んじやった。

全智一皆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

名も無いマスターが、沙条愛歌を依代にしたORTを喚んじやつて、なんか色々話す話し。

目次

本編

序章 「最強のドジっ子」	1
第一話 「地球の生活」	3
第二話 「人の暮らし」	8
第三話 「何でも屋」	13
第四話 「起源」	19
第五話 「人形師との早い邂逅」	25
第六話 「逃走」	31
第七話 「教会来訪／有り得る夢」	38
第八話 「蹂躪と捕食」	44
第九話 「解明対談」	52
第十話 「魔法使いの到来」	59
第十一話 「無銘と蜘蛛と魔法使い」	64
第十二話 「学習／経験者」	71
第十三話 「相談／誘拐」	77
第十四話 「絶対防衛抗戦」	83
第十五話 「絶対防衛抗戦・Ⅱ」	88
第十六話 「絶対防衛戦線・Ⅲ」	95
第十七話 「選択」	105
Happy End _√	
何気ない平和な日常	114
bad end _√	
「星喰らう蒼き日輪」	120
マテリアル	

沙条愛歌〔ORT〕	127
無銘のマスター	132
「空想浸食都市 三咲」終焉を告げる鐘	
序章「名も無き英霊」	136
第一話「無銘の凡人」	139
第二話「壊れてしまった愛しき故郷」	145
第三話「廃れなかった場所」	150
第四話「再会／宣誓」	155
第五話「月の花園に佇むお姫様」	160
第六話「後悔／誤った正答」	165

本編

序章 「最強のドジっ子」



吾輩はマスターである。名前など無い。
突然ながら、型月民の皆々。

『ORT』——というキャラクターの事を、ご存知だろうか？
誰だよ其奴、と言う者が居る可能性は有る。

だが、恐らく型月作品を知っている者達、もしくはFGOをやっている者達であれば、よくご存知だろう。

そう、『対知性最強』の殺生院キアラや『最強の英霊』覚者を差し置いて、『型月最強』の名を背負いし『究極の一』——彗星のアルテミス・ワンの事である。

FGOでは、設定通りの理不尽さ、期待を裏切らぬ余りの理不尽さに、白目を向いた民達も少なかったであろう、あのORTだ。

この辺りで何となく察している者達も居るのだろうが、だがまだ待ってほしい。

再び、型月の民達に聞きたい。

ORTを知っているのであれば、「沙条愛歌」というキャラクターもご存知ではないだろうか？

そう。『型月作品に登場するマスターの中で最強なのは？』という議題で必ず1位に君臨する最強のマスター——騎士王大好きマスターこと、沙条愛歌の事である。

型月の世界において、あらゆる全ての魔術師が追い求める悲願こと『根源』に、生まれ落ちた時から繋がっている、本当に数少ない人間『根源接続者』の一人。

東京で行われた聖杯戦争の勝者にして、『Fate／Prototype』における黒幕でもある『全知全能』の力を持った少女だ。

根源という、型月世界における『この世の全て』とも言える概念に

生まれた時から繋がっている彼女は文字通り全知全能であり、その力を意中の相手であるセイバー——もとい、アーサー・ペンドラゴンの為に使いまくっていた、謂わばサイコパスヤンデレである。

アーサー・ペンドラゴンに恋をした一人の少女である彼女を知らぬ者など、型月の民にはほほ居ないだろう。

∴では、此処まで長々と語った故、今より本題へと移るとしよう。

私、名も無きマスターは——

「臨界、完了。疑似身体・疑似精神との接続、完了。存在意志、確定。初めまして、マスター。サーヴァント・フォーリナー、沙条愛歌改め、O R T。此処に臨界しました。」

沙条愛歌を依代とした疑似サーヴァント、O R Tを召喚してしまっただのである。

霊長の抑止力、そして星の抑止力の御二方、本当に申し訳ございません——本来の時間よりもめっちゃ早く、世界における最強のドジっ子を呼んでしまいました。

さて、どうなってしまうのでしょうか。

私にはもはや検討が付きません。

誰か、助けてくれませんか？

第一話「地球の生活」

■ ■
吾輩は型月最強の惑星生物にしてフォーリナーのサーヴァント、ORTのマスターである。名前など無い。

つい先日、私は、挫折困難や紆余曲折が有ったという訳でもなく、本当に突然、本来ならば召喚する事が出来る筈も無い最強のサーヴァント「ORT（沙条愛歌）」を召喚する事が出来た。

いや、この場合はする事が出来たというよりも、出来てしまった、してしまったという表現の方が正しいのかもしれない。

まあ、閑話休題。

沙条愛歌を依代にし、疑似サーヴァントとして私の元に召喚されたORTなのだが。

「これが、人類の文明——現世、と呼ばれる世界。」

彼女は現在、ベランダから街並みを眺めていた。

私が住むマンション、そのベランダから見える街並みを眺めている彼女は、とても感慨深そうだった。

人が住む世界、人が文明を発展させている世界。

愚かだが美しく、善ではあるが悪でもある矛盾した生命体『人類種』が造り出した今の世界。

その眺めは——惑星の危険信号によって飛来した彼女にとって、どう写っているのだろうか。

「認識異常、確認。登録記憶の再生及び読み込みを開始——完了。やはり、私が見た世界とは認識が合いません。」

訳が分からない、と言った風に、彼女は首を傾げて、此方へと体を向ける。

「マスター、これはどういう事なのですか?」

地球から発せられた危険信号に答えて、この地球にやって来た彼女にとって、この平和な街並みは珍しい以前に理解する事が出来ないものだったらしい。

いや、そもそもとして、恐らく彼女は汎人類史のORTではなく、異聞帯におけるORTなのだ。

私は少しも悩む事なく、正直に彼女に事実を打ち明ける事にした。この場で嘘を吐いたところで、困るのは私だ。それに、彼女も釈然としないだろう。

それを理由に殺されてしまったては無念極まりない。故に、正直に伝えよう。

「此処こそが本来の世界、君が見たミクトランの世界のような『もしも』の世界ではなく、我々、人類種が生を歩んでいる歴史だ。」

黄金樹海紀行ナウイミクトランのような、『異聞帯』というような仮想の世界ではなく、我々『人類種』が『正しい人類史』を歩んでいる世界——それが、此処。

汎人類史と呼ばれる——異聞帯でも特異点でもない、現実世界である。

「正しい歴史——汎人類史。」

大切な教えを呟くように、復唱する。

私はマスターとしては半端者であり、魔術師というよりは魔術使いに近い立ち位置の人間だ。

衛宮士郎のような特殊な起源を持っている訳ではない。

遠坂凜のようなアベレージ・ワンという才能を持っている訳でもない。

蒼崎青子のように魔法を使う事が出来るという訳でもない。

私は、ただの名も無きマスターだ。特別秀でた才能が有る、という訳ではない。

だが、まあ——そんな私でも、いや、そんな私だからこそ、この歴史を愛している。

私に出来る事があるとすれば、それは彼女に、汎人類史の在り方を知ってもらえるように努力する事だ。

それが、彼女がこの地球を滅ぼさない理由になってくれるかもしれない。

「二先ず、食事を取ろう。細かい話は、其の後だ。」

出来るか分からない不確かな世界救済の行動を決意して、私は彼女の胃袋を掴めたらな、という希望的観測の元に台所へと向かうのだった。

□ □

私も独り暮らしをしている大人だ。多少の料理には、心得が有るつもりだ。

彼女は見た目こそ少女なのだが、しかしその本質は星をも喰らう大蜘蛛だ。

デザートか何かよりも、肉料理といった物の方が掴めたり出来るだろうか？ と考えた末、どちらも出す事にした。

出さないよりはマシだろうし、どちらも出せば腹は多少、膨れてくれるだろう。

「食事：獲物が居ませんが、今から出向くのですか？」

食事をする為に必要な獲物が居ない事に、首を傾げる彼女。

ああ、やっぱり料理の事は知らないのか…と、私は少し困ってしまった。

私は彼女に「汎人類史における食事は、狩りじゃないんだ。」と、一般常識を教えた後、椅子に座って待っていてくれ、と言って、冷蔵庫から次々と食材を取り出す。

あまり時間を掛けさせるのは良くないだろうし、素早く作れる肉料理を作ろう。

主な材料は豚肉の薄切りとアスパラだ。後は醤油、水、料理酒、味噌といった味付けようの調味料だ。

作るのは簡単な肉巻き。だが、これが意外と膨れるのだ。

まな板に肉を敷き、その上にアスパラを載せて丁寧に巻いていく。

これだけの簡単な作業で、取り敢えず十本作った。足りなかったなら、また作れば良い話だ。

次に、調味料を全てボールに移し、混ぜる。

混ぜるまでの作業に少しばかり時間は掛かるが、手間という程の間ではない。

混ぜ終えたら、コンロに火を着け、その上にフライパンを乗せ、フ

ライパンにサラダ油を引いてから肉を乗せ、焼く。

この間に、冷凍庫からカップのバナニアイスを取り出しておく。この時間で、丁度いい具合の溶けてくれるだろう。

肉の両面が焼けて良い色になったなら、混ぜた調味料を掛けて煮詰める。後は味が染みるまで少し待つだけだ。

「判別不能…これまで、嗅いだ事の無い匂いです。」

不思議そうにしながら、彼女は何時の間にか此方の隣に立ってフライパンを見詰めていた。

何という俊敏性だ。流星はORT、アルテミット・ワンと言ったところか。

疑似サーヴアントになると、そのステータスの高さは依然健在という事だろう。

「今から皿に盛るから、待っていてくれ。」

真剣に肉を見詰める彼女にそう言って、私は火を止めてフライパンをコンロから離し、皿へと肉巻きを移していく。

まるでカブトムシを見る子供のように、肉巻きに釘付けになっている彼女。

私は机の方で食べてくれ、と彼女に箸ではなくフォークを渡して指示を出す。

…流星に、フォークなどの使い方は分かるだろう…分かるよね？

「使い方は分かるか？」

「はい。その知識は、座より登録されています。」

変わらぬ無表情で、彼女はフォークを受け取った。そして皿を持って、机の方へと一瞬で移動し、椅子に座って食事を始めた。

皿に盛り付けられた肉巻きにフォークを突き立て、じっくりと眺めながら口へと運ぶ。

彼女の歯が、味が染み付いた肉とアスパラを噛んだ瞬間。

「

彼女は、目を見開いた。

彼女は疑似サーヴアントだ。

ORTとしての味覚、嗅覚ではなく、沙条愛歌という一人の人間と

しての味覚と嗅覚を今は持っている。

ともなれば、食べ物も『美味しい』と思う事が出来るのは、至極当然と言うものだ。

「…」

突き刺す、食べる。突き刺す、食べる。

もうリスの如く膨らませた頬。もがもがと、彼女は肉巻きを全て平らげて見せた。

早過ぎる…デザートを作る時間が無くなってしまったではないか。

「…美味かったか？」

あまりの速さに少し困惑しながら、私は肉巻きを飲み込んだ彼女へと美味しかったかどうかを問う。

反応だけを見るに、美味しかったとは思っているのだが…

「――次」

「…え？」

次？

次とは何だ？

「次です。同じものを作ってください。」

どうやら、お気に召して頂けたようだ。

「同じもので良いのか？ 別のものを作ろうと思っていたが…」

「では其れもお願いします。」

…これは、思った以上に食費が掛かりそうだ。

だが、まあ、これは重畳な結果というやつではないだろうか、と私は思う。

取り敢えず、肉巻きは気に入ってもらえたようだ。この調子で、デザートも気に入ってくれば良いのだが。

さて、それでは早速、デザートを――ふわふわのパンケーキを作るでしょうか。

第二話 「人の暮らし」

■ ■
吾輩は腹ペコ大蜘蛛のマスターである。名前など無い。

つい最近、名も無いマスターである私は最強のマスターである沙条愛歌を依代にサーヴァントとして水星（正確には彗星）最強のアルテミット・ワン「OR T」を召喚した。

何を言っているのか分からないって？ 安心したまえ、当の本人である筈の私ですら未だ完全には理解出来ていない。

そも、サーヴァントの召喚には大量の魔力と、そのサーヴァントを呼び出す為に必要な縁——何らかの触媒が必要なのだ。

しかし私は、その他のマスターや魔術師と違って特別に秀でた才能を持つているという訳ではない。

今回の召喚は、ある意味では奇蹟、ある意味ではイレギュラーな現実に当て嵌まる——つまりところの、異常事態だ。

私は確かに召喚術を試したが、しかしそれで彼女が召喚されるとは思いもしなかったのだ。

ちなみに、私は聖杯戦争の参加者という立派な戦士などではない。何度も言っている通り、私は本当に名も無き——ただのマスターだ。もしくは、ただの魔術使い。

まあ、閑話休題。

私はキッチンで、机で私の食事を今か今かと、そわそわしながら（表情などが変わっているという訳でもないのだが）待っている彼女の為に、料理をしていた。

昨日も作った、ふわふわのパンケーキにバニラアイスに乗せた、カフェのメニューに有りそうな代物。

どうやらコレが彼女にとっては、彗星という一つの惑星における最強の生命体OR Tにとっては、とても好評だったらしい。

このパンケーキを食べた時だけ、彼女の目が光り輝き、そして鉄仮面か仏頂面とも言える無表情を崩していた。

そんな顔を一度でも見せられたら、もう一度作ってやりたくなくなるではないか。

と、いう訳で。私は再びパンケーキを作っている。

材料は卵一個、グラニュー糖10g、強力粉50g、ベーキングパウダー1g、そして牛乳40gだ。

ホットプレートは既に温めている。準備は万端だ。

まず、卵を割って卵黄と卵白に分ける。卵黄はボウルに入れ、卵白は別のボウルに移して冷凍庫へと入れて冷やしておく。

卵黄を入れたボウルに牛乳、振るった強力粉とベーキングパウダーを合わせ、よく混ぜる。

こういう作業は時間が掛かるし疲れるものだが、それがデザート作りというものだ。

要するに、慣れの問題だ。まあ、私がこれを作ったのは昨日が初めてなのだが。

…ま、そんな事より。メレンゲを作るとしようか。

冷凍庫で冷やしていた卵白を取り出し、その冷えた卵白にグラニュー糖を3回に分けて加え、固めのメレンゲを作り出す。

これがまあ面倒なのだ。これだけで腕がかなり疲れる。

こういった作業を生業としているパティシエの皆様には、感動する他ないな、と私は思っている。

メレンゲが出来たら、メレンゲの出来の悪そうな部分のみをすくい取り、最初に生地にしつかりと混ぜ込む。

混ぜた生地を残りのメレンゲに合わせ、下から掬って返してを繰り返しながら、少々メレンゲが残る程度まで混ぜる。

混ぜ終えたらホットプレートに薄く油を引き、生地をこんもりと乗せる。

熱湯大1/2〜1を加え、蒸気焼き開始する。

蓋をして焼いていくのだが、時々ホットプレートの中の水分を蒸発させるように傾けながら焼くのが良いらしい。

そうして、底に焼き色がついたら優しく返し、再度熱湯を加えて蒸気焼きを繰り返す。

良い感じになったと思ったら、ヘラで側面を触り、生地が付かなかつたら完成だ。

パンケーキを皿に移し、キャラメルソースとホワイトパウダーを掛け、その上にアイスを乗せれば——朝食（デザート）の完成だ。

「出来たぞ。」

「ありがとうございます、マスター。」

机に運ぶと、此方が見ても分かる程に喜ぶ彼女。

まあ、別に表情が変わっているという訳でもないのだけれど…。

それはそれとして、彼女が喜んでくれたならば何よりだ。

…さて。

「では、行ってくる。」

リビングで私が作ったパンケーキを頬張る彼女に、私はそれだけを告げて玄関の方へと足を進める。

私は既に朝食は済ませているので、食べる必要はない。というか食べる気力もない。

そんな中、何をしに行くか？ それは勿論——“仕事”だ。

人間である以上、成長して大人になれば必ずとして仕事をしなければならぬ。それは魔術を扱う者として例外は無い。

何より、私は魔術使い。魔術を極めて『根源』へと至ろうとする研究者などではない。

ただ魔術を知り、ただ魔術を扱えるというだけの人間——それが私だ。

そんな私が、一般人と同じく仕事をしているというのは、特別珍しい事ではないだろう。

「何処に向かうのですか？」

真の意味で世界を知らぬ、彼女を除いて。

くいっ、と私の服の袖を指で掴んで私の歩みを止めた彼女が、首を傾げながら何処へ行くのかを聞いてくる。

相変わらず俊敏だな…サーヴァントの俊敏ステータスで表すなら

B、もしくはAか？

まあ、そんな事はどうでも良いか。

「仕事に行ってくるんだ。私とて社会人だからな。」

仕事に向かい、働く。そして、私が社会人であるからという補足を
入れて答えると、彼女は再び首を傾げた。

はて、何か疑問に思うような点でもあったのだろうか…？

と、私が彼女が首を傾げた事に疑問を浮かべていると――

「マスターは、魔術師ではないのですか？」

そんな問いが、私に帰ってきた。

ああ、そうか。サーヴァントの召喚を試す、なんて行動をするのは、
殆ど魔術師だけか。

ともなれば、私が自身を魔術師ではなく社会人、と表現した事に彼
女は疑問を感じたのだろう。

まあ、私はその魔術師にも当てはまらない半端者ではあるのだが。

「遠からず、だな。私は、正確には魔術師ではなく『魔術使い』だ。彼
らとは根本から違う。」

「何が違うのですか？」

「魔術師は魔術を究め、根源へと至ろうと創意工夫をする者達。魔術
使いは、簡単に言えば魔術をただの道具のように『使う』だけの人間
だ。」

「…では、マスターはその魔術使い、に当たるのですね。」

「そうだ。だから、まあ、魔術を研究している訳でもない私は、協会か
らの資金などは得られない。よって、働いて稼ぐしかないんだ。」

一端の魔術師、それこそ魔術協会に所属する魔術師や、時計塔のよ
うや魔術師育成の総本山とも言える場所に所属する魔術師であれば
資金の心配は要らぬ。

だが、私は魔術使い。ただ魔術を扱う事が出来るといっだけの人間
だ。

魔術使いは、魔術師からすれば『魔術師』という括りにすら当ては
まらない、『ただ魔術を適当に扱える』というだけの一般人判定だ。

故に、魔術使いは魔術協会からの支援として資金は調達する事が出
来ない。

一般人のように、働いて稼ぐ。そうする事でしか、資金を稼ぐ事が

出来ないのだ。

「そういう訳で、私は仕事に行ってくる。昼食は置いてあるから、昼になったら食べておいてくれ。」

「分かりました。」

「ああ。では、行ってくる。」

彼女は私の袖を離し、歩いてリビングの方へと戻って行く。

私は玄関で靴を履き、鍵を取って扉を開け、外の景色を眼に映す。

綺麗な青空、暖かい陽射し。私が住み、そして暮らす町——「三

咲市三咲町」の風景が、其処には有った。

「マスター」

ふと、彼女に後ろから声を掛けられる。

どうしたのだろうか？ と振り向くと、

「——行ってらっしゃい。」

無表情ながら、そんな、言われて嬉しい言葉を言ってくれた。

誰かに、行ってらっしゃい、なんて言われるのは——— いったい、何時ぶりだろうか。

私は嬉しく笑みを浮かべて、

「行ってきます」

と、彼女に返した。

「∴現在情報と登録情報の統合を開始。

マスターは、魔術師ではない。魔術師ではなく、魔術使いである。

ただ魔術を使う事が出来るだけの、人間である。」

「統合完了。情報、異常無し。

情報の解析、及び考察を開始。

マスターが優れた魔術師でないならば。

優秀などではなく、ただの凡庸な魔術使いであるならば。

そうであるならば——— いったい」

どうやって、聖杯による魔力の高まり無しにサーヴァントを召喚させる程の魔力を手に入れた？

第三話 「何でも屋」

■ ■
吾輩は三咲町に住むマスターである。名前など無い。

我がサーヴァントにして同居人の彗星最強の生物O R Tを家に置き、三咲町の市内へと出た私は、現在、自分の仕事場へと向かっていた。

私は魔術使いであるが、別に魔術を使つて仕事をするという訳ではないし、何なら「仕事」というのは別に裏稼業的な危ないものであるという訳でもない。

私としては、本当に極々一般的な仕事をしているつもりである。いや、他の人からしても普通の仕事である筈だ。

まあ、珍しい仕事と言われればそれまでではあるのだが。自分でも、やっている仕事が生間一般的な視点からすれば珍しい仕事である事は理解している。

では、私がしている仕事とは何か？

私がしている仕事、それは――

「今日も来てくれてありがとうね。それじゃ、さつそく手伝つてくれるかい？」

「はい。」

『何でも屋』――である。

そう、何でも屋。文字通り、『依頼を請ければ、どんな事でも致しますよ』という仕事である。

引越し業者や荷物が詰まっている人の手伝い、はたまたコンビニやスーパーの荷物の解きや移動、運搬など。

文字通り、なんでも。兎に角、なんでもやる。

それが、私が営む仕事である。

今回の仕事は、引越し業者の手伝いとコンビニの商品の運搬、ある山奥に有る屋敷の電球交換と修理の三つである。

「しかし、何でも屋さんはいね。今日は三つも仕事があるんだろう

？」

荷物が詰め込まれたダンボールの箱を持ち上げ、家内へと運びながら、依頼主の業者さんが私に話し掛けてくる。

「凄いとと言われる程の事でもないのだが、まあ、褒められるのは悪い事ではない。」

「ありがとうございます。でも、今日は少ない方ですよ。多い時は五つですから。」

「数字的には二つ増えただけのものだろうが、しかし、それが仕事であるならばと考えるとみれば、どうだろうか。」

「仕事が五つだ、五つ。」

基本的に、一個するだけで疲れるだろう労働が五つも有った時に比べれば、三つなど少なく、安いものである。

無駄に体力が有る私としては、五つ程度ならばそこまで苦ではないが、一般人からすれば、五つの仕事をこなすというそれは、凄いと賞賛される程の事なのだろう。

「賞賛は良い。褒められて嫌な事など、滅多に無い事だと私は思う。」

「よいしょつ、と。」

腰を降ろし、荷物が詰め込まれた重たいダンボールを一階のリビングに置く。

体力は有るが、しかし力が有るといふ訳ではない私にとって、やはり引つ越しの荷物というのは実に重たいものだ。

「いったい何を詰め込めば、こんなにまで重たくなるのだろうか……？」

まあ、勝手にダンボールの中身を拝見するのは犯罪に成りかねないのでしないが。

「ごめーん、タンス運ぶのも手伝ってくれるかい？」

「勿論。右持ちます」

トラックから出されたタンスを業者さんと二人で、タイミングを合わせて持ち上げる。

ずしつ、と、重力に押し潰される感覚と似たような感覚が腕に襲い掛かってくる。

木材の直角が手に食い込む。ああ、懐かしい感覚だ：教科書ばかり

が入った机を運ぶ時も、こんな感じだったような気がする。

重荷を持ちながら玄関を越え、廊下を渡って右側の個室へと入っていく。

此処は自室になるのだろう。でなければ、ダンスなんて持つてこないだろうし。

「じゃ、降ろすよ。」

「はい。」

ゆっくりと腰を降ろし、ダンスと床で指を挟まぬように慎重に降ろしていく。

このダンスで指を挟まれてしまえば、それはもう痛いレベルでは済みそうにない激痛になるだろう。

最悪、潰れる。

それこそミンチになる。

潰れたソーセージのようなグロテスクになるかもしれない。

そう思うと、そう考えると、私はそれだけで顔を青くした。

それだけは御免被る。私、治癒魔術は習得していないので。そういった怪我は専門外なのだ。

というか、専門外でなかったとしても、そんな怪我だけは負いたくないものである。絶対に。

そんな怪我を負えば、どれだけ苦労するか。

両手が使えなくなったら、私はどうやって、我が家に住み着く可愛げな本体と依代共に最強のサーヴァントの腹を満たせと言うのだ。

「よし、あらかた片付いたかな。お疲れ様。じゃ、これ報酬ね。」

ダンスを置き終え、その他の荷物も置き終えた私は、業者さんから二万円札を渡される。

…あれ、なんか多くない？

「今日はいつてもより手伝ってもらったからね。それに、この後も立て込むんだろ？ サービスさ、サービス。」

笑いながらそう言ってくる業者さんに、私は頭を下げて感謝した。

何と素晴らしい…！ これだけで、今日の食費が賄える…！

「そんな嬉しそうにしちゃって。そんなに金欠だったかい？」

「いえ、一応、それなりに残ってはいるのですが…」

さて、どう答えたものか、と私は頭を悩ませる。

彼女の事を何と言えば良いだろうか。妹？ いや、駄目だな。あま
りにも似ていない。

であれば、何だ。子供か？ 孤児とでも言うべきか？

…それはそれで、彼女に失礼なような気もするな。

私は悩みに悩み、そして――

「親戚が泊まっています。その子がまあ大食いで…」

親戚という、曖昧な表現にした。

うん、まあ、妹とか孤児よりはマシだろう。うん、そうだ。そう思
う。そして彼女に文句を言われたら謝ろう。

大食いなのは事実なので、別に訂正する必要は無いだろう。だって
本当の事なのだし。冗談抜きで。

もしかすれば、あの騎士王よりも腹ペコだ。

私は業者さんと別れ、次の仕事場所に向かいながら、彼女は大丈夫
だろうか、と心配を抱いた。

…訂正、正確には家の冷蔵庫や食料が食べられていないか、だ。

□ □

時刻は夕頃になり、私は現在、最後の仕事である、ある洋館の電球
交換と修理を終える為に、その洋館が有る山、その森の中を歩いてい
た。

魔女が住んでいるとも噂されているその洋館を、私は知っていたり
もする。

何せ――それは、その噂は、本当の事であるからだ。

魔女が住んでいるという根も葉も無い噂は、真実なのだから。

私は、魔術使い。

ただ己の道具が如く、魔術を扱うだけの人間。

魔術回路がたった13本しかない、強化魔術や変化魔術といった、
魔術師が努力すればすぐに習得する事が出来る魔術しか使う事が出
来ない、ただの魔術使いだ。

しかし、それでも、そのような魔術師ですらない人間であろうとも、私は魔術を知る者だ。

魔術。古き神秘、現代社会において腐りかけた大いなる術、人が扱える薄れた神秘。

魔法などとは比べるべきではない、人の限界。人が人であるが故に成す事が出来る事象の到達点。

魔法は、もはや人には絶対に再現不可能な真の神秘にして奇蹟そのもの。

対して魔術とは、人の手によって再現する事が出来てしまうもの。例えば火を起こす魔術があったでしょう。これも、昔は魔法と呼ばれていた。

だが今となつては、人間はマッチやライターやらで魔法など使わずとも火を起こせるようになった。

次第に、これは魔法とは呼ばれなくなった。

まあ、そんな長い話を今から続けても意味など無いので、ここまでは「さて、着いたな。」

森を抜けた先、私は小綺麗な洋館へと辿り着いた。

いつ見ても、大きな屋敷だ。同時に今でも思う。

「これ、絶対に三人だけで住むような規模の屋敷じゃない……」と。

さて、それでは屋敷にお邪魔しよう。

そう思い、扉の前へと歩み、ノックをしようと手を上げようとする。「こんにちは。」

そうしようと思ったが、背後からした挨拶の声を聞き、それを止める。

振り返ると、其処には学生服姿の、首に包帯を巻いた青年が立っていた。

「静希くんか。こんにちは。まあ、今は夕方だから、どちらかと言えばこんにちはが正しいけど。」

「む、そうでしたか。では、こんにちは。」

間違いを正し、改めて挨拶の言葉を投げる彼の名前は、「静希草十郎」。

この屋敷の住人の一人にして、型月世界において『YAMA育ち』という分類に当てはまる「逸般人」の一人である。

「もしかして、電球の交換ですか？ 態々、すみません。」

「良いさ、仕事だからな。まあ…一々こんな事を頼む必要があるか？ とは思うがな…」

「蒼崎ですから。」

「だよなあ…」

依頼主の愚痴を呟きながら、私は静希くんと共に屋敷へとお邪魔する。

まあ、静希くんにとっては此処が家なのだけれども。

屋敷の中身は、やはり綺麗。清掃が行き届いているのは、実に素晴らしい。杜撰な私も見習いたいものだ。

靴を脱ぎ、スリッパを履いて少し歩けば、階段から淑やかな足音が聞こえた。

足音すらも淑やかな、教育された歩き方。

「…いらつしやい。」

この屋敷の主にして、この世界における「最後の魔女」——「久遠寺有珠」の登場だ。

第四話「起源」

■ ■
吾輩は依頼を受ければ何でもする『何でも屋』である。名前など無い。

引越し業者の手伝いとコンビニの荷物運搬の仕事の手伝いを終え、今日の最後の仕事である洋館の電球修理と交換を終える為に、私は件の洋館へと辿り着き、お邪魔していた。

「…久しぶり。」

「ああ、久しぶりだね、久遠寺さん。電球を変えなきゃいけない場所は、静希さんと蒼崎さんの部屋だったね？」

「ええ。宜しく」

「了解。」

会話を済ませ、私は仕事を終える為に静希くんの部屋が有る場所へと上がっていく。

澄んだ階段の音は、驚く程に綺麗に耳の中に入り込む。全く、本当に素晴らしい洋館だよ、此処は。

アインツベルンの屋敷はどちらかと言えば城だから、この久遠寺邸が最も屋敷らしい屋敷と言えるだろう。

何せ、この屋敷の主人である久遠寺有珠は保守的に「変わる」事を嫌っているのだから。

自分の所有物に対しては強い思い入れがある彼女にとって、母親の形見である『童話の怪物』と同じくらいに、この屋敷は大切なものなのだ。

両親の形見である洋館に危害を加える相手には容赦のない怒りに向け、また洋館にそぐわない生活様式を改めさせるなど、格別の執着心を見せている。

シャンデリアの電球の交換じゃなくて良かった…あれは本当に疲れるし、壊してもすれば彼女に殺されかねない。

「そう言えば、気になった事が。」

「ん？ なんだい？」

静希くんの部屋の電球を変える為、脚立に乗って電灯を調べている私に、静希くんが気になった事があると問い掛けてきた。

仕事の事だろうか？

「何でも屋さんの名前を聞いていなかった。」

思い出した、といった表情を浮かべながら、静希くんは、私には良い答えが出ないその言葉を、私に放つ。

名前。物や人物に与えられた言葉のことで、対象を呼んだりする際に使われるもの。魔術的な意味でも重要視される概念だ。

名前：名前か。

「…名前、ね。」

さて、どう答えたものだろうか。

名前は無い、と答えれば良いのだろうか、恐らくその後には、

「？ 何故、名前が無いんですか？」という、純粹故の疑問が返ってくる事だろう。

私には名前など無い。それが何故なのかと問われても、それが私という存在であるから”としか答える事が出来ない。

静希くんが魔術師であるならば別に細かく話しても良いのだが、残念ながら静希くんは魔術師ではない。YAMA育ちである。

私は悩み、そして――

「私には”名前”なんて無いよ。生まれた時から、ずっと名前は無い。」

少し強めの口調で、名前など無いと言い放つ。

私の口調が強めである事、また名前が無いという部分の強調で、私はその話しをしたくないという意思を受け取ってくれたのか、静希くんは「そ、そうですか。」と、少し戸惑いながら納得してくれた。

ごめんね静希くん。でも、こうでもしないと君、質問止めないから：YAMA育ちだから。いや、この際にはYAMA育ちは別に関係無いか。

久遠寺さんに聞くよう促しても良いのだけど…まあ、別に私が促さなくとも自然とそういう話の流れになるだろうし、別にしなくても

良いか。

取り敢えず、私はさつきと仕事を終わらなせなければならぬ。何故なら、家では彼女が待っているのだから。

腹を空かせているだろうか。それとも、眠っているだろうか。…最悪、勝手にどっか行ってるかもしれない。

そう考えると、私は自然と電球を回す速度を早めた。

早く帰らなければ、何かやばい気がしたから。

「よし」

静希くんの部屋の電球を交換し終えた後、私は少し早歩きで蒼崎さんの部屋に入り込む。

無人。部屋の主は、何処にも居ない。

実に好都合。もし居たとすれば絶対に話し掛けられる。正直、会話をしている暇すら見いだせない程に、私は結構、いやかなり、焦っていた。

ORTだぞ？ 一つの惑星の最強生物だぞ？ 幾ら少女の体を依代にしているとは言えども、サーヴァントなのだぞ？

腹を空かせているだけならば、まだ良い。

ただ眠っているというだけならば、それの方が良い。

だが、もしも外に出ていたとしたら？

街に繰り出していたら？ もしも不審者が居たとしたら？

ああ、そんな事になれば—— 不審者が絶命してしまう…!!”

そう、私は彼女の事を心配している訳ではない。

私が心配しているのは、もしも彼女が外に出ている場合、彼女を少女と見て襲い掛からんとする不審者の方だ。

「あら、来てたのね。いらっしやい。」

「うわあ…」

「ちよつと、うわあって何よ!?!」

おっと失礼、本音が漏れた。

私がいざ電球を素早く交換しようとした瞬間、扉が開かれ、この部屋の主人が姿を現した。

現存する魔法使いが一人、されど決して魔法を使おうとはしない魔

法使い。

こと破壊と魔力の使い方に関しては優秀な半人前の魔術師――

「蒼崎青子」である。

「悪い。だが、急ぎでな。」

「急ぎ？　なんか用事でもある訳？」

「親戚が家で待ってるんだ。子供のな。」

「ふーん……無銘」のアンタに親戚ねえ？」

此方を訝しむような視線を送る蒼崎。

まあ、そうするのも無理はない。だが、事実として付き通らせてもらおう。

「確かに俺は『無銘』だが、それでも血族が居ない訳じゃないぞ。」

「血族って言い方は誇張し過ぎよ。私だって、あんたに家族が居るくらい知ってるわよ。」

まるで私がそういう事を貴公にしないような言い方じゃない……と、若干不機嫌そうにしながら蒼崎はそっぽを向く。

機嫌を損ねてしまったのは悪いとは思うが、しかしそれを気にしていられる程の余裕など、今の私には無かった。

電球がちゃんと機能しているかを確認し、私は脚立から降り、脚立を畳んで治す。

「ふう……これで、仕事は終了だ。」

「そ。ありがと。じゃ、はいこれ。」

そうして、私は蒼崎さんから三千円を渡された。

まあ、ただの電球交換なのでこれぐらいだ。というか依頼料は設定されている訳なのだし。

その料金を設定したのは、社長的立場に立つ私なのだけだ。

まあ、閑話休題。

私は脚立を外に直した後、三人を別れを告げて、家への路を歩み始める。

時刻は、七時。夜に当てはまる時間だ。

「……このまま普通に帰っていたら間に合わない、か。」

此処から普通に歩いて、自分が住むアパートに帰るとした場合、掛

かる時間は五十分程度。かなり長い。

その間にも、彼女は腹を空かしている筈だ。もしくは外に出ている。

と、なれば――

「……

――回路、開口」

魔術を使つて、颯爽と帰る。

ゴウンツツツ

鐘の音が、暗い夜に煩く、そして劈くように、鳴り響いた。

□ □

「なあ、蒼崎。何でも屋さんには名前が無いのか？」

何でも屋と呼ばれる男が帰った後、草十郎はソファに腰を降ろし背中を預けている青子に彼の名前について質問した。

自分が質問した時、妙に強い口調で名前は無いと言われた事が、やはり草十郎は気になったのだ。

「無いわよ、本当に。どんなに調べても、何処にも名前なんて載ってないわ。」

生まれた時に、殆どの人間に与えられるであろう常識的なモノは彼には無い。

青子は、そう断言した。

その青子の答えに、やはり草十郎は疑問を抱いた。

「何故なんだ？ 普通、名前は付けられるものだろう？」

未知が多い（草十郎にとっては）都会では育たず、山の中で育った草十郎ですら、名前を持っている。

なのにも関わらず、都会で住んでいる筈なのに名前を持っていないとは、どういう事なのか。

それが、草十郎には分からなかった。

「……まあ、言っても分かんないし、何だったら忘れるんだしいつか。」
少し考えるようにした後、青子は口を開いた。

「あいつの『起源』が、『無銘』だからよ。」

「……起源？ 無銘？」

更に首を傾げる草十郎。

まあ、でしようねと、青子は彼の反応に分かりきった反応を示しながら続けた。

「その人が生きる道理、存在価値、存在意義、そういった『当人の在りかた』を決める、その人の在り方の根源に繋がるもの——それが起源よ。」

「…ふむ?」

「例えば、起源が『激情』だったら、その人は激情家になる。もうすごい感情豊かな人になるって事よ。」

「ああ、なるほど。つまり、その人の生き方を決めてくれるものか。」
納得したようにする草十郎。

少し意味合いが違うような気もするが、まあ概ね合っている為、よしとしよう。

「そ。で、あいつの起源は『無銘』。誰にも名前を付けられないし、だから誰にも名前を呼ばれない。そして、何かに名前を付ける事も出来ない。だから、あいつには名前が無いのよ。」

誰かに名前を与えられる事は無く、それ故に誰かに名前で呼ばれる事が無く。

そして、自分で何かに名前を付ける事も出来ず。

名を与えられず、名で呼ばれず、名を付けられず。

ただただ無銘に、『彼』や『貴方』や『あの人』や『何でも屋さん』といった言葉でしか呼ばれない男。

それこそが——あの、名も無きマスターなのだ。

第五話 「人形師との早い邂逅」

■ ■
吾輩は少女の形をした絶望の象徴ORTのマスターである。名前など無い。

昨日、私は久しぶりに魔術回路を開き、自身に強化の魔術を掛けて急いで自宅へと帰還した。

私の想像は全くの間違いであり、彼女は私の家の食料を食べ尽くしている事などは無く、また勝手に外に出ているという訳でもなく、ただ静かに眠っていた。

：まあ、眠っていた場所が自室ではなく私の部屋だった事には、少しばかり驚いたが。何故、私の部屋に居たのだろうか…？

そんな事が有りながらも、私は何とか無事に日々を過ごす事が出来た。良かった良かった。

「おはようございます、マスター。」

そんな事を振り返っていると、私の部屋で眠っていた彼女が目覚まし、リビングに現れた。

「おはよう。」

彼女に挨拶を返しながら、私は彼女用の大きな皿に、今日の朝食であるベーコンエッグとスクランブルエッグを盛り付けていく。

彼女は匂いで理解したのか、すぐに席に着いた。

やはり腹ペコのようなだ。まあ、昨日は夜ご飯を食べていなかったのだから、それも当然と言えば当然か。

私は彼女の皿の横にトーストを乗せ、自分の分の朝食も皿に盛り付け、両手で皿を持って机の方へと歩く。

「ありがとうございます、マスター。今日は洋食なのですね。」

「ああ。最近は和食続きだったからな。」

今日の朝食はベーコンエッグとスクランブル、トーストという完全な洋食だ。

洋食と和食、どちらが好きかと問われれば、私はどちらも好きだ、と

答える。

：答えになつてないって？ 洋食も和食も、どちらも美味しいのだから仕方無いではないか。良いじゃん別に。両方が好きでも。

ハンバーグやスパゲッティ、ピザといった洋食は素晴らしい。あれこそジャンキーに陥れる魔性の食べ物だ。

サバの味噌煮や味噌汁、和物といった和食は胃に優しく、心を満たしてくれる。あれこそ母の味と言える素晴らしい食べ物だ。

結論、両方素晴らしい。はい、異論は認めません。

「じゃ、いただきます。」

「いただきます。」

合掌し、日本の由緒正しき食事文句を述べて、私達は朝食を取り始める。

左手に持ったフォークでベーコンエッグの黄身を突き刺して抑え、右手に持ったナイフで分厚いベーコンをゆっくりと、しかし確実な力を込めて、ぎこぎここと引きながら切っていく。

半分に切れたベーコンエッグをトーストの上に乗せ、私は大きく口を開けてかぶり付く。

出来立てのトーストに、分厚いベーコンの汁が染み渡り、そしてそれを口の中へと放り込めば、その味が広がっていく。

黄身の味、ベーコンの味、その二つが染み渡ったトーストの味。

洋食ならではの味わいが、私の口を支配していく。

噛み、噛み、噛み、そして、ごくんっ…と、飲み込む。

「美味しい…」

そんな言葉が、聞こえた。

私も言おうとした言葉を、彼女も言ったのだ。良かった、美味しいと思つてもらえる出来だったようだ。

この頃、私にも料理精神というものが芽生え始めたような気がしてならない。

ついこの間までは、料理をする事に特別楽しいや緊張といった感情など抱かなかつたのだが、彼女を召喚してからはそれが芽生え始めたのだ。

彼女が美味しく食べる姿。それを眺める事に幸せすら感じてしま
うのは、きつと料理精神が芽生え始めたからだろう。

決して、私がロリコンなどという世間一般からすれば邪なものに目
覚めた訳ではない。決して、そう、決してだ。断じてだ。うん。

「ほうふひえば、ふあふたー」

「…口の物を飲み込んでから喋りなさい。汚いから。」

私がそう注意すると、彼女はよく噛まずに口の中の物を飲み込ん
だ。

うん、まあ…ORTだからね。何となく想像はしてたけど。

「そういえば、マスター。」

「言い直すのか…まあ、いいや。で、どうした？」

彼女はフォークとナイフを空になった皿に置いて…

(え、何時の間に食べ終えたんだ。)

…まあ、それは後でで良いか。

兎に角、フォークとナイフを皿に置いて、彼女はいつもの無表情で
私に問いを投げた。

「マスターは、どうやって私を召喚したのですか？」

どんな仕掛けをして、本来なら召喚される筈が無いエクストラクラ
ス、その中でも異端である『フォーリナー』の自分を呼び出したのか。

遂に聞かれたか…と、彼女の問に私は悩み始める。

というのも、私自身も、何故彼女を召喚する事が出来たのかが、全
く以て解らないのである。

そもそもとして、私自身、サーヴァントを召喚する事が出来るとは
思ってもいなかったのだ。

聖杯によるバックアップなど受けていないし、だからと言って、ア
ラヤやガイアといった『抑止力』からもバックアップを受けていると
いう訳ではない。

というか、此処が『魔法使いの夜』の世界線、つまるところの『月
姫時空』であるならば、サーヴァントの召喚など叶わない筈なのだ。

ガイアの力、星の抑止力が強いならば怪異が表に出やすい。

即ち『月姫』、『空の境界』、そして此処『魔法使いの夜』といった時

「勝手にお邪魔するよ。」

聞きたくない声が、聞こえた。

赤い髪が見えた。

それから、私の視界は真っ暗になった。

□ □

「初めまして、サーヴァントちゃん。手荒でごめんね。」

名も無いマスターをソファに寝かせたその赤髪の女性は、椅子に座ったままの彼女に手荒な方法ですまないと謝る。

「マスターの生体活動に問題ありませんので、お気になさらず。」

「なら良かった。ちなみに、もし生体活動に問題が有ったら？」

「今この場で、貴方を殺し、糧とします。」

瞳の色を綺麗な翡翠色に変え、禍々しく、悍ましく、そしてとても澄んだ美しい水色の光となって現れる程の殺気を身に纏い、彼女は返答する。

依代が例え人間であろうとも、しかし彼女はアルテミット・ワン。究極の単一個体である。

一つの惑星、その中でも最強の生物となる種。

確かな目覚めと共に、この星の表面を己が故郷によって喰らい尽くし、人類種から生態系まで、地球に存在する汎ゆる術の、何もかもを己の糧とする星喰らいの大蜘蛛。

サーヴァントとして弱体化していようとも——たかが一匹の虫を踏み潰す事など、造作も無い。

「ふ…それは、怖いな。」

赤髪の女性は、冷や汗をかきながら引き攣った笑みを浮かべる。

「それで、貴女は何者なのですか？」

神秘を抑え込み、彼女は赤髪の女性へと問う。

女性は少女と対面するような形で椅子に腰を降ろし、掛けていた眼鏡を外し、

「私の名前は、蒼崎橙子。彼の知り合いよ。」

数こそ20と少ないが精密さで他を圧倒する美しい魔術回路、生ま

れ付き宿した魔眼、世界の機微を感じ取る五感、自らの特異性を削る事なく摂理に適合する知性を持った蒼崎が生み出した天才——「蒼崎橙子」と、恋をした全能の少女を依代とされた彗星における究極の単一個体「O R T」は、邂逅を果たした。

それは、この世界に存在するあらゆる生物に名を与えられず、また、あらゆる生物やあらゆる物に名を与える事が出来ない生き方を辿る起源。

私に名前が無い理由。それは、私が『名前を与えられない』という事が運命であるからだ。

無銘の起源によって、私は絶対に名前が与えられない。それ故に、私は絶対に誰にも名前と呼ばれない。

何せ、呼ぶ名前が無いのだから。

「起源の事は知っているかな？」

「情報の追憶を開始——完了。いいえ、登録されていません。」

「なら、まず起源からだね。」

起源ってというのは、あらゆる存在が持つっているとされる原初の方角性。核となる絶対命令だ。

根源の渦という混沌から生じた、『こうしなければならぬ』という衝動だ。」

何らかの始まりの因、物事を決定づける何らかの方角性。

前世よりも更に前、人でもなければ物でもない、脈々と繋がる存在の糸であり、魂の原点、存在が始まった場所。

Aという存在をAたらしめる、核となる絶対命令とも言えるモノ。

それこそが、魔術世界において『起源』と呼ばれる概念である。

「彼の起源は無銘。」

本来、生まれ落ちた時から名を付けられる、もしくは後々から幾らでも名を付ける事が出来る『生き物』であるにも関わらず、名前を与えられないどころか、名前を与える事すらも出来ないモノだ。

それが、私達が彼の事を真に理解する事が出来ない理由だ。

『何も無い』ものに対して、『何も無い』という事以外に分かる事なんてないだろう？」

蒼崎橙子は、そう片付ける。

だが事実、その通りなのだ。

名前とは、その存在の証明書だ。

名前が無いという事は、即ち存在を表す証明書が無いという事であ

り、ならばそれは真の意味で何者でもない。

「彼の本性、人間性なんて私にも分からないよ。でも——彼が君を喚ぶ事が出来た理由は分かる。」

「ああ、それもです。聖杯のみならず、抑止力からのバックアップを受けている訳でもない筈のマスターが、何故、召喚術を行えたのですか？」

「理由は単純。本当に単純で、質素な答えさ。ただ単に——彼が作り出す魔力が、英霊を召喚するに足りる量と濃さを持っていた。一言で纏めれば、彼の持つ魔術回路が特殊だったからだ。」

私が持つ魔術回路は、たった13本。

魔術回路の平均的数は20本程度。

それに比べれば、私の魔術回路は余りにも少ない。

だが、その数が数故に、異質だった。

「13——そもそも、魔術の世界において、数字っていうのはかなり重要なものでね。その数字が持つ意味を魔術として扱う魔術師も居るくらいだ。」

「…」

「13という数字は、不吉な数字として恐れられる忌み数でね。それこそ、その知名度は獣の数字とも言われる666と同じくらい。」

13という数字は、西洋において最も忌避される忌み数。

だが、それと同時に。

忌避されているが故に、魔術世界において13という数字が生み出す意味、価値は大きく、神秘の薄れたこの世界に現存する数少ない『古くから薄れぬ神秘』である。

獣の数字と呼ばれる666と同じか、もしくはそれ以上の知名度補正を有する不吉な神秘。

忌避される忌み数と呼ばれる理由となる説は多く、中でもイエスキリストを裏切った弟子であるユダが、最後の晩餐で13番目の席に着いていたからという説が最も有力なものとされている。

だが、その他にも説はあり、北欧神話に基づく説においては、12人の神が祝宴を催していた時に、招かれざる13人目の客として乱入

したロキがずる賢いなどの性格とされ、ロキのせいでラグナロクを迎えたことにも由来しているとされる。

キリスト教神話では、サタンは13番目の天使ということになっているなど、神話が由来なのではないか、という説も数多く存在する。その数字の不吉さを信じて疑わず、それ故に神秘を未だ色褪せぬ、数少ない偉大なる神秘の一つ。

神秘は人が知り、解明する事で神秘から遠ざかる。

されど、この13という数字は忌避される理由が殆ど判明しているにも関わらず人間に恐れられ、幾数年という長い年月が経った今も忌避されているが故に神秘としての在り方を保っているのだ。

「魔術回路の一本を起動するだけで鐘の音の如き轟音を響かせ、それが生み出す魔力量は大魔術や儀式呪法を一人で補う程に多く、それでいて現代にしてはとても濃い。それが、彼が君を召喚させた理由だ。」
魔力が高まる時間やらを無視して、私が何のバックアップも無くたった一人でサーヴァントを召喚出来たのは、それが理由だ。

神秘の数と同列の魔術回路から生み出される魔力の量は凄まじく、一本を起動するだけで大魔術を一人で補う。

「…よく知っているんですね。」

彼女は少し不機嫌そうに、そう言う。何故に不機嫌？

「まあ、それなりに長い付き合いだからね。」

蒼崎橙子は、平然とそう答える。いや、別に長い付き合いではないが。

あと、見間違いでなければO.R.Tの眼が翡翠色になっている気がするのだが。

もう一度言おう。何故？

「まあ、実際に見た方が早いかな。」

そう言うのと、彼女が私の方を振り向いた。

バレてないと思っていたのに、まさかバレているとは。流石に、彼女を舐め過ぎていたか。

しかし、実際に見せる、という事は…あれか。なんか模擬戦みたいな事をしなければならぬのだろうか。

はつきり言つて——めっちゃ嫌だ。
ともなれば。

「先手必勝ならぬ、先手必逃。」

□ □

バンツ！ と、体のバネを強制的に発動させて全体を空中へと跳ね上げる。

にやりと口角を上げる蒼崎橙子。予想通りだった、という事か？

だが——甘い。あまり自惚れるなよ。

「ちよつと失礼するぞ、ORT。」

「はー。」

脚部の回路を開く。

ゴウンツツツツツツツツツ！！！！

と、鐘の音が響き渡る。

近くの壁を踏み台にし、脚と爪先が着いた壁の一部分へと強化の魔術を施して——

壊す勢いで、壁を蹴った。当然、私は弾丸が如く飛ぶ。

体は砲弾。速度は音速。如何に蒼崎橙子とて、ほぼ近距離からの砲弾を防ぐルーン文字の術式など、秒では展開出来ないだろう。

だが——私は別に、君を狙つてなどいない。

「なっ…!?!」

彼女が振り向いた、その時には既に私はORTを抱えていた。所謂、お姫様抱っこだ。

啞然とした表情で、抱え込むORTが私を見る。まさか無表情が崩れるとは思わなかったな。

突然ですまないが、こうでもしないと逃げられそうにないのでね。

私は直ぐに窓側へと駆け出し、窓を突き破って部屋から外へと飛び出した。

落下の風圧が私と彼女の体を駆け抜ける。

眼の前には素早く近付いてくる黒い地面。普通ならばペしやんこになって終わるだろう。

だが、身体強化の魔術を施した私であれば問題はない。まあ、衝撃は伝わってくるのだが。

綺麗な態勢を取り、出来る限り彼女に衝撃が行かないようにして地面に着地し、颯爽と道を駆け抜ける。

さて、此後はどうするかな…

「あの、マスター。」

走りは止めない。足は止めない。

風に仰がれながら、彼女は非常に珍しく、困ったような声色で私に話し掛ける。

「どうした？」

私は視線を彼女に移さず、前を向いたまま走り続ける。

速度は緩めない。相手は冠位。少しでも速度を緩めれば、その隙に魔術が起動され、攻撃が行われるだろう。

「重くは、ないでしようか」

「……………」

その言葉を聞いた瞬間、私の頭の中には宇宙と一匹の猫が広がった。

オモクナイデシヨウカ？ アノ、オルトガ、タイジユウヲキニシタ

…？

いいや、違う。きつと違う。これは、そう。

別にそんな、女性が気にするような事を気にしても言葉ではないのだ。

恐らく私と比べて、自分が食べ過ぎなのを理解しているから出る言葉だろう。

そうだ、そうに違いない。

「い、いや、重くないが。」

故に私は平然と…いや、若干戸惑いながらも、重くないと答えた。

重い、なんて答える訳がない。出来る訳がない。多分、いや絶対、そんな事を言えば殴られる。

「…そうですか。」

私は決して、見ていない。

少し安心したような顔をした彼女の事など、見ていない。

…：…たった数日で、私のような人間に、そこまで心を許すものだろう

うか？

失礼ながら、私は訝しんでしまった。

第七話 「教会来訪／有り得る夢」

■ ■
吾輩は人形師の知り合い（不本意）にしてORTのマスターである。名前など無い。

現在、私はORTを抱えたまま、三咲町に在る教会に訪れていた。合田教会——三咲町に古くから有る教会であり、私によく依頼をしてくれるお得意様でもある。

まあ、大体が神父による殺し合いなのだが：それ以外の依頼も勿論有るが、実に少ない。

だが、今のところは此処に匿ってもらおう他ない。

「マスター、此処は？」

「此処は合田教会。一応、私によく依頼をしてくれるお得意様だ。」

確かにお得意様だが、一応という言葉は付けておく。

だって神父がおつかないんだもの：

正直に言えば、あまり此処を頼りたくない。何故なら、絶対に借りとして戦いを申し込まれるからである。

とはいえ、このまま野宿をする訳にはいかないのだ。彼女は兎も角、私は風邪を引いてしまう。

いや、彼女もダメか。流石に真冬の中、少女と共に野宿する男の凶など怪しい以外の何者でもない。

私は決心を付け、教会の扉を開いた。

「おや、いらっしやい。まさか貴方が自主的に訪れてくれるとは思っていませんでしたよ。」

そう言つて、祭壇から此方に振り向くのは、司祭の衣服を身に纏つた教会の神父。

司祭代理にして神父。

蒼崎橙子の兄弟子にして、常に刀を隠し持ち、そして常に口火を切る瞬間を持つ生粋の戦闘狂。

文柄詠梨——この町の中で、私が最も苦手とする人間である。

「そちらのお嬢様は何方ですか？」

「あ、ああ、この子は私のしんせ」

親戚、と言おうとした瞬間、ぎゅい、と頬を引つ張られた。

誰に？ そんなの決まっている——彼女、O R Tだ。

私はO R Tに、その小さな手で頬を引つ張られていたのだ。…何故？

「ちよ、いふあい。いふあいっへ、ふおると」

「…あ、すみません。」

私の言葉を聞いてくれたのか、彼女はすぐさま私の頬から手を離した。

しかし、私の言葉を聞いた彼女の反応はなんだ。

私から見たら、まるで無意識下の行動であったかのような反応の仕方だったぞ。

もしかして、何か不快になる事でも言ってしまったのだろうか？

私は考えた末——自分、何も言っていなくて？ という結論に至った。

だって別に悪いことは言っていないし。

「心情認識、開始。情報整理——完了。微小な不快感を確認。理由、不明。…何故なのでしょう？」

「いや、それは私に聞かれても困るんだが…」

「随分と仲がよろしい事で。まさか…娘さんですか？」

微笑みながらなんて事を言うんだ、この戦闘狂神父は。

「いや、私のじゃない。親戚の娘だよ。」

「初めまして。O R Tと申します。」

「ほうほう、織里おるとさんですね。初めまして、此処『合田教会』の司祭代理と神父を務めています、文柄詠梨と申します。貴方の叔父様とは良き友人です。」

（良き友人は斬り掛かってこないだろ…）

私は内心で毒を吐きながら、文柄さんに一通りの事情を説明した。

蒼崎橙子が襲撃しに来た（別に嘘ではない）事。

蒼崎橙子に家を占領された為、少しの間だけ此処に泊めてほしい事。

「ふむふむ…ちなみに、報酬などは…」

「言うと思ったよ…なら、一週間、タダで合田教会からの依頼を受け
るっていうのはどうだ？ 勿論、内容は問わない。」

「分かりました、ではそれで。布団などは此方から貸し出しますの
で。」

「ありがとう。助かる。」

「いえいえ。これくらい、お安い御用ですよ。」

良い笑顔を浮かべる文柄さん。殴りたくなる程の笑顔だ。

「あの、ます…いえ、叔父様。」

「ん？ どうした？」

「そろそろ、降ろしてもらっても良いでしょうか？」

「あ、ああ、すまん。」

私は腰を中くらいまで降ろして片膝を着き、ゆっくりと彼女を降ろ
す。

やけに軽いなと思ってはいたが、そういうえば身体能力強化の魔術は
掛けたままだったな、と私は思い出す。

そして、それと同時に——危機を覚えた。

「…文柄さん。唯架さんは、居ますか？」

「いいえ？ 彼女は今、買い物に出掛けていますよ。まあ、そろそろ
帰ってくるでしょうが…」

「ORT。隠れ」

「ただいま帰りました」

がちや…と、扉が開く。

即座に振り向き、彼女の姿を、シスター服に身を包んだ女性——
周瀬唯架の姿を目視する。

視界に入れた瞬間、私は教会の床を砕き割る勢いで蹴り、直ぐに彼
女の方に駆け出した。

彼女は先天的弱視であり、もはや盲目同然だ。

だが、その分として他の感覚が研ぎ澄まされており、基本的に“人
の脅威”を感じ取って人を認識している。

で、あるならば——

“個人ではなく、人類という枠そのものの脅威であるORTを認識してしまえば、どうなるだろうか？”

答えなぞ、決まったも同然だ——！

周瀬唯架は、もう何もかもが霞んで見える、もはや使い物にならないであろうその眼を見開いた。

同時に、本来ならば受け容れるべきでない現実を、もはや視えない眼で直視した。

其処には——

あまりにも大きく、あまりにも恐ろしく、あまりにも神々しい、
“どうしようもない絶望”の影が、金髪の少女の背後に立っていた。

だが、その瞬間、彼女の意識は暗闇へと落とされた。同時に、その絶望は彼女の視界から去って行った。

名も無きマスターによって、彼女の命は救われたのだ。

□ □

その日は、取り敢えず休む事になった。

何故、彼女を気絶させたのか、という質問は明日から説明すると言つて、何とか納得してもらった。

私も長くこの町に住んでいるし、長く色んな人と関わっている。

文柄さんも、私を一応は信頼してくれている。

事情は明日だ。取り敢えず、今日は寝るとしよう。

瞼を降ろし、

——違和感を覚えて、目を開いた。

眩しい虹彩が、あの広い、何処までも続く広い空を埋め尽くしている。

群青のようで、蒼穹のようで、翡翠のようで、薄紅のようで、深紅のようで、紫紺のようで、漆黒のようで、琥珀のよう。

まるで銀河を思わせる虹彩の川は、しかし人々を魅了させるものなどではなく、寧ろその真逆の立ち位置に立つ“恐怖”と、その隣に立つ“絶望”という感情で支配していた。

銀河の空、その真下には一匹の蜘蛛が居た。

一匹の蜘蛛が、その巨体で以て街を、否、世界を横断し、その瞬間

に人工物を——否、『世界の表面』を次々と結晶に変化させて、そして喰らっていた。

一步によつて道路と住宅は綺麗な翡翠色の結晶と成つて、箸で持たれた食物のように呆気なく大蜘蛛の口へと運ばれていく。

人々が逃げ惑う。絶望と恐怖に浸りながらも、無謀な逃亡を試みる。

群れを成し、互いに互いを押し退けながら、自分だけでも助かろうと、大蜘蛛から逃げようと、命からがらに、必死に走っている。

「——」
男は、ただそれを眺めていた。

男に肉体は無い。だが意識は有る。

だが、結局はただ見ることしか出来ない。

街が壊される様を、人が死んでいく様を、世界が喰らわれていく様を、ただ呆然と眺める事しか出来ない。

男はただ、「其処に居る」だけの存在であり、ただ眼の前の事柄を認識する事しか出来ないのだ。

「——」
踏み荒らされる。

ただ無様に、ただ無残に。住んでいた町が、悉く塗り替えられて、食い尽くされて、まっさらになつていく。

どうしてこうなつたのか。何が起きてしまったのか。なんて、考えるまでもないか。

あれは——「自分が育てた」結果だ。

この世界の事を教えた。

この世界の常識を教えた。

この世界の、色々な事を教えた。

その結果が、コレなのだ。こんな結果を、招いてしまったのだ。

「——ウ」
声が聞こえる。

何処に居るんですか。

「——ガウ」

何か喋っている。

何故、居ないんですか。

『——チガウ』

何かが、違う。

マスターは、何処ですか。

『——ワタシ ノ マスター 』

『ダレガ マスター ヲ ■シ■ 』

『ユル——サナイ 』

『ミツケル クラウ 』

『マスター マスター ワタシ ノ タイセツ ナ タイセツ ナ

——マスター』

前提が間違っていた。そもそもが誤っていた。

大蜘蛛は、ただ探しているだけだった。

自分の主を。自分の人を。自分の宝を。自分の大切な存在を、ただ探していた。

同時に、自分の敵も。

自分の主が居なくなつた原因を。自分の宝を奪つた誰かを。自分の大切な存在を壊した人間を。

これは夢であると、男は気付いた。そして、
“いつか現実になるかもしれない未来”でもあり、理解した。

次の瞬間、虹彩の空が縦に裂けた。

青空が見えた。黒鉄の鎧が立っていた。

光が振り上げられ——

「っ……！」

体を起こした。

第八話 「蹂躪と捕食」

「…」

時間は深夜。詳しく時刻を表すならば、午後12時の30分である。

合田教会の、誰も使っていない空白だった一室に、布団やヒーターといった、必要最低限な生活用品のみを置いた、名も無きマスターと彼女の部屋で、彼女は目を覚ました。

彼女の隣には、苦しそうな表情を浮かべている、悪夢に魘されている、名も無きマスターが居た。

彼女には、何故、眠っている筈の自分のマスターが、酷く魘されているのかが、苦しんでいるのかが、分からない。

彼女は究極の生命だ。サーヴァントという弱体化を受けようとも、その事實は、その根底は、決して揺るぐ事などない。

だが、それはあくまでも「力」のみの結果であり、思考能力や感受性といった感情も究極なのかと問われれば、そうではない。

究極の単一個体——アルテミット・ワン。その名称は、結局のところ、ただ力が有るが為に得た名誉であって、それ以外の意味など持たない。

人間の肉体で今を生きている彼女は、本来の自分が持たなかったモノを幾つも持っている。

五感は勿論、目で捉えたもの、もしくは話しを聞いたものを考える事が出来る思考能力。

そして——彼女の「依代」が秘める、「恋」と呼ばれる、彼女にとって理解不能の感情。

未だ人間の体によく慣れていない彼女にとって、名も無きマスターは自分のマスターであり、それでいて、よく分からないモノであった。

食事を作ってくれる。知らない事を教えてくれる。

何かと気遣ってくれる。心配をしてくれる。

究極の単一個体である自分を——あらゆる全ての存在に、ただ恐怖されるだけだった筈の大きな蜘蛛を、受け入れようとしてくれる。

恐怖せず、ただ柔らかく。

絶望せず、ただ暖かく。

人間の「感情」というものを、世界の「常識」というものを、「人間」でない筈の自分に「人間に教える」様に教えてくれる不可解な存在。

人ではないどころか、「生物」という領域からすらも逸脱した化け物を人間として扱う者——そんな人物を、理解出来る訳もない。

だが、彼女はその扱い方を——人間としての扱いを、無意識ながら快く思っていた。

時折、世間一般からして「親子のよう」と称されるような扱い——所謂、「子供扱い」は少々不快に思うところではあるが、しかし、一人の人間として扱われる事は、良い事であると認識していた。

故に——自分を人間として扱ってくれる人が苦しむ姿を見るのは、「心無き」モノであった筈の彼女にとっては、「心苦しかった」。「マスター……」

名も無きマスター。名前を呼ぶ事も出来ない、名前を付ける事も出来ない、無銘の人間。

名前が無い故に名を呼ばれず、名を与える事も出来ない彼女を、彼女はただマスターと呼び呟く事しか出来ない。

するり……と、悪夢に苦しんでいる彼の顔、その頬へと、細い手を伸ばす。

ほんのりとした人肌の体温。冷たかった掌が、少しずつ熱を帯びていくのを感じる。

苦しむ顔は緩まない。だが、呻きは少しだけ止んだ。

「……不安や痛みに苦しむ人間は、頭を撫でられると落ち着く、でしたか……確か。」

確証など皆無の固定概念に疑念を持ちながらも、しかしそれでマスターの心が少しでも和らぐならばと、彼女は右手を彼の頭へと持っていく。

ふさつ…と、彼女の細い掌が、彼の黒い髪に触れる。さらさらとしている訳ではなく、しかし汚い訳でもなく、ただただ普通の髪質だ。

だが、初めて人の髪を触る彼女にとって、それは新鮮な感覚だった。

「…」

撫でる、撫でる。

出来るだけ優しく、出来るだけ丁寧に。

少しづつ、彼の顔からは苦しみが消えていき——遂に、安からな顔となり、静かな寝息を立てた。

「これが、落ち着く…というものですか。」

安堵と呼ばれる感情。

人が特定の動作をする、もしくは誰かに動作を行われる事で、不安や高ぶりといった精神の抑制という効果を及ぼす。

それはその当人のみならず、そうした人間にも様々な感情を呼び起こす。

彼が安らかな眠りにつく事は、彼女にとっての安堵となった。

体が苦しまなくなった途端、彼女の胸の内で蠢いていた何かが静まったのは、そういう事なのだろう。

だが——

「…」

彼女は直ぐに、その安堵を消し去られる事となった。

かちや、かちや…と、遠くから響く、小さな足音らしきものを拾ったからだ。

彼女は安眠したマスターを起こさぬよう、工夫に工夫を重ね、音も振動も起こさぬように布団から抜け出し、音も立てずに部屋から出て行く。

冷たい床を、少女の姿をした絶望は裸足で歩く。

彼との同衾によって得ていた温もりは、未だ冷めない。否、そもそも冷ますつもりはない。

冷める前に、無粋なる侵入者を消してしまえば、それで良い。それだけで、事は十分以上の結果で解決される。

澄み渡る空の如き目の色を、何処までも続く深淵のような、深い森のような翡翠に変えて少女は時間との勝負に挑みに掛かる。

広い廊下を渡り、眼の前の扉を開いて、意匠が刻まれた色鮮やか窓を越え、月光が彩る祭壇側へと我が身を現す。

その姿は、誰がどう見ようとも天使のそれ。

圧巻される神秘の具現。万人の目を釘付けにする麗しき令嬢の姿。されど、此処には人など居ない。居るのは、少女の幸せを邪魔する不届き者と、その不届き者を罰する一匹の蜘蛛のみ。

がちや：と、教会の入口が開かれ、がちや、がちや、と不気味な足音を立てて、お呼びでない侵入者が無作法に、教会へと入場してくる。

「
深夜であろうとも目立つ丈のある黒衣。それでも隠し切れない：いや、隠すつもりなどさらさら無い。『刃を持った両腕』と、深紅の単眼。

あまりに太く、そして長い出刃包丁——右腕左腕それぞれに取り付けられた折れず曲がらずよく切れる二振り。

声も上げない、鼓動も鳴らない、冷酷で無情な完璧たる殺し屋人形。ただ眼の前の儂げな少女を斬り殺そうとする——本当の『馬鹿者』共。

「——神秘の拡張を開始。第五架空要素の流出を確認、吸引開始。神秘の内部増殖、神秘の漏洩防止を開始。」

少女の口から溢れる単語を、人形が理解する事はない。

それらはサーヴァントであるが故に発せられるものではなく、彼女が『究極の単一個体』——『彗星の原型』であるが故に発せられるものである。

一つの惑星における最強の生物。たった一体で一つの惑星を滅ぼし、喰らう事が出来る究極の捕食者。

この世界に存在するあらゆる物質よりも硬く、柔らかく、そして鋭いという外殻と、あらゆる温度、環境、状況に適應する事が出来るという驚異の適應能力。

サーヴァントになっても、その力だけは変わらない。

その身体の中に有る神秘は、発せられただけでその場を汚染する。故に、漏洩は出来ない。だが、それを逆に利用する事は出来る。

身体の内側で神秘を増殖させ、表面には出さず固定させる。

そうする事で、自身の能力を高めれば良い。

「神秘の固定、完了。侵食固有結界『水晶溪谷』の発動は不可。宝具『惑星浸食・星屑天嵐』の使用も不可。

戦法確定。疑似触覚発露・構造改変を開始。」

祭壇から人形を見下ろす少女。さながら、獲物を喰らおうと近付いてくる蜘蛛。

ずるり、ずるり——と、彼女の細い腕、その掌から、長く、太い銀色の何かが這い出て来る。

それは触覚。少女——もとい、O R Tという生物の本体、円盤から生える銀色の触手。

エネルギーを溜め込み爆散させる事もあれば、その触手でそのまま敵を喰らう事もある、彼女にとっての武器の一つ。

だが、此処は教会。暫しの間、自分とマスターが共に住む場所だ。汚す訳にはいかない。

その為に、どのようにして扱えば良いのか——彼女はそれを、瞬時に思考し、そして答えを導き出した。

「構造を『大鎌』に確定。戦闘、開始します。」

白銀の触覚はその形を大きく変え——湾曲の刃を持った大鎌へと生まれ変わった。

人形共は、確信した。

たった今、そしてこれから、背筋を凍らせる神秘が、自分達をグチャグチャに喰らう——

□ □

二人の人形の内——二人が揃いも揃って、背を振り向いて逃げ出した。

殺し屋にあるまじきその行動に、しかし誰も文句は言わない。言うことなど出来る筈もない。

相手は、人ではない。動物どころか、生命の枠からすらも逸脱して

いる究極無二の存在。

星を喰らう大蜘蛛。万物を己と同化させる絶望の山岳。山が生きて動いていると表現しようとは何ら変わりない。

そんな相手を前にして、どう戦えと言うのか。

「逃走…ですか。逃しませんよ、お人形さん。」

だが、残念ながら逃走なぞ叶わない。

蜘蛛が一度でも捕らえた獲物を逃がす事など、そうそうない。

蜘蛛の巣というのは非常に強固なモノであり、種類によつては、ハサミを使おうとも切れない程。

その巣に掛かったのが例え仲間であろうと、蜘蛛は喰らう。

時には大型の爬虫類や両生類、魚や鳥すらも蜘蛛の巣という罠に掛かり、抗えども虚しく、そのまま捕食されてしまうのだ。

「獲物を逃すなど…あつてはならない事ですから。」

少女は身の丈に合わない大鎌を右手に握ったまま、背を向けて教会から逃げようとする人形の方へと駆け出した。

少女は身軽。例え鎌を持っていようとも、それは変わらない。

いや、そもそも。

その鎌は少女の一部、もはや体も同然の代物。

障害など持たない正常な肉体を持つ少女にとって、手足を動かす事に微かな不備などない。

「大人しく狩られてください。私の食事になりますから。」

バタンツ！ と、大きな音と共に、開いていた筈の扉が固く閉ざされる。

一方の人形は焦り、右側の窓へと駆け出す。

一方の人形は直ぐ様、その持ち前の刃を持った両腕を振り上げ、扉を切り刻まんとする。

だが、

すぱっ——と、振り上げた両方の腕が、まるで紙を切るかのよう
に呆気なく、切り落とされて地面に落ちた。

”—————?”

痛み、などという無駄なものはない。

だが、それ故に人形は自らに引き起こった現象に理解など及ばず、ただ疑問符を浮かべることしか出来なかった。

「…痛覚が無いのですね。何とも羨ましい…ああ、それは私も同じでしたね。」

機械的で、感情など籠つていない声色で、少女は唾然とする人形の黒衣の襟を引っ張り、後ろへと押し倒す。

単眼が、改めて少女を捉えた

”
”

ガタガタと、人形の体が突如ど震え出す。

少女をその目で捉え、人形が抱いたのは——本来ならば持たない筈、感情”だった。

恐怖という——人間のみならず、動物も抱く——一般的で、それでいて原始的な感情を、人形は抱いたのだ。

人形の目が捉えたのは、決して儂げな少女などという、とても可愛らしいものなどではなく——あまりにも巨大な、巨大な、一匹の蜘蛛だった。

「綺麗な赤い目…まるで、トマトのようですね。」

首から上は綺麗に残しておきますね。」

しゃきん…と、大鎌の刃が、未だ震えの止まない人形の首筋へと近付き、

ざくつ——と、首を切り落とした。

切り離された首と体。本体ならば、それで終わる。

だが——肉体は、それでは終わらなかった。

大鎌によって切り離された肉体は、肉体を保ったまま翡翠の結晶となって少女の体へと吸い込まれて行ったのだ。

「人形なだけあって、深くない味わいですね。」

少女は、質素な味だという感想を残して、右側へと体を向ける。

人形は、既に窓との距離を縮めていた。

後は腕と化した刃を振るって窓を壊せば、少女から逃げる事が出来る。

「逃さない——そう、言いましたよ。」

ひゅつ——と、何か小さなものが空を裂いて飛び出した。
気が付けば、少女の右手には身の丈に合わない大鎌は無くなって
て、

その代わりに、掌より少し大きい程度の、先に穴が空いた歪な形を
した鉄が握り締められていた。

“!?”

人形は、その時から既に動けなくなっていた。

否、正確には——体の中に埋め込まれた小さな弾によって、体が
結晶と化してしまっていた。

パリン——と。

結晶は呆気なく砕け、その全てが欠片も残されず少女の体に吸い取
られていく。

ごろごろと、首だけが地面に転がった。

「さて、デザートと行きましょう。」

少女は、地面に転がった二つの首を抱え込み——

あーん、と小さな口を開いて、その綺麗な深紅の単眼へと…齧り付
いた。

第九話 「解明対談」

■ ■
吾輩は家無きマスターである。名前など無い。

：説明がこれだけど、まるで私が貧乏であるかのようだ。

訂正しておくが、私は別に貧乏などではないし、決して家が無く
なったという訳ではない。ただ、住めなくなっただけだ。

どこぞの冠位の人形師によって住処を乗っ取られたからだ。私は
決して悪くない。何ならO R Tも悪くない。

悪いのは全て、あの女だ。蒼崎橙子なのだ。絶対にそうなのだ。

奴に、世界の機微を感じ取る事が出来る五感などというチートが無
ければ、私は今頃、あのアパートで彼女と共に普段のような生活を
送っていただろう。

まあ、そんな、今更言ったところでどうにもならない愚痴は、兎も
角として。

私は現在、彼女を連れて三咲町の商店街にやって来ていた。

元々、彼女は教会にお留守番で、私が一人で買い出しに行くつもり
だったのだが、彼女が「私も連れて行ってください。」と言われたので、
連れて行く事にした。

思えば、彼女と一緒に何処かに出掛けるというのは、これが初めて
の事だったと、私は思った。

基本的に、彼女は家で食う寝るの両方してしていなかった訳だし。
まあ、そうさせたのは私なのだが。

彼女はサーヴァントだから太る事は無い…なんて事はないな。本
来、サーヴァントでも太りはする。

だが、彼女はあくまでもアルテミット・ワンだ。消化は早いし、何
より普段からエネルギーを消耗しているも等しい。

肉体こそ少女のそれだが、しかしその根底に有るのは星すら喰らっ
て尚も腹が収まらぬ究極の侵略生物だ。

歩行、呼吸、鼓動によってエネルギーは大きく消耗してしまう。何

故なら、大きな蜘蛛の魂が少女の体に完全に馴染んでいないから。

…とは言つても、少女の体と言つても、その体は——『根源』と繋がっているという、途轍もない地雷そのものなんだけれども。

「ます…いえ、叔父様。今日は何をかうのですか？」

「そうだな…住ませてもらう以上、合田教会の人達にも作る訳だから、かなり多くなるな。今日作るのはグラタンだから…」

「ぐら、たん？」

聞き慣れない単語に、彼女はこてんと首を傾げる。

ああ、そうか。すっかり忘れていたが、彼女はそういつた知識が有る訳ではなかったな。

聖杯戦争じゃないから、聖杯から知識を覗く事も出来ない訳だし。

「グラタンっていうのは、フランスって国の食べ物でな。ホワイトソースや、マカロニ、きのこや肉といった、様々なものを詰めて、オーブンで表面を少し焦がすように調理した食べ物の事だ。」

「焦がすのですか？ それは…本当に美味しいのですか？」

「美味しいぞ。暖かいし、色んな具材が楽しめる。O R Tも気に入るさ。」

「…そうですか。それは——楽しみ、ですね。」

ふわり——と、彼女が小さな笑みを浮かべた。

私は、彼女が浮かべたその笑顔を見て、きつと間抜けな面を晒しただろう。

今まで、殆ど無表情でいた彼女が、小さいものではあるが笑みを浮かべたのだ。

私はそれが——嬉しかった。

元はと言えば、私が彼女に料理を出したは、結局のところは自己保身だった。

自分の身を守る為、この町を守る為、彼女に料理を与えた。そんな、下賤な理由だった。

だが——今は、そんな事を忘れてしまいうくらいに。

彼女に料理を振る舞う事、彼女が私の料理を楽しんでくれる事に、確かな喜びを感じている。

彼女だけでなく、私も…少なからず、変わったのだろう。

正直に言つて、これがまだ数日程度のものでしかない事が不思議でならない。

一週間が経った程度のものなのに、私にはその一週間が数年を過ごしたかのような感じだ。

「――」

「っ…マスター？　どうかしましたか？」

気付けば、私は彼女の頭を撫でていた。

艶が有り、そして絹のように柔らかい透き通るような金髪に、普通の手を置いて、優しく撫でていた。

彼女は少し驚いていた。だが、私の手を跳ね除ける事はしなかった。

昨日の夜――悪夢に魘されていた私の頭に、柔らかく、そして暖かい感覚が有ったのを覚えている。

これは、ある意味では…いや、確かな意味での感謝だ。ただ、ありがとうという――感謝の気持ちだ。

「いや――ありがとう」

「…？」

「さあ、買い出しを始めよう。まずはホワイトソースからだ。」

私は名残惜しく思いながらも、彼女の頭から手を離し、商店街に有る店の一つへと入って行った。

彼女は少し呆然とした後、はっとして私の隣に並び立った。

これが――父親という感覚なのだろうか。親心、というものなのか。

中々――良い感情だ。

両親も親戚も居るが、しかし起源の所為で一度も名を呼ばれず、この魔術回路と起源の神秘のみに執着されていた為、こんな感情は抱かなかった。

まさか、子供としての感情よりも親としての感情が上回ってしまうとはな…私も歳なのだろうか。

二十歳後半って、歳に当てはまるのかな…でも、二十八や九くらい

から、おじさんやらおばさん言われるらしいからなあ。

となると、私が彼女から叔父さんと呼ばれるのはあながち間違いではないという事なのか…？

まあ、どちらにせよ、彼女に対して娘のような感覚を抱いているのは確かだ。私は自分が親になったようなつもりでいる。

うん、微笑ましいね。

そう思ったら、げし、と彼女から蹴られた。

何故…？

□ □

彼女との買い物が終わらせた後、私達は合田教会に戻り、そのまま二人で料理をした。

まさか料理まで手伝ってもらえるとは思っていなかったし、料理が出来るのかという不安も有った。

…というか、実際にその不安は的中し、色々とやらかし掛けました、はい。

気持ちだけ受け取り、私はそのまま料理を始めんとした時、「では私が手伝いましょう。作ってもらうのですから、それぐらいは。」

そう言つて、文柄さんが手伝いを名乗り上げてくれたのだ。

だが——本題は、恐らくそうではないと、私は理解していた。

「それで——彼女は、いったい何者なのですか？」

マカロニを茹でている私に、文柄さんは真剣な表情で問い掛ける。

まあ、そりや聞かれるよな…

「…私が召喚したサーヴァントだ。」

「……………貴方、自分が何をやらかしたのか、分かっています？」

「……………私自身、召喚出来るとは思ってもいなかったんだよ。ただ、出来るのかなーと思つてやってみたら…」

「呼んでしまった、と…」

はあ…と、文柄さんはため息を吐きながら頭を抱えた。

だが、それも当然だ。

英霊召喚——久遠寺有珠が持つ、魔術世界の中に存在する神秘の

一つである『童話の怪物』、その中でも特に強力な三体をも越える神秘の御業だ。

と言っても、英霊召喚は万能の願望機とも言われる聖杯からのバックアップがあつてこそ可能なものであり、本来であれば人間一人がバックアップ無しに召喚など絶対に出来ない。

聖杯戦争が無いこの世界で、英霊の存在は圧倒的だ。

過去の英雄を現代に喚び出す技術——それによって喚び出された『英霊』は、現代の魔術などで倒せるような楽な相手ではない。

あの最弱英霊の「復讐者」ですら、人間になれば必ず勝てる。

それ程までに、英霊という存在は凄まじく、奇蹟に等しい神秘なのだ。

「…それで、何の英霊なのですか？ 正直、あのような少女の英雄は見た事も聞いた事もないのですが…」

(……な、何て答えれば良いんだ——!?)

フォーリナーって答えるか？ いや、答えられる訳がない。そんな事は絶対にできない。

フォーリナー、降臨者だぞ。そんなクラス名を聞けば絶対に斬り捨てようとする。

というか、そうした場合はこの合田教会が潰れてしまう…！ それだけは絶対に避けたい。

ただでさえエクストラクラスという異端も良いところのクラスなのに、そのエクストラクラスの中でもムーンキャンサーに並ぶか、それ以上のヤバいクラスとも言えるクラスだぞ、フォーリナーは。

何せ外宇宙に蔓延る邪神、この世界の宇宙とは全く別の宇宙に存在している最悪にして究極の支配者達と接触、もしくは恩恵や声を預かった者のみが成る事が出来るクラスだ。

特にO R Tの場合、彼女自身が宇宙に在る仮想の惑星雲から飛来してきたアルテミット・ワンだ。

この時代にもO R Tの存在は確認されている。フォーリナーの事を話せば絶対に細かく問い詰められるだろう。

……ちよつと、アレ試してみようかな。

(ORT。聞こえるか?)

そう——念話だ。

ORTが霊体化してくれたなら良かったのだが、生憎、今は律架さんも唯架さんも居る状態だ。

というか、二人共ORTの事を結構、いやかなり強く警戒しているので、霊体化させる隙なぞ作らせてはくれない。

ので、念話だ。

(はい、聞こえています、マスター。どうしたのですか?)

(えっと…ORTのスキルについてなんだが)

彼女は汎人類史のORTではなく、あくまでも異聞帯のORTだ。そんな異聞帯のORTには——ある強力なスキルが有る。

(『パルセイティング・ヴァリアブル』は使えるか?)

パルセイティング・ヴァリアブル——最悪の異聞帯、『空想樹海紀行オルト・シバルバー』におけるORT総力戦の終盤にて使われるスキル。

クラスを自在に変える事が出来るスキルで、七騎＋フォーリナーという、ターン事にそれぞれ八クラスのどれかに変化するという厄介なスキルだ。

要するに、『役を羽織る者』の特性をスキルにした感じ。

パルセイティングは拍動という意味を持ち、ヴァリアブルは変わりやすい、もしくは変動出来る、可変的な、という意味を持つ。

拍動とは心臓がポンプのように収縮と拡張を繰り返す事。

つまり、この二つを言い換えてORTに当てはめると、『常に靈基が変動する』という事になる訳だ。

(生体情報確認。能力使用の可能・不可を再確認——『パルセイティング・ヴァリアブル』の使用、可能です。マスター)

(なら、今から使用してくれ。クラスは…セイバーで頼む。)

(了解しました。パルセイティング・ヴァリアブル——使用)

さて…かの幼き王様には悪いが、嘘を吐かせてもらおう。

「……です」

「はい?」

「幼少期の、アーサー・ペンドラゴンです…」
「ごめんね、アルトリア・リリイ。」

第十話 「魔法使いの到来」

■ ■
吾輩は教会に居候中のO R Tのマスターである。名前など無い。

昨日、私は合田教会の司祭代理人にして神父である文柄詠梨さんに、彼女——O R Tの事を、『幼少期のアーサー・ペンドラゴン——所謂、アルトリア・リリイであるという虚偽の事実を伝えた。——我ながら無理矢理な嘘だと理解しているが、しかし彼女はO R Tですと、馬鹿正直にこの真実を伝える訳にもいかない。

O R Tはこの世界にも存在している。都市伝説的な話しとして認知されてはいるが、その恐ろしさは決して偽りなどではない。

それなりの信頼と信用を持たれている私から伝えられた言葉を嘘ではないと信じてくれる者達からすれば、私はアルテミット・ワンを従僕にしている危険人物になる訳だ。

そして、もしもそれが魔術協会に知れ渡れば、恐らく私と彼女は魔術協会のみならず、埋葬機関からすらも狙われる事になるだろう。

良くて暗殺、悪くてO R T共々ホルマリン漬け。まあ、彼女に限ってそのような失態は犯さないだろうが。当然、私とて簡単に死ぬつもりなどないが。

だが、もしも私が死んでしまったらという事を考えると——やはり、あの夢が頭の中に浮かんでくるのだ。

：もし、あの夢が正しければ、私が死ねば彼女は暴走し、本来の姿を取り戻してこの世界を喰らい尽くそうと動き回る。

そして、その果てに——あの、とんでもないサーヴァントが召喚される。

恐らく、クラスはセイバーだ。真名も何となく予想がつく。あの裂かれた銀河の空から出た青空が、銀河の空を裂いた「剣」が、何よりの証拠だろう。

そもそも、アルテミット・ワンを殺す事が出来る存在など——型月の世界に四人しか居らぬのだ。

一人は黒い銃身を持つ、最古にして最新の人類。
一人は万物の綻びを見据える根源接続者の本体。
一人は万象従える奇跡にして少女になった全能。
一人は世界を滅ぼすが、万物を切断出来る剣士。
四人の内の二人は根源接続者、後の二人は今より遙か先の未来における英雄達だ。

彼らでなければ、アルテミット・ワンを倒す事は出来ない。寧ろ彼ら以外には、どうやっても倒す事など叶わない。

例え魔法使いが居ようとも、決して倒す事は出来ない。これも絶対だ。

アルテミット・ワンという存在は、それだけ強大で、最悪な存在なのだから。

まあ、今はそれについてはさておいて。

私は今――

「こうして君と対面するのは何年振りか。」

第二魔法「並行世界の運営」の使い手にして時計塔創設の加担者が一人――「キシユア・ゼルレッチ・シユバインオーグ」と、久しぶりに対面していた。

「何年振りと言う程、時間は経ってませんよ。言うて二年程度です。」

「二年か。随分と短かったな。私も歳という事か。」

「…否定はしませんよ。事実、貴方はマジでお年寄りだ。動けるし戦えるお年寄りではありませんが。」

「全盛期より衰えはしたがな。だが、最近の若者に負ける程、落ちてはいない。」

「言つとききますけど、戦いませんからね。魔法の後継者候補になるなぞ、御免被る。」

「ああ、分かっているとも。君はそういう人間だからな。」

現存する五つの魔法の一つ、『並行世界の運営』を操る魔法使いにして、何処にでも現れる爺さんことゼルレッチ。

魔導元帥や寶石翁、はたまた万華鏡など。様々な異名を持っており、かつて地球に現れた月のアルテミット・ワンである『朱い月のブ

リユンスタッド』を単独で仕留めた偉大なる人物だ。

人理の肯定が主の Fate 時空、人理の否定が主の月姫時空の両方に出てくる彼は、月姫時空においては死徒二十七祖の第三位に位置している。

月姫時空では、朱い月との戦闘で吸血され、死徒になってしまったらしい。

しかし眼の前の彼は死徒二十七祖ではなく、魔法使いとしてのゼルレツチだ。

まあ、爺さんが死徒でもそうでなくても、どっちでも大して変わらないが。

一応、私と彼は何でか分からないが交友がある。本当に何でか分からないが。

「それで——大蜘蛛の様子はどうかね？」

愉快愉快。そんな感情が見え見えの、完全にこっちの状況を楽しんでいる笑みを浮かべながら、ゼルレツチの爺さんは私に彼女について問を投げてきた。

貴方なら、そのくらいは視えるだろうに。何故、わざわざ私に聞いてくるのやら。

「普通ですよ。普通にぐ飯を食べて、普通に寝て、普通に話し合って、普通に暮らしている。最近では、笑ってくれる事が多くなった。」

「くくっ…そうか、普通か。あの蜘蛛が、普通の生活をしているのか」

心底面白い、といった風にゼルレツチの爺さんは笑う。

だがまあ、それもそうか。

オールの雲から飛来してきた彗星のアルテミット・ワンが、少女の姿で人間と同じ生活をしているのだから。

数多の並行世界、即ち様々な世界の未来を見ているゼルレツチの爺さんからしてみれば、それはとても面白い『未来』なのだろう。

「仮、などの分類には当てはまらない。この世界線は、正しく特異点に当てはまるぞ。」

「ええ…特異点って、マジですか？」

「本来ならば存在しない過去。それが魔術世界における特異点。ならば、別段おかしな話ではなからう？ 何せ、本来ならばお主も大蜘蛛も存在せぬのだからな。」

「あー…そういう事か。」

本来とは違う過去。

確定されていた筈の歴史が改竄された過去——魔術の世界において、その世界の事を『特異点』と称す。

ゼルレツチの爺さんが曰く、この世界は私とORTが存在する事によって微弱な特異点と化しているようだ。

まあ、恐らくは俺というよりもORTの存在の方が大きいだろうが

…

「抜かしおる。お主も原因の一つだ、馬鹿者。」

「ええ…？」

「太古より存在する忌み数もたらす膨大かつ濃厚な魔術回路の質に加え、前代未聞の『無銘』の起源。『其処に在るのに其処に無い』という矛盾状態を体现しているお主が、イレギュラーに当てはまらない訳がなからうよ。」

「え、俺の起源ってそんな凄いですか？」

「ある種、『虚無』に通ずる起源だからな。」

ゼルレツチの爺さんから告げられた衝撃の事実には、私は驚愕せざるをえなかった。

ただ名前を付けられず、与える事も出来ないだけの起源だとばかり思っていたが、まさか『虚無』の起源に通ずるものだったとは。

『虚無』の起源——それは、両儀式・巫条霧絵・浅上藤乃の三人が持っている起源。

そのどれもが、『何らかの特定行動を取らなければ生の実感を得る事が出来ない』というものだ。

両儀式は、迫る死に抗う事で生の実感を得る。

巫条霧絵は、自ら死ぬ事で生の実感を得た。

浅上藤乃は、人を殺す事で生の実感を得る。

それら全てが、そうする事でしか『生の実感』を得る事が出来ない。

そうしなければ、自分が生きているという実感を持つ事が出来ないのだ。

……俺の起源との関係性、有る？

「お主には生死の区別など要らんだろ。存在している証が無いにも関わらず存在しているという、矛盾が服を着て歩いている様な人間なのだから。」

まさか矛盾呼ばわりされるとは。心外である。

「マスター。唯架さんが呼んでいます。」

そんな事を思っていると、彼女が部屋に入り、ゼルレツチの爺さんを目を合わせる。

その瞬間、

「触覚発露。物体構成を鎌に確定。」

彼女の掌から出現した白銀の触手が、即座に銀色の大鎌へと形を変えた。

戦闘態勢——明らかに、殺す気だ。

「若いな。だが、それも良い。人として生きるなら、これも必要だ。」

ゼルレツチの爺さん——否、『魔法使い』キシユア・ゼルレツチ・シユバインオーグは椅子から腰を上げて立ち上がった。

「来るといい、小さな蜘蛛と名も無き主。」

魔法使いは、笑みを崩さずまま、私と彼女に挑戦を叩きつけた。

「勘弁してくれよ……」

私は、その言葉を零さずにはいられなかった。

第十一話 「無銘と蜘蛛と魔法使い」

■ ■
視点は個人ではなく、天（もしくは第三者）へと移り変わる。

場所も変わり、つい此間、蜘蛛が冠位の人形師が作り出し、送り出してきた刺客を蹂躪した舞台である合田教会ではなく、三咲町で人が集まる事のない開けた場所へと、二人の人間と一匹の大蜘蛛は移動した。

冷たい風が、名も無きマスターの頬を撫でる。緊張から溢れる冷や汗が、余計に冷たい風を強く感じさせる。

マスターとサーヴァントとしての初戦闘。しかし、その相手となるのは根源に届き、魔法を得るに至った老練の魔法使い。

魔術王ソロモンの弟子の一人にして、長き歴史を紡ぐ魔法使い。

あらゆる可能性を見届け、あらゆる可能性を見分け、あらゆる可能性を目視し、過去に月の王すら撃退した偉人。

キシユア・ゼルレツチ・シュバインオーグ——宝石魔術の祖であり、真祖の王を討った男である。

対して——それに立ち向かうは、強化やら変化やらといった一般的な魔術しか扱えない名も無きマスターと、全力を出してはいけない事を強いられる大蜘蛛の少女だ。

これが、彼女だけであるならば十分、いや十二分に釣り合った勝負になる事だろう。

水星のアルテミット・ワン。ある意味、月より地球に来訪した真祖の王と同類に当てはまる、その星における最強の生物だ。弱体化してはいるが。

だが：名も無きマスターは、無銘の魔術使いだけは、やはりどうやっても翁と蜘蛛には釣り合わない。

片や魔法使い。片や英霊。それに対して、彼はただの魔術使いである。

戦力の差など、あまりにも掛け離れている。正しく天と地の差と言

えるだろう。

初歩的な魔術のみしか扱えず、しかも魔術の精度も決して高いとは言いがたい。

そもそも戦闘すら碌に経験した事がない、ただの魔術使いだ。

そんな彼に、特筆すべき点は何かと問われれば、答えられる点は一つだけ。

現代で尚も色褪せぬ神秘を内包した、超高密度且つ膨大な魔力を生み出す魔術回路だ。

「——回路鳴動」

ゴウンツツツ!!!

誰もを祝わぬ無情の鐘が煩く鳴り、晴天と草原全体へと響き渡る。

起動するのは、僅か一本の魔術回路。心臓に七本と、両腕・両足・両目の部位にそれぞれ刻まれている六本の魔術回路の内、心臓に刻まれている七本の魔術回路の内の一本。

使用するのは強化の魔術。身体能力・身体強度を高めるだけの平凡的で一般的な、質素な魔術。

心臓に刻まれている七本の内の一本を起動しただけで、身体全体に超越的な強化の魔術が行き渡る。

回路は皮膚に浮かばず。変化も見られず。一見すれば、何かが起こったなど簡単に理解は出来ない。

ただ派手な鐘の音を鳴らしただけだと思うだろう。

彼と対峙したのが凡人か、それともただの魔術師であれば油断を極めるだろう。

が、しかし。

「まさか、お主から先に来るか——!」

彼をよく知る者達にとっては、それだけで警戒を最大に高める。

宝石翁は、彼の愚策を大いに笑った。まさか、サーヴァントではなくマスターである自らを特攻させようなど、誰が思うか。

だが——愚策は愚策でも、決して嘲笑う事の出来ない恐ろしい愚策だ。

バゴツツツ!!! と、彼のスタートダッシュによって鈍い音と共に、

地面に大きな罅が刻まれる。

大気を揺るがし、風が一気に吹き荒れる。

台風が近付いてきているかのような、そんな強い風が、白銀の大鎌を持った少女の髪と服を揺らした。

「直線的だが——恐ろしいな。」

音速と呼ぶに相応しい速度で突撃をかましてきた魔術使いの攻撃を、翁は彼の背後を取る事で躲した。

空間転移の魔術。ある種、魔法に近しいともされる魔術だ。

猪突猛進の一撃は回避で終わった——

「ッ！」

と、思われた。

ブオンツツツ!!!

空を切り裂き、刀が振るわれたのではないかと錯覚してしまう程の鋭い音と共に、翁の眼前へと蹴りが襲い掛かる。

左足を強く地面に叩き付けて自らに急ブレーキを掛け、そのまま左足を軸にして右足を大きく上げ、翁の顔面を蹴り飛ばしてやろうと回し蹴りを行ったのだ。

「ほう」

だが、意を突こうとしたそれすらも空振りで終わる。

翁は既に彼の背後ではなく、元いた位置に立っていたのだ。戻っていたのだ。

「魔術回路の一本でそれか。つくづく恐ろしいな。」

「お褒めに頂き恐縮ですよ。当たりませんでしたけど——俺のは。」
直後、翁の視界の外から刃が襲い掛かった。

白銀の大鎌。蜘蛛の内部から出現した疑似触覚が、武器へと形を変化させたもの。もしくは、彼女自身。

自らの肉体の一部を武器として扱ってはいるが、それは決して重くはない。

腕を上げる、足を上げるのに苦勞する人間がそう居ないように、彼女にとっても大鎌を振るう事は手を振るう事に等しい簡単な事だ。

元の俊敏性も相まって、背後を取るなど造作もない。

「Leerer Rohsteine」

ガキインツツ!!!

火花は散った。だが、翁の首が大鎌によって宙に舞う事はなく、また綺麗な鮮血が地面に飛び散る事もなかった。

宝石翁——— 宝石魔術の祖であるゼルレッチが扱ったその宝石は、この世に存在するどの原石よりも輝く古の宝石に当てはまる。

『原石』の『原石』。即ち、『原石』における『原典』となる宝石だ。
「ダイヤモンドっ……!」

無銘のマスターは苦虫を噛み潰したような表情で、その原石の名を吐き捨てる。

ダイヤモンド。または金剛石。天然に存在する物質の中で三番目に硬いとされ、そして宝石の中でも特に有名な宝石である。

ゼルレッチが使ったのは、ダイヤモンドの中のダイヤモンドにして、太古のダイヤモンド。

それに込められた魔力が生み出す属性は、四元素に当てはまらぬ『空』の属性。

物質化した“ソレ”は、弱体化したアルテミット・ワンの攻撃を容易く防いでみせた。

「rotter Rohstein」

深紅の宝石が砕け散ると共に、ゼルレッチとORTを中心に間欠泉の如き勢いで爆炎が吹き出す。

ルビー。または紅玉。ダイヤモンドに次いで硬いとされる宝石であり、灼熱を思わせる深紅が特徴の宝石だ。

それは、原石となるものでなかりうと魔術として使用すれば、正しく爆弾の一言に尽きる威力を発揮する恐ろしい代物だ。

例えサーヴァントであれ、そんなものを至近距離で喰らえばただでは済まない。

それが——— 通常のサーヴァントであればの話したが。
「殺ります」

臆せずに、蜘蛛は握り締めた鎌を容赦なく振るう。

爆炎は蜘蛛を焼き払う筈だった。だが、爆炎はそのような役目を果

たす事など一切なく、呆気ないままに蜘蛛に喰らい尽くされたのだ。「強化魔術……大蜘蛛にも掛けていたか。」

翁は焦る事もなく、再び笑った。

ブンツ!! と、振るわれた鎌はまたも翁を捉える事はなく、翁は今度は上空に浮いていた。

「空まで飛ぶか……これだから魔法使いは面倒臭い。」

上空に浮いたゼルレッチを見上げながら、遂に砕けた口調でORTのマスターは愚痴を吐き捨てる。

ORTはマスターの隣に並び、「どうしますか、マスター？」と、彼に選択を問う。

「……あくまで模擬戦のようなものだから、宝具は使用しない。とはいえ、舐められたままなのも釈然としないから、全力で行く。」

「了解。」

「作戦は——」

□ □

「響け、響け、響け。我が鳴らすは終わりの音、世界を滅ぼす鐘の音。」
詠唱と共に、男の体内に眠る回路が目を開く。

ゴウン……

一本。鐘の音が響く。

ゴウン……

二本。鐘の音が響く。

ゴウン……

三本。鐘の音が響く。

「我が身こそ終末の時計。十三の鐘を鳴らす、忌避されし終端。」

ゴウン……ゴウン……

五本。鐘の音が二度、鳴り響く。

ゴウン……ゴウン……

七本。鐘の音が二度、鳴り響く。

ゴウン……ゴウン……ゴウン……

十本。静かな鐘の音が三度、鳴り響く。

大気が震える。地面が恐れる。惑星が——唸り声に似た大きな

悲鳴を上げる。

溢れ出し、地面を伝って世界を縦横無尽に奔っているのは蛇に取り憑かれてしまった代行者をも越える、超弩級の質を誇る莫大かつ濃厚な魔力。

根源というエンジンに繋がっていないにも関わらず、唸りを上げて走り出さんとする暴走車の如きその魔術使いの「魔力」に、抑止力が驚愕している。

滂沱するのは魔力の涙。その一滴一滴が、津波を引き起こす程の大きな涙を誇る、恐怖の権化。

それが引き起こすのは、決して完成度の高くない、ただの「見様見真似」の大魔術——！

「滅びの時は来た。滅びの子は墜ちた。

現在は終わった。未来は朽ちた。此処が、世界の死時だ。」

心臓が嫌に速く高鳴る。顔から血の気が引いていく。冷や汗が滴のように流れてくる。

それも当然だ。何せ、これまで一般的な魔術しか使った事がない魔術使いが、一度足りとも使った事がない上に、ただの見様見真似でしかないだけの『大魔術』を行使しようとしているのだから。

しかも、普段なら使っていない筈の魔術回路すら無理矢理に開き、酷使しているのだ。

身体的な負荷は、想像を絶するものだろう。

「まさか、見様見真似とはいえ大魔術まで使用してくるとはな。本気、という事か——」

ゼルレツチは笑い——そして、四つの宝石を背に現した。

一つは無色透明の宝石——ダイヤモンド。

一つは深紅色の宝石——ルビー。

一つは群青色の宝石——サファイア。

一つは翡翠色の宝石——エメラルド。

空のダイヤモンド、爆炎のルビー、大海のサファイア、大地のエメラルド。

世界四大宝石とも言われるそれらには、第二魔法『並行世界の運営』

によって開かれた『孔』から、無限の魔力が込められており、常に流転し続けている。

「さて、お前はどこまで耐えられるか——見物だな。」

廻る、廻る、廻る。

背に浮かぶ宝石が、何度も何度も回転し、眩い光を放っている。

空・火・水・地という、本来の四元素ではない組み合わせの宝石魔術。

無限の魔力供給と流転に耐える事が出来るというその時点で、その宝石達が規格外である事を物語っている。

宝石が砕け散り、混ざらぬモノが放たれる——

空は燃え上がり、火は静まり、水は震え出し、地は動かず。

不可解な事象。理解不能の現象。本来ならば混ざらぬ筈だが、しかし『元を正せば同じモノ』という理論の元に発生する仮想の質量。

虚構ではなく『現在』より導き出された、本来ならば絶対に起こり得ないし発生しない『不可思議の嵐』——！

「エーテル・ドラムカー」

だが、『ソレ』はあくまでも現代の魔力によって作られたモノである。

故に、彼女がそれを吸収する事が出来るのは、何ら可笑しいことではない。

「」

ほんの一瞬。本当に僅かな、刹那の一時。

——「彼女」は、『蜘蛛』の腕を、現して、振り下ろした。

第十二話 「学習／経験者」

■ ■
吾輩は死にかけのマスターである。名前など無い。

先日、私とORTは第二魔法「並行世界の運営」を操る宝石魔術の祖にして魔導元帥「キシユア・ゼルレツチ・シユバインオーグ」を相手取った。

マスターである私自身を囮にし、ゼルレツチの爺さんが魔術を使った瞬間にORTのエーテル・ドラランカーを使用して攻め込むという、聖杯戦争や実戦では普通なら絶対に行わない愚か極まる作戦で、魔法使いを相手取った。

結果としては、勝利を手にする事が出来た。勝利と言っても、とても歪で曖昧な勝利ではあるけれど。

「——ッ、ア……、そ……」

上手く声が出せない。何とか絞り出した僅かな言葉も、片言で聞き取りにくい。

体が熱い。血管が暴れている。

心臓が破裂してしまいそうな程に、内側から激しく殴り続けている。

見様見真似の大魔術行使の代償。ただでさえ扱いが難しい大魔術を、完璧な形ではなく見様見真似の直感で作動させようとした結果がこれだ。

普段なら使う事のない魔術回路を無理矢理にこじ開け、しかも全力で動かし続けたのだ。そんな馬鹿げた行為をしたのだから、代償が無い訳が無かった。

人で例えるならば、体力が無い上に運動も碌にした事が無い素人を準備運動も無しに走らせるようなものだ。

そんな無理を、私はした。死にかけて仕方ない事を、自分の体に強要させたのだ。

結果として、私の体はズタボロだ。外側こそ怪我は無いが、体の内

側はくしゃくしゃになった紙くずのようにボロボロで、起き上がる事すらままならない。

「マスター、マスター」

彼女の声が聞こえる。感情の起伏など無かった筈の音が、僅かに揺れているのが分かった。

慌てているのか、それとも驚いているのか。どちらにせよ、ほぼ無感情だった彼女が感情を顕にしている。

こんな為体、こんな瀕死体ではあるが、私はそれに驚かざるをえなかった。

「ああ……」

大丈夫だと言う事も出来ない。いやそもそも、喋ることすら出来ない。

乾いた言葉が、僅かに溢れるだけだ。

「マスター、生きていますか。生きているなら、頷いてください。何か、喋ってください。」

(はは…それは、随分と難しいな。今は全身ボロボロだ。)

私は、何とか念話を試みた。正直、これ以外に彼女と言葉を交わす方法が無い。

体は思うように動かないし、声も上手く出せない。つまり、今の私は彼女の要望に答える事が出来ないのだ。

彼女は私の念話を受け取ったのだろう。私が生きている事を知り、彼女は安堵したように息を吐いた。

「念話は出来るのですね…良かった。」

(何とかな。だが、体は動かせないし、声も出せない…文字通り、瀕死の状態だ。面目ない。)

）

「全くです。」

容赦ない批判が、私に突き刺さる。まあ、そうだろうなあ…

「マスターを囮にする作戦など、マスターにあるまじき作戦です。馬鹿なのですか？」

(おう…厳しいな。まあ、君の言う通りだから、何も言えないが…)

マスターが死ねば、サーヴァントは消滅する。これは受肉しない限り絶対に変える事の出来ない現実であり、事実だ。

マスターからの魔力供給を絶たれば、サーヴァントは現世に存在する事が出来なくなり、消滅して座に戻る事になる。

正直、彼女にもそれが当てはまるのかは分からないが。

何せ、彼女は異聞帯でカルデアと戦った際、英霊の座に干渉して侵食を始めていたのだ。

そんな彼女に、座の常識が通じるのかは定かではない。仮に消滅したとしても、何らの理由付けで復活するかもしれない。

…だが、その場合は最悪の事態になってしまう。

この世界が終わってしまう。この世界が彼女に喰われてしまう。そして——彼女が殺されてしまう。

何としても、それは避けねばならない。

まあ、今回私は自らその愚行を選んだ訳なのだが。馬鹿と罵られても仕方ないだろう。

「…あのような作戦は、二度と考えないでください。」

（ああ、そうだな。君にそんな顔をさせるのは忍びない。二度としないと誓うよ。）

「…はい。マスターを、信じます。」

（ありがとう、ORT。君の信頼に答えるよう、努力するよ。）

未だ数週間という短い期間ではあるが、私と彼女はそれなりの信頼関係を築く事が出来ているようだ。

そうでなければ、彼女から私を信じる、などという嬉しい言葉は出てこない筈だ。

私としても、それは実に嬉しい事だ。

（あー…それで、ORT。少しお願いがあるんだが…）

「？ 何ですか？」

（体が動かないから、合田教会まで運んでほしいんだ。）

「了解しました。では、マスター。少々、失礼します。」

仰向けで地に伏せる私の首の後ろと膝の後ろを彼女の細い手で抱えられ、私は軽々と持ち上げられた。

流石はサーヴァントか。分かってはいたが、彼女のステータスはかなり高いようだ。

「早く帰りましょう。マスターの回復をしなければなりません。」

（うーん…どうだろうな。外側なら兎も角、体の内側の回復となれば、相当な治癒魔術の使い手が居ないと難しいかもしれないな。）

「……吸収した魔術情報の確認を開始。寶石魔術・強化魔術の二つを確認。強化魔術の情報の統括を完了。逆算解析を開始。」

強化魔術は、魔術回路から発生する魔力を用いて身体能力と身体強度の両方を強化する魔術である。それ以外にも武器に使う事も出来るが、終点は全て「元から備わっている特性を強くする」というものだ。

身体能力と身体強度の強化とは、即ち魔力による内臓の強化である。

魔力によって筋肉を強化する事で腕力や脚力を上げる。それが、強化魔術が至る答えだ。

では、治癒魔術とは一体何か？

治癒魔術とは文字通り、傷を癒やす魔術の事である。

傷口から出血を止める程度のものから、欠損した肉体を再生させるという高度なものなど幅広い。

その治癒魔術を解析したら、それが何を使い、どうやって傷を治しているのだろうか。

強化魔術が魔力を用いて特徴を強化する魔術であるならば、治癒魔術は魔力を用いて細胞に干渉し、傷を治す魔術である。

強化魔術と治癒魔術。そのどちらもが、「魔力で肉体に干渉する」という共通点を持っている。

ここで、ある考えを浮かべてみよう。

「どちらも魔力で肉体に干渉するという共通点があるならば、片方の魔術を解析すればもう片方の魔術の知識を得られ、最終的にはその魔術を習得する事が出来るのではないか？」——と。

傍から見れば、あまりにも無理矢理な思考、論理と言えるだろう。だが、今からそれを行おうとしている者は、その外野の認識を壊す

存在だ。

解明されぬ暗黒物質の微生物を用いてサーヴァントを苦しめた彼女は、その点から肉体に対する知識を持っている。

それに、逆算解析を重ねてしまえば。

答えから問題に至ろうとする解析方法で、出自と共通点を確認する事が出来れば。

「——解析完了。治癒魔術の習得を確認しました。」

別の魔術の習得など、造作もない。

だが、それは決して楽な方法などではない。

しかし、悲しきかな。それを行ったのは魔術使いでも、魔術師でもなく——たった一人の、化け物だ。

（——はは、マジか。本当にすごいな、君は。）

だが、しかし。

無銘の男は、決して怪物を恐れる事など無く。

ただただ、その常軌を逸する行動を凄いと、思っただけだった。

□ □

「良いんじゃないか、別に。そんなカタチが有っても。」

場所と視点は大きく変わる。

其処は、荒れ果てた大地。

澄み渡る青空に似合わない濁った空気と、色を失った荒れ地。

そして、その世界に建てられた一つの小さな家の中で。

後ろを結んだボサボサの黒髪と色を灯していない灰色の瞳、顎に生えている無精髭が特徴的な男が、独りで呟いた。

最初から言っておくが、この男の出番は今回が最後だ。決して、無銘の男と彗星の少女の物語には関わらない。

「おれも似たようなもんだったからな。まあ、おれとしてはストレスばっかりの日々だったが。」

その男は、遙か先の未来を生きていた『生き残り』だった。

その未来においては旧い人間だが、現代においては未来の人間と呼ぶ事が出来る程の未来で生きていた人間だった。

男もまた、あの無銘の男と同じような人間だった。

「名前が無いのもそうだな。おれも本名は無くなった。まあ、あいつみたいに名前が付けられなかった訳でもなかったけど。」

男は、荒廃した世界で天使のような少女と暮らしていた。

無銘の男が、少女の姿をした蜘蛛と暮らしているように、かつて男は天使のような少女と暮らしていたのだ。

「おれとあいつの生活に比べたら、まだ良い方ではある。いや、寧ろあっちの方が幸せなのかもしれないな。」

でも、まだ波乱が有る。

「おれが出張る事じゃないし、あの子がデカくなったら騎士様が出る。そうなる前に、あいつが何とかしなければならぬ。」

「難しい事だ。おれも一応は経験者だが、こっちは元から世界が壊れてた。だから何も言えない。」

「おれからは、ただ頑張ってくれ、て事と、死なないように生きろって事ぐらいの言葉しか送れないが……まあ、なるようになるだろ。」

煙草を吸いながら、男は自虐的に笑う。

天使のような少女を幸せにする事が出来なかった男は、己を嘲笑った。

第十三話 「相談／誘拐」

「戻ってくるだけでなく、私や有珠まで含めて話したい事が有るなんて…どんな厄介事を持ってきたのよ———橙子」

三咲町に在る山の奥地に建てられた、魔女の家———またの名を、「久遠寺邸」。

その久遠寺邸のリビングルームにて、三人の女性が、三人の魔術師達が集っていた。

一人は久遠寺邸の主人にして蒼崎青子の魔術師としての師である久遠寺有珠。

一人は久遠寺邸に住まう者の一人にして久遠寺有珠の弟子である蒼崎青子。

一人は封印指定の魔術師にして冠位の人形師、そして蒼崎青子の実姉である蒼崎橙子。

一人は無表情。一人は不満げ。一人は含みの有る笑顔。その空間の雰囲気は、正しく殺伐としたものだった。

「察しが良くて助かるよ。そうだな…うん、単刀直入に結論から言ってしまうおうか。」

君たちの知る無銘の彼が、遂に封印指定にされた。」
やや楽しげに。しかし、焦燥も込められた笑みを、引き攣った笑み

浮かべながら、蒼崎橙子は彼女達に衝撃の事実を告げた。
「…!」

「な、なんですって!?!」
有珠は閉じていた目を開き、青子は大袈裟な程に驚いた。

身を乗り出す様な勢いで、青子は「ちよつと、どういう事よ!?!」と橙子に問い詰める。

「落ち着け、青子。今から順を追って説明していく。」
橙子は実に珍しく、青子に対して攻撃的な態度を取らなかった。

酷く冷静に、青子に対して落ち着くように宥める。その姿は、彼女

達の関係を知っている者が目を見開く程の事である。

何せこの蒼崎姉妹、喧嘩をすれば殺し合いに発展してしまう程に最悪の仲なのだ。

冗談抜きで仲が悪い。嫌悪というよりは憎悪の領域を達してしまう程に仲が悪い。もしくは凶悪。

そんな姉が、特に青子に対して攻撃的な橙子が、今や皮肉の言葉も吐かずに青子を宥めている。

天変地変が起きたのではないかと思ってしまう程の現象である。

「な、なによ…今日はえらく落ち着いてるじゃない。」

「言い争っている暇もあまり無いからな。事は急を要する。」

青子は嫌に冷静な橙子の言葉を聞き入れ、意外だという表情を包み隠さず顔にしながらソファへと腰を降ろす。

「それじゃあ、説明を始めよう。」

そうして、事は伝えられる。

「まず、彼が封印指定にされてしまった原因だが…魔術協会としての理由はこうだ。『英霊と化した大蜘蛛を呼び出し、付き従わせている』から。」

「ああ、二人は知らなかったな。そうだ、彼は英霊…サーヴァントを召喚した。本来ならば喚び出せない筈の英霊を、彼は喚び出し、そして従わせている。しかも、それが都市伝説の蜘蛛と来た。」

「久遠寺有珠、君は知っているかい？ ああ、噂程度でも知ってはいるんだな。なら十分だ。そう、かつて時計塔のお偉い様方が向かい、結果として返り討ちになったと言われる、あの蜘蛛だ。」

「南米に住み着いてるとされる大きな蜘蛛。あらゆる全てを結晶にして喰らい、培い、目覚めた時には地球を喰らう最強の生命——極限の単独種。あの宝石翁から、そう聞かされたよ。」

「彼が喚び出したのは、I Fの世界線における蜘蛛らしいが、それでもサーヴァント。その力は脅威的であり、本来ならば存在しない筈の存在だ。」

「私の五感が機微を察知したので、私は彼の元に訪れ、そしてその蜘蛛と出会ったが…アレは、化け物だ。神秘の塊と言っても良い。正直に

言って、原初のルーンやら人形やらをどれだけ掻き集めても勝てる気がしない。」

「そんな存在を付き従せている彼が封印指定を受けるのも納得という話しだ。いったい、何処から情報が漏れたやら…まあ、此処までではなくまで副題。此処からが本題なんだ。」

「結論から言おう——私は、彼を消すべきだと考えている。…そう声を荒げるな、青子。何も考え無しにこう言ってるんじゃない。」

「彼が生きている限り、あのサーヴァントは現界し続ける。知つての通り、彼の魔術回路が生み出す魔力量と濃度は異常だ。聖杯とやらも上回る。」

「もしも蜘蛛が成長し、この世界を喰らう事になればどうなる？ 答えは簡単。この世界は終わるよ。呆気なく終わる。この世界に有るモノ全てが壊されて滅びるだけだ。」

「そうなる前にどうにかしなければならぬ。その為には、まずマスターである彼を殺さなければならぬ。マスターが消えれば、サーヴァントは魔力を供給出来なくなり、現界も出来なくなつて消滅する。」

「時間が経って知識を吸収し過ぎる前に、あの蜘蛛には消えて貰わなければならぬんだよ。そうしなければ、全て終わる。」

「この世界が消えるのと、彼の命。どっちが大切なんだ？…答えは、明白だろ。」

「それを知った上で、私は問いに来た。」

お前達は、世界を守る為に味方になるのか。それとも、一人の為に世界を敵に回すのか。どっちを選ぶんだ？」

「私は…」

俯く。

「私は……」

拳を握り締める。

「私は……」

血が滲み出る。

「私は……」

ぎりつ、と歯が軋む。

「私は――！」

「バツ！ と顔を上げ、立ち上がる。

「アイツを殺すなんて御免だわ！ それに、それ以外にも解決策は有るじゃない！ バツカじゃないの!?!」

はつきりと、答えを出した。

「……その解決策とは？」

「そのサーヴァントを、ぶちのめす！」

彼女の回答に、二人の魔術師は破顔し、呆れてしまった。

□ □

吾輩は封印指定されてしまったマスターである。名前など無い。

ええ、はい。見ての通り…遂に、魔術協会から封印指定を受ける事になってしまいました。

平原でのゼルレッチの爺さんとの戦闘を見られていたのか、それともずっと前に蒼崎橙子が協会に連絡を入れていたのかは知らないが、恐らくどちらかが原因だろう。

巫山戯るな全く。分かり切ってはいたが、やはり魔術師には碌なのが居ないな。

「しかし、どうしたものか。」

私は思い悩む。

封印指定執行者のみならず、恐らく代行者も襲い掛かるだろう。

幸いにも、この時代には現存する宝具『斬り決る戦神の剣』を持つ、封印指定執行者にして伝承保菌者であるバゼットが居ない。

シエル先輩は…どうなんだろうか。もうこの時代には埋葬機関に入っているのだろうか。

もし入っていたとするなら…どうしたものか。ベ・ゼやインナツシユの原理血戒を取り込んでいたとしたら、流石のORTでもキツイ相手になるぞ。

何せ、月姫において暴走したアルクエイドを追い詰める事が出来る唯一の人だ。相手取るのはかなり難しい。

そもそも埋葬機関が全員で襲撃しに来たなら、それは正しく絶望

だ。そうなるとう宝具を開放せざるを得なくなってくる。

「……」

悩み、悩み、悩み、悩む。

襲撃者を迎え撃つ？ 確かにそれは実に単純だ。だが…私個人としては、そんな事などしたくない。

合田教会に居座る？ いや、それはダメだ。

合田教会が私を匿っているとなれば、この合田教会ごと焼き払われる。文柄さん達も皆殺しだ。

考える。考える。考える。考える。

そして――

「逃げるか。」

私は、長く住んでいたこの三咲町からO R Tと共に逃げる事を選んだ。

そうと決めれば早く行動しよう。留まり続けて、彼らに迷惑を掛ける訳にはいかない。

私は立ち上がり、必要なものを頭の中に思い浮かべる。

財布は必須。携帯電話は…必要無い。

包丁も必要。本は…必要無い。

意外にも必須な物は少ないな。だが、それはそれで中々に悲しいものだと、私は悲観する。

好都合ではあるが、持っていくべき物が少ないのは悲しい。

携帯電話を使って、町の人達にお別れを言いたくはあるが…それは出来ない。全く、残念だ。

「O R T。」

「はい。」

私が名を呼べば、彼女は返事をして私の方を向く。

「突然だが、此処から離れる事にした。」

「…合田教会から、ですか？」

「いや、この三咲町からだ。私と君が狙われる事となった今、私達が居ると三咲町にも被害が及ぶ。」

「……迎撃は？」

「考えた。けどダメだ。私は人を殺したくないし、君にも人を殺してほしくない。」

「……」

彼女は押し黙る。

私とて、此処を離れたくはない。けれど、私達が居ては三咲町とて無事では済まないのだ。

苦渋の決断なのだ。それを、私は彼女に攻めている。

本当に、申し訳無い。

「……いつか、帰って来れますか？」

「…勿論だ。いつか、私と君はもう一度、此処に帰ってくる。帰って来れるように、努力する。」

「…分かりました。」

「ありがとう、ORT。」

この日から。

私とORTの逃亡劇を始めようとした——そう、したかった。

『ごめんねごめんね、本当にごめん！』

『でもでも許して！ これも君の為なんだ！』

二匹の童話が、私を連れ去った。

第十四話 「絶対防衛抗戦」

■ ■
投げられた手鞠の様に軽々と、二色の子豚は一人の男を優しく掴みながら誰も居ない夜の町を駆け回る。

男は抗わない。否、正確には「抗う事が出来ない」。

『童謡の怪物』——第一魔法の使い手である魔女ユミナの子孫である久遠寺有珠と、その母親が使っていた童話をモチーフにした使い魔。

神秘がより薄くなってしまっているこの現代において、魔法以上に魔法に近いと謳われる力を顕現する強き神秘。

内の一つ、おしゃべり双子。

ホツチキスの口に噛み付かれれば、その対象は決して動く事が出来なくなる。

それはこの世界におけるどの戒めにも当てはまらない、この世界のルールから乖離した拘束である。

故に、根源に繋がっている訳でもなければ星に対する力を持っている訳でもない、ただ無銘だけの彼が抗う事が出来ないのも仕方ない。

「有珠…いや、これは青子だな。大方、青子がO R Tを倒すなんて無茶苦茶な事を言い出したんだろ。」

だが、無銘の男は決して慌ててなどいなかった。

寧ろ酷く冷静で、まるで最初からこうなる事を分かっていたかのよう
うに落ち着いていた。

『冷静沈着！』

『冷酷無情！』

「ルディー、意味が違うぞ。それだと俺は悪い奴になる。」

さわがしい方の双子、トウイードルディーの間違った言葉を、無銘の男は苦笑しながら意味が違うと訂正する。

この双子は決して、無銘の男が冷静である事に、酷く落ち着いてい

る事に、平常心である事に違和感など覚えていない。

そもそも彼らに、人間が普通ならこうする、とか、普通の人間ならこんな感情を抱く、とか、そんな事を理解する事は出来ない。

寧ろ、双子は安心して居るのだ。自分達が攫った男が、特に何か暴れる訳でもないまま、いつもの様に話しかけてくれる事に。

(青子は恐らく『魔法』を使ってくるな…有珠は三大プロイを一気に使ってくるだろう。『橋の巨人』に『薔薇の猟犬』…『月の油』は既に無くなったが、この二つだけでも十分に厄介か。)

だが、勘違いしてはならない。

無銘の男は抗ってこそいないが、しかし対策を考えていないという訳ではないのだ。

彼は自らの手で誰かを殺す事もしなければ、彼女の手で誰かを殺す事もしたくない。そんな到底無理な話しを、遂行するという強い意思が有る。

その為にも、彼は内心で対策を講じているのだ。

誰も殺さないし誰も殺させない、そんな無茶な対策を。

(ORTのお陰で、身体も魔術回路も回復している。だが、ダムとルディーに挟まれていては、どんなに強化の魔術を使っても私が動く事は出来ないか…そうなれば、私に出来るのは念話によるサポートだけか。)

おしゃべり双子の拘束性は、童話の怪物の中でも随一だ。

この世界から乖離した力——まるで、自分が本の紙に刻まれた文字のように動けなくなる拘束力を持っている。

例えば彼が規格外の身体能力強化を施したとしても、そもそもこの世界の力が通用しないのであれば、全く意味が無い。

振り払おうとしても、そもその前提として体を動かす事が出来なくなるのである。

故に彼が彼女にする事が出来るのは、念話による戦闘指示やサポートのみ。

(だが、それでも十分だ。何もできないよりはマシだろう…まあ、ORTが私の声を聞いてくれるかどうかは、正直言って分からないが。)

一抹の不安を抱きながら、しかし彼はどうかして対策を考え続ける。

脳裏に過るのは、やはりあの夜に見た悪夢。彼女が蜘蛛と成って、町一つどころか地球そのものを喰らおうと前進し続ける最悪の未来。もしも、そうなってしまうたら。もしも、あの夢が現実になっってしまったら。

そんな最悪な事態を想定しながら、彼は丁寧に、そして慎重に、そうならない為に考えを練り続けているのだ。

そんな時——彼の脳裏に、未恐ろしい情報が流れ込んだ。

《現霊基における強化上限への到達を確認。霊基への直接干渉を確認。》

《英霊名：沙条愛歌改めワン・ラディアンズ・シング——ORT 霊基再臨・第二段階への移行を開始します》

(……………マジか。)

絶望が、捕食への一步を踏み出した瞬間を知った。

□ □

月は青白く、空は暗く、地は冷たく。

町は、静寂そのものと成り果てていた。

だが、決して住民全員が死んでしまっているという訳ではない。

ただ、住民全員が普段なら触れる事のない神秘に触れて気を失ってしまったというだけの事だ。

たった一人の——否、たった一匹の蜘蛛が放つ神秘によって、町全体に気絶の被害が襲い掛かったという、それだけの話だ。

「……」

夜の町に吹く風が、蜘蛛が持つ綺麗な金髪を僅かに揺らす。

月光に照らされながら、肩まで伸びている艶の有る金髪が揺れるその姿は、正しく天使のようで。

だが——その右手に持つモノは、決して天使が持つような可愛らしいモノなどではなかった。

少女の身の丈を優に越える大鎌。成人男性の身長を軽く越えているであろう程の、大きな死神の鎌。

いや、この場合は蜘蛛の牙とでも言い表した方が適切だろう。
あらゆる肉に突き刺さり、毒を入れ込み、弱らせ、喰らう蜘蛛の武器だ。

「コレが、かの有名な大蜘蛛か。かつて無い程の上物だな。」

「……」

こつ、こつ、と——ブーツの音が夜を揺らす。

白銀の刃が、月光に照らされてその素肌を恥ずかしげもなく曝け出す。

好戦的な眼を持ったハンターが、蜘蛛が放つ神秘にもものともせず、戦意を内から膨らませる。

その者は、この世界において数少ない規格外の狂人。

「初めまして、御令嬢。今宵、お前を狩りに来た——」

聖堂教会の最高位異端審問機関「埋葬機関」のトップ。

元の世界において、死徒二十七祖という最強の吸血鬼集団の三体を単独で封印、もしくは討伐した最強の代行者が一人。

「ナルバレットだ。」

埋葬機関機関長——殺人狂ナルバレットである。

「……」

無、無、無。

狂人の謳い文句に対して、しかし蜘蛛は何も示す事は無い。

ただただ静かに、ただただ冷たく、蜘蛛は獲物を視界に入れる。

蜘蛛の翠眼が、狂人の体を刺し貫く。

ぞくり——と、狂人の背筋に冷水が注がれたような怖気が走る。

たった一瞬。僅かではあったが、狂人の体が震え出した。

——恐怖。もしくは、緊張。そのどちらかが、それまで何かを恐れた事のない殺人狂の体に流れ込んだのだ。

狂人は、目を見開いて喜々とした表情を満遍なく顔にする。

人生初の恐怖。自分史上初の緊張。今まで一度も味わった事のない感情が、一気に訪れてきたのだ。

「いいな——最高だ。」

短く、しかし重たい意味が込められた賛美を、狂人はじりじりと歩

み寄って来る蜘蛛へと放つ。

さけれど、蜘蛛は一切として反応しない。

今の蜘蛛には、制御も自制も欠片一つとして有りはしない。

元の姿に戻ってはいないもの。

地球を喰らおうとしてはいいもの。

しかし、蜘蛛には加減も容赦も決して有りはしない。

今はただ——己が主人を救う為の行く手を阻む小さな虫を、喰らう事しか考えていない。

「…」

大きな鎌が、ゆらりと動く。

小さな手で握り締められた大鎌の刃が、狂人の首元を狙いを定め構えられる。

夜が蠢く。神秘が震える。

誰もが見る事のない現象。決して敵対してはならない、最悪にして最凶の絶望。

霊基再臨——依代の霊基から、より元の状態に近づいた霊基状態。

水色の瞳は深淵の如き闇が続く深い翡翠色に。

神秘を纏う事が無かった肉体は、常に海色の神秘が纏われて蠢いている。

手にする大鎌は前よりも大きく、そして——この世界のあらゆる物質よりも堅く、柔らかく、気温差に耐え、鋭い性質へと変貌した。

結論から、先に述べておこう。

これは、決して戦闘などではない。

これから先に起こるのは、決して戦闘などという立派な事象などではない。そんな名誉なものなどでは、断じてない。

これから、一匹の蜘蛛が引き起こすのは、ただの——
——圧倒的な力による、絶対的な蹂躪だ。

第十五話 「絶対防衛抗戦・Ⅱ」

「フッ！」

銀の刃金が振るわれる。

先には無垢な少女。

ゆらゆらと濃い神秘を身に纏い、死神の鎌が如き蜘蛛の腕爪を握り締めて立っている一人の少女の首に、異端審問の代表者が剣を振るう。

本来、それは異端の存在では決して防ぐ事の出来ない浄化の一撃。

死徒二十七祖。最初の真祖から独立した、死徒の中で最も強い力を持つ死徒達。

その一角を、否、三角を葬ったナルバレックの一撃は、決して平凡なものではない。

浄化の力。この世ならざる者を清め、消え去る力。

銀の剣。聖なる炎を宿す白銀の剣。

それを受けて、何も影響を受けない事など有り得ない——本来ならば。

「…」

少女の首を切り落とさんと、主の御心ではなく殺意の元に振るわれた白銀の剣だが、しかしその目的が果たされる事はなかった。

何故ならば。

その剣は、少女の首を斬り付けるどころか——少女の体に触れてすらいなかったのだ。

「ほお……」

殺人狂が、声を上げて驚いてみせる。

殺す気だった。取るつもりだった。確実に、その首を斬り落とす勢いを付けた筈だった。

だが、現実はそのようではない。事実は彼女の思い通りではなかった。首を斬り落とす勢いで振るった剣は、少女の肌ではなく神秘によって防がれた。

神秘が攻撃を防ぐ。本来なら実体、物質化されない筈の『神秘』という概念が、攻撃を防いだ。

それが何を意味しているのか？

神秘による攻撃の防御——それ即ち、星の神秘の物質化。彗星という幾千幾万と宇宙の彼方に群がる星々に内包された神秘の実体化。

それは——人間という種族にとって、体を蝕む毒どころか、魂そのものを蝕み苦しめる劇毒、猛毒に他ならない。

「……邪魔です」

ただ一言。放たれたのは、ただそれだけ。

同時に——白銀の大鎌が、殺人狂の顔面へと一瞬で距離を詰めた。

疑似触覚。または、ORTの外殻。

堅く、柔らかく、気温差にも耐え、さらには鋭いという、この世界に存在するあらゆる物質よりも特異な物質。

それが武器となった物。血肉を喰らう牙となった大鎌。

それが、殺人狂の顔面へと振るわれた。

「イ——！」

銀剣を手放し、倒れ込むように体の重心を後方へと下げて寸での所で鎌を躲す。

毛先がなくなる。冷や汗が飛ぶ。

ついさつき。蜘蛛の大鎌を回避する直前の事。

埋葬機関の局長にして殺人狂ナルバレットは、人生で初めて死を実感した。

首を斬り落とそうとした自分が、逆に首を斬り落とされそうになった。

蜘蛛を殺そうとしていた自分が、逆に蜘蛛に殺されそうになった。だが——それが、何よりも。

「良いな……！ 良いぞ、ORT！」

何よりも彼女を湧き立たせた。

そして——

「……私の真名を呼んでいいのは、マスターだけです。」

彼女の言葉が、蜘蛛の逆鱗に触れた。

彼女の真名。正確には、種族の名前。

ワン・ラディアンズ・シング——輝けるただ一つの存在。

幾千幾万と有る彗星の内の一つに産まれた、最強の生物。その星で、孤独のまま強さの頂に立ち続けていた子供。

この世界におけるORTの亜種であり、攻撃性の低い個体。

そんな彼女が——唯一、あらゆる信頼を置いた存在。

呼ぶ名も無ければ、与える名すら無い、無銘の男。名も無きマスター。

正体を知って尚、恐れない。強さを知って尚、恐れない。

真実を理解して尚、恐れない。現実を理解して尚、恐れない。

未来を見て尚、恐れない。全てを見て尚、恐れない。

そんな例外。そんな特異。それ故に——「愛する」人。

その人以外に、真名を呼ばれるなど——言語道断。

「霊基への直接干渉を確認。ダークマター・プランクトン暗黒生物による再臨素材の代用を開始。

始。本体の経験を元にした膨張現象インフレーションを容認。

「霊基再臨・第二段階へと移行します」

姿形は変わらない。

されど——もはや、何もかもが絶望に浸っていた。

□ □

場所と時間は大きく変わる。

双子で体の自由を封じられたまま、無銘の男は久遠寺邸に数ある部屋の一つ、その内部に閉じ込められていた。

『お腹は空いた？』

『お腹は鳴った？』

「腹が鳴る程、空いてはないかな。というか、仮に腹が空いていても今のままじゃ食べられない。」

ホッチキスの口で甘く噛み付かれた自分の両腕へと目を配りながら、無銘の男はやや憂鬱そうにしていた。

霊基再臨。それは、白紙化してしまった地球と人類が刻み込んできた永きに渡る歴史である人理を取り戻す為に戦った、一人の少年を主役とした物語において登場した概念。

霊基の上限を突破し、さらなる力を手にする事が出来るというその概念は、四段階に別けられている。

第一段階。保有スキルの開放。

第二段階。純粹に霊基そのものの上限強化。

第三段階。最終に近付いた状態。第三スキルの開放。

最終段階。霊基再臨の最終状態。

それを——ORTが行った。霊基再臨の第一段階を終わらせた。

第二の保有スキルの開放。同時に、霊基の強化。

デフォルトで強かったORTが、更に強くなったという事は。それ即ち、霊基の性質が元の状態に戻ったという事になる。

それがどれだけ恐ろしい事か。無銘の男は、それを理解しているが故に憂いていた。

(どうしたものかな…ORTの性質に近付いたなら、青子達のどんな攻撃も意味を成さないぞ。)

ORTの外殻の特異性は、この世界に存在するあらゆる物質を凌駕している。

どんな物質よりも堅く、柔らかく、気温差にも耐え、更には鋭い。

つまり、何が言いたいのか。

人間や魔術師、更にはサーヴァントですら、ORTに対する攻撃は無意味に等しいという事である。

(そもそも、封印指定にされたのは俺だ。決してORTじゃない。なら、俺の方には執行者か代行者のどちらかが来る筈だ。俺も余裕綽々という訳にはいかない。)

封印指定にされた魔術師には、その魔術師を捕らえる為に魔術協会から送られる「執行者」と、その魔術師を滅ぼす為に聖堂教会から送られる「代行者」という二つの危機が迫る。

生け捕りにするのが執行者であり、殺害するのが代行者。

魔術師としての悲願の為に幽閉という名目で封印する選択を取る

魔術協会と、この世ならざる者と成り果てた異端者は消すべきだと殺害の選択を取るのが聖堂教会である。

両者共に派遣されるのは実力者ばかり。特に聖堂教会には埋葬機関という、最高位の異端審問機関が存在している。

そんな中で、無銘の男は「シエル」という存在を特に恐れていた。(ナルバレックも勿論恐ろしいが…それでも俺はシエル先輩の方が怖いな。弱体化していたとは言え、真祖の姫であるアルクエイドを倒した人だ。劍僧ベ・ゼの『剣』の原理血戒に、俯海林アインナツシユの『実り』の原理血戒…そして、第七聖典。武器が多過ぎるんだよ、あのカレー好き。)

埋葬機関第七位「弓のシエル」。

ロアの転生体として選ばれ、ロアが内から居なくなつて尚も不死性を有し、ロアへの復讐を目的にして埋葬機関に入った異端の代行者。つまるところの、元吸血鬼の代行者である。

彼女が使用する武装は多岐にわたり、そのどれもが真祖や人外の生物に強力なものばかりだ。

だが、それ以前に身体能力も莫迦げている。正しく完全無欠と言うに相応しい実力の持ち主なのだ。

それに、本来の型月世界において、人間という括りだけで見れば魔術回路の本数も魔力生成量も彼女の方が圧倒的に上である。

その時点から、彼女と敵対し、尚且つ殺さず倒すなど無理難題も良いところである。

(ORTを相手にするなら埋葬機関だつて出張つてくる…いや、ORTではなく俺を襲いに来る筈だ。何せマスターなんだから。)

(それは確定的だ…問題なのは、それをどう対処するか。殺さずに倒す様にするだけじゃない。久遠寺邸への被害も最低限なものにしたい。)

(ORTは恐らく何人が葬っているな…出来れば彼女に人を殺めて欲しくはなかったんだが…。しかし、状況が状況だ。相手が代行者なら仕方ないか。)

(…いや、やっぱりダメだな。彼女に人殺しはさせたくない。こうい

う時にこそ、〃コレ〃は使うべきだ。」

無銘の男は選択を決める。

極限の単独種、究極の単一個体。彗星より飛来した星を喰らう大蜘蛛。

それが行う捕食を、彼女が行う殺人を、無銘の男は良しとしなかった。決して許そうとは思わなかった。

それが、傍から見ればあまりにも愚かな行為であると理解しながら。

「——令呪を以て我が星に命ずる。」

『なんだって!?!』

『なんだとー!?!』

二匹の子豚が声を上げる。

男の腕をどうにかしまいと、ガジガジと何度も噛み付く。

だが、二匹の子豚にそんな特性は無い。おしゃべりな双子には、相手の腕を噛み千切る程の牙など存在していない。

魔力が高まる。男の右腕、その手の甲が深紅の光を上げる。

令呪——サーヴァントのマスターが持つ、サーヴァントに対する絶対の命令権。

三角しかないが、しかし三回だけならばどんな命令もする事が出来るという〃令呪〃は、聖杯戦争においてマスターが持つ最も重要な武器の一つだ。

だが、それをどう使うのかを決めるのはマスター自身だ。

「帰って来い、O R T」

一瞬、静寂が包む。

だが——次の瞬間、群青の閃光が辺りを包み込んだ。

「おかえり、O R T。久々の捕食は不味かったか?」

「——ただいま、マスター。はい、久しく食べましたが、マスターのご飯の方が美味しいです。」

「はは、そうか。それは嬉しいな。なら、久しぶりに家に帰ろう。家でご飯を食べて、旅に出るのはその後だ。」

男は笑う。蜘蛛を前に、平然と。

「はい。」

蜘蛛も笑う。まるで普通の少女のように、明るく。

だが、戦いは決して終わっていない。

「その為にも——まずは、此処から抜け出そう」

一人の無銘が、一匹の蜘蛛と共に行く。

第十六話 「絶対防衛戦線・Ⅲ」

久遠寺邸の中を歩き、玄関から出口へと出た瞬間。

其処に移り出すのは——葉が落ちた木々によって作り出された森林などではなく、ただただ広いだけの草原だった。

「…空間転移か？ それにしては随分と自然だな…。ORT、魔術式の反応は？」

「魔力感知を開始——終了。いえ、空間転移の魔術式の反応は有りません。恐らく、私とマスターが居た館が元から館ではなかったのではないでしようか？」

「……空間の誤認識？ 部屋一個の空間ではなく、場所そのものの空間を誤認させていたという事か？ なら……」

「最初から、全て見通していたという事よ——」

雲が消える。月光が、正午の太陽のように満遍なく周囲を照らす。

冷たい月の光が、無銘の男と蜘蛛の少女に降り注ぐ。

「……ざあ——」
「……遊びをしましょう。」

霧が、地を駆け抜ける。

猟犬の形をした濃霧の怪物が、月光に照らされた地面を縦横無尽に駆け回る。

「shun the frumious Bander snatic
h。」

魔女の歌声が、際限のない夜に響き渡る。

濃霧の怪物が、狼の如く吼えて獲物へと走り出す。

狙うのは蜘蛛の少女。世界を滅ぼす元凶のみ。決して、その召喚者である無銘の男ではない。

薔薇の猟犬が狙いを定め、喉元へと牙を突き立てるのは一匹の大蜘蛛。

今まで出会った事のない、今まで喰らった事のない、史上最大級の大物だ。

怪物にとって極上の一品。これ以上ない程の餌だ。

だが――

「マスター、戦闘を開始します。無理をなさらず、援護をお願いします。」

「了解だ。」

相手取るのは二人。

規格外の量と濃度の魔術回路を持つマスターと、規格外のスキルを幾つも所有するサーヴァントの二人係である。

「London Bridge is broken down, Broken down, broken down.」

澄んだ歌声が響く。魔女の綺麗な詠唱が、霧の中で産声を上げる。

この戦いは、決して蹂躪などでは終わらない。否、蹂躪で終わらせなくてはならないのだ。

相手はサーヴァント。百戦錬磨の英霊。その実力は、過大評価そのものと言っても過言ではない。

ジェット機にも例えられるサーヴァントだが、それはマスターによつて大きく変化する。

例えば、無銘の男と彼女のこの組み合わせは――二人にとって最高に相性が良く、そして敵側にとっては絶望そのものである。

一本を起動するだけで、大魔術を補う事が出来る魔力を生み出す事の出来る無銘の男は、全ての魔術回路を起動すれば令呪無しで彼女が宝具を連続で使用する事を可能にする。

サーヴァントである彼女はあらゆる全てが規格外であり予測不可能。未知の領域に立っている。

だが――それを承知して、魔女達は蜘蛛一匹を狙う事とした。

「London Bridge is broken down, My fair lady.」

橋の巨人。薔薇の猟犬。

魔女は、己が使う事の出来る怪物全てを用いて――たった一匹の蜘蛛へと襲い掛かる……！

「corpus meum quasi cometes」

ゴウンツツ——!!!!!!

魔女の歌声を掻き消すように、霧を晴らす鐘の音が鳴り響く。

「ツ——！」

ドゴツツツツ!!!!!!

地面を蹴り、その大地を広く抉り取って無銘の男は遥か高みへと己を打ち上げる。

霧は追ってこない。濃霧の怪物は追いかけて来ない。

何故なら、先程の大地を抉り出した衝撃によってほぼ全てが散ってしまったのだから。

「……！」

無銘の男が、巨大な橋の巨人を直視する。

石橋の巨人——テムズトロール。落ちたロンドン橋。

月の油、薔薇の猟犬と並ぶ神秘の塊。

完全体ともなれば、蒼崎青子ですら破壊する事の出来ない時まで言われる攻略不可能な神秘の城。

だが——男の目に映るあの橋は、決して完全体ではない。

何より、本体が壊れれば一気に瓦解してしまう、ある種の諸刃に違いはない。

「許せよ、テムズ。」

男は静かに、これより自分が破壊する怪物へと謝罪を投げる。

そして、腕を水平線へと持ち上げて、狙いを定める。

（射程距離は25m以内。弾速は音速。装弾数を六発。魔力をより圧縮して、しかし鋭利に、そして速く——）

魔弾。それは、単に魔力によって作られた弾丸。

決して、必ず敵に当たるという必中効果があるという訳でもなければ、必ず敵を殺せるという必殺効果があるという訳でもない。

本当に、ただ魔力で練られた弾丸——だが。

彼が放つ魔弾は、破壊という特性に特化した半人前の魔術師である蒼崎青子をも、上回る。

込められる魔力量。威力を上げる濃厚な魔力。

それら全てが加味されて出来上がる魔弾は、誰もが震えを上げる。

(テムズの本体は小さな人形だ。あの巨軀からそれを見付け出すのは決して簡単じゃない——だが、私になら見える)

心臓に刻まれている魔術回路から生まれる魔力を、両目に通して視覚を強化する。

遠く見えていた筈の景色、まだ遠かった筈の巨大な敵の姿がくつきりと、その目に映る。

巨大、巨大、巨大。とにかく巨大な、石の巨人。人間が扱う事の出来る最大級の神秘の一角。

それに相對するのは——名前すら持たない、ただ規格外の魔術回路を持つているだけの魔術使い。

「装弾完了。標準確定——発射」

六発の弾丸が、音速と化して巨像の顔面と胴体、そして四肢に次々と撃ち込まれていく。!!!

放たれた魔弾は彗星のように、核弾頭すら掠り傷一つ負わせられない神秘の塊を穿いた。

そして、その彗星のような魔弾は巨像に隠れた可愛らしい人形を破壊して、神秘の塊をいとも簡単に瓦解させた。

□ □

神秘の巨像が、呆気なく崩れ落ちる。

檜の木ではなく、石によって作り上げられた万全の巨像が、まるで積み木で作られた城が破壊されるように、簡単に壊されて無くなっていく。

「……！ テムズをこんなに速く……それに、今のは青子の……」

僅か数秒で、切り札の一つを破られた魔女は、その手際の良さに驚きながらも、しかし冷静に分析を開始する。

無銘の男から放たれた魔弾を、魔女はよく知っている。

何故ならば、その魔弾の主な使用者である半人前の魔術師に師事しているのは魔女自身なのだから。

だが、男の魔弾と蒼崎青子の魔弾には決定的な違いが幾つもある。まず、威力。

蒼崎青子が放つ魔弾も、火力が無いという訳ではない。寧ろ、破壊に關しては一流を誇っている。それ程の威力がある。

だが、男が放った魔弾の威力はそれすらも凌駕していた。

あれは、決して拳銃や小銃に例えられるものではない。

あの魔弾は、正しく砲弾。戦艦に備わった、土地一つに傷を負わせる巨大な弾丸だった。

次に、速度。

蒼崎青子の放つ魔弾は威力こそあれ、速度が凄まじいかを問われればそうではない。

低速という訳ではなく、しかし高速という訳でもない。安定の取れた速度、表現しやすいものを選べば、拳銃から放たれる弾丸と同等。

だが、男の魔弾は音速に至った。

常人であれば決して捉える事の出来ない速度。魔術師であろうと捉えるのは困難だろう速度を持っていた。

最後に、質。魔弾の質だ。

あれは誰がどう見ても、現代の魔力によつて作られた代物ではなかった。

さりとて、神代に有った魔力という訳でもない。

分からない魔力。理解が及ばない質。

だが、あれが決して普通のモノではなという事は。

あれがこの世ならざるモノであるという事は、嫌でも理解する事が出来た。

「次弾装填完了。OR T！」

重力に従い、超高速で地面へと落下を続けながら、次の手段を備えながら、男は彼女の真名を大きく叫ぶ。

「着地、任せた！」

「了解。」

OR Tは短く返す。だが、すぐには行けない状況だった。

未だ、濃霧の怪物は彼女を襲っている。

しかし戦闘よりもマスター優先。これは、本来人間ではない彼女にとって唯一の意地だった。

彼女は手に持った大鎌を、背後から飛び掛かった濃霧の怪物へと振り下ろす。

実体など持たない薔薇の猟犬に、攻撃など大した意味を成さない。そんな事は、彼女も既に理解している。

故に——彼女は鎌に、攻撃という意味など持たせていない。

『!?!』

霧が驚き、体をうねらせる。だが、どれだけ散らしても霧には決して自由は戻らない。

レヴォールシヨン・ウェブ。またの名を、星航銀糸。

ORTが星間航行に用いたとされる銀糸。元来の蜘蛛が用いる最初にして最高の武器。

それはありとあらゆる全ての生物を絡め取り、その自由を消失させる最強の拘束力を持つ星蜘蛛の糸。

例え最高クラスの神秘であろうと、星の神秘には敵わない……!」

「」

視線を向ける相手を変えて、彼女はすぐに男の方へと跳んで行く。

月で跳ねる兎のように、細く小さな体を月光に晒しながら、小さな蜘蛛は主の為に飛んで行く。

「お待たせしました、マスター。」

「そこまで待つてないよ。ありがとう、ORT。」

冷たい空と風に当てられた主を、その小さな体で優しく抱き締めるように抱えて地面に降り立つ。

男もまた地に足を付け、拘束された霧の怪物を無視して、怪物の主である魔女と対面する。

「分かってはいたけれど……予想以上ね、サーヴァントというのは。」

「ORTだからな。このくらいは当然だ。まあ、それはそれとして……家に帰らせてくれないか?」

さも、何事も無かったかのような表情で、男は久遠寺有珠へと言う。

これ以上は争わずに、私とORTを家に帰らせてはくれないかと。と。

「貴方だけなら構わないわ。彼女には消えてもらおうけれど。」

「……それは困るな。O R Tには生きていてもらいたい。だが、出来れば君とも戦いたくない。」

困った表情で、男は考え込む。

呆れた表情で、久遠寺有珠は困惑する。

こんな状況になっても。

命を狙われる状況に陥ったとしても。

されど、無銘の男は決して戦いを選ぼうとしていない。

殺し合いを、しようとしなない。

優しいというよりは、甘く。

甘いというよりは、愚かしい。

だが、久遠寺有珠は知っている。

この男が、昔からそういう人柄である事を。

この男が、出会った時から善人である事を。

「……」

「……」

翡翠の瞳が、魔女を貫く。

黒曜の瞳が、蜘蛛を観る。

異様な空気が、互いを刺し合っている。

片や、ただの友人。それ以上ではない。単に、友人を殺したくないというだけ。

片や、男の従者。もしくは、家族。行っているのは、牽制。

だが、そんな事を知らずに、男は答えを出す。

『『自己強制証明』を用いるのは……ダメか?』

自己強制証明——セルフギアス・スクロール。

権謀術数の入り乱れる魔術師の世界において、決して違約不可能な取り決めをする時にのみ使用される、最も容赦のない呪術契約の一つ。

自らの魔術刻印の機能を用いて術者本人に掛けられる強制の呪いは、如何なる手段を用いても解除不可能。

たとえ命を差し出したとしても、次代に継承された魔術刻印がある限り、死後の魂すらも束縛されるという代物だ。

それを用いて、事を解決する事は出来ないかと、男は話しを持ち出した。

だが――

「却下します。」

「ええ……」

バツサリ、と。

その話しは、事の発端である彼女自身から拒絶され、切り捨てられた。

「これはお前の為でもあるのだが……」

「マスターが不利になるのであれば、それは私の為になりません。」

「そうか……そうなのか……だが、それだと戦わない方法が無くなるんだが……」

困惑した表情を浮かべる男に、彼女は言い切った。

「なら、まずはその主義から捨てるべきです。エイリからも言われていましたが、マスターは甘過ぎます。もつと酷くなってください。私のように。」

戦わないようにする考え。誰も殺さない考えを捨て去れ、と。

もう少し容赦を捨てろ、と。

「君からそれを持ち出すのか……いや、とは言っても……人殺しも狩りも、良い気分にはならないだろう？」

「三咲町の皆さん以外は特に何とも思いません。」

「ああ、そうですね……」

もはや半ば投げやり、諦めかけたような顔で、男は答える。

だが――それでも、と続ける。

「……やっぱり嫌だな。私は誰も殺したくない。そして、君にも誰かを殺してほしくない。」

「……」

「正直、私の理想に君を巻き込むのは気が引けるんだが……でも、私は君に人として生きてほしいんだ。その為に、人殺しはあまりしてほしくない。」

ぼん、と。

小さな彼女の頭を手を置いて、無銘の男は理想を語った。
誰も殺したくないし、ORTにも誰かを殺してほしくない、と。
星を喰らう蜘蛛である筈の自分に、人間として生きてほしい、と。
その為に、人殺しはしないでほしい——と。

「……難しい試練ですね。」

「だろうな。でも、頼むよ。」

「……分かりました。」

洩々、といった不服な表情を浮かべながらも、しかし彼女はその理想を肯定した。

男は感謝と共に、彼女の頭を撫でる。

そして——和んだ空気を、再び鋭いものへと切り替える。

「さて。スナッチも拘束してあるこの状況で——久遠寺さん。貴方はどう抵抗するんだ？」

橋の巨人は崩壊した。

薔薇の猟犬は拘束された。

もはや、三大プロイは無くなった。

久遠寺有珠の切り札は、もはや無くなったにも等しい。

だが——

「……そうね。残念ながら、私はこれ以上、無駄な抵抗なんてしないわ。」

余裕のある笑みを浮かべながら、久遠寺有珠は投降の言葉を吐いた。

その言葉に、男は虚を突かれたような表情をして、張り詰めていた肩をがくりと落とした。

徹底的に抗うつもりだったが、しかし当の敵対者である魔女は戦わないと断言したのだ。

「そ、そうか……なら」

「……遊びはもう終わり、私の出番はもう無いわ——貴女が言い出したんだから、早く片をつけなさい、『青子』」

直後、衝撃が空間に迸る。

ドオンツツツ

!!!!!!!

爆弾が落ちてきたのではないかと錯覚してしまう程の轟音と共に、砂煙が二人を包み込む。

直後、草原が花園へと変貌を遂げ始めた。

真つ白の世界。白銀の雪景色を思わせる、純白の花々で彩られた花園の世界が、草原を塗り潰していく。

砂煙が晴れていき、細めていた目を開いて、見開いて、男は真ん中に立っている。〃大人〃を直視する。

風に靡いて揺れる長い赤髪。

夜に照らされて美しさを際立たせる青色の瞳。

半袖の白いシャツに、ジーパンというラフな格好。

彼が知る蒼崎青子より——大人びた姿。

「おいおい……マジかよ。〃その姿〃は、もつと先の時代でするやつだろ……！」

冷や汗をかきながら、その有り得ない現実には男は可笑しく笑う。

「先に進み過ぎがちやったけど、まあ仕方ないわよね。さてと！ それじゃあ、やらせてもらおうわよ！」

本来の蒼崎青子より、遙か先の未来の姿。

経験の超経過。先送り。もしくは前借り。

半人前の魔術師・蒼崎青子でもなければ、一人前の魔術師・蒼崎青子でもない。

第五魔法・青の使い手にしてミス・ブルー——蒼崎青子、その人である。

第十七話 「選択」

強い風が、体を通り抜けて過ぎ去っていく。

冷や汗が止まらない。緊張が体を叩きつけている。

「最悪も良いところだ……これはどっちだ、アラヤの嫌がらせか？」

それともガイアの嫌がらせか？ もしくは両方か？」

「さあ、どっちでしょうね？」

本気で焦っている彼に対し、その原因である蒼崎青子は余裕綽々の笑みで悪戯っぽく返す。

魔法使い・蒼崎青子。

魔術師という枠組みを越え、魔法使いという領域に至った未来の蒼崎青子。

魔法使いの夜の終盤において、姉である蒼崎橙子との戦いで見せた、『一人前の魔術師』としての姿よりも更に先の姿。

魔術師としてではなく、魔法使いとして完成した蒼崎青子。

完全に魔法使いとして仕事をこなす第五魔法の使い手としての、本来在るべき姿の蒼崎青子である。

（最悪だ……本当に最悪だ。月姫の時間まで経験を積んでる青子なら、『逆行銀河・創世光年』も使用出来る……！）

ソロモン王の亡骸を贄に、この世界に生を受けた憐憫の獣は、それを目指した。

逆行運河・創世光年。

それは人類史3000年の歴史を魔力として変換し、46億年の過去に遡ろうとするという、ある種の魔法に近い行為。

だが、彼女が行うのは逆行運河ではなく、逆行銀河。

運河とは、排水や給水の為に人工的に作られた川の事であり、逆行運河とは即ち『人類史3000年という、人類が作り上げた巨大な川を燃料に変換する』という行為であった。

が——彼女の場合、行うのは銀河の範囲である。

魔法使い。根源に繋がっている人間である彼女が行うそれは、人類史という歴史そのものではなく『銀河そのものの時間』を魔力にするもの。

相手を一空間に閉じ込め、其処に、この地球を含む銀河が発生して今日に至るまでの時間を魔力に変換して砲撃として放つという超弩級の攻撃方法だ。

(正直、蜘蛛としての肉体ではなく人間としての肉体で活動している OR Tでも耐えられるか分からない……そして、それは俺もだ。銀河級の攻撃なんて俺には耐えられない……！)

「回路起動——完全装填。」

ゴウンツツツ——

!!!

13本の魔術回路が開き、全てが籠もった鐘の音が夜に轟く。

大魔術を使う余裕は無い。ここからは、彼女と共に連携して徹底的な抗戦に入る他ない……！

「OR T、前線を任せる！ 情けないが、俺は出来る限り君のサポートに徹する！」

「了解しました。サポート、お願いします」

大鎌は濃霧の怪物を拘束している為、使用する事は出来ない。

だが、武器など幾らでも作り出せる——本人である彼女が生きている限り。

白銀の太い触覚が、彼女の掌から吐き出される。

ただ太く、鋭い触覚は骨が軋むような音を上げて直ぐにその姿形を武器として正しい形へと変えていく。

いや——進化させていく。

出来上がったのは、大鎌よりやや小さく、しかし少女が持つにはあまりにも不格好な白銀の武骨な大剣。

「そつちがその気なら、こつちも最初から本気で行くわよ！」

ギラギラと目を輝かせ、蒼崎青子もまた戦闘態勢を取って構える。

夜風と共に、戦いの場に静寂が訪れる。

互いに静止。だが、一瞬足りとも気は抜けない修羅の場。

片や笑う者。片や無の者。片や焦る者。

二対一。マスターとサーヴァントに敵対するは、たった一人の魔法使い。

だが——その戦力は、十分以上に恐ろしい。

「」

最初に動き出したのは、ORTだった。

白銀の大剣を握り締め、力強く地面を蹴って加速する。

速い。疾い。

それは正しく砲弾のように、灼熱の意思を込めて魔法使いの体へと大剣を振り下ろす。

「速いけど、甘い！」

音速で振り下ろされた大剣は、しかし彼女の目的に反して蒼崎青子を切り裂く事はなかった。

右足を軸にし、体を横に回転させる事で蒼崎青子は愚直なまでに正直な太刀筋で振り下ろされた大剣を回避したのだ。

そして——次は、蒼崎青子が拳を握り締める。

「態々そつちから距離を詰めてくれるなんてね！」

不敵に笑い、蒼崎青子は全身の魔術回路を、使い切る勢いで駆動させる。

ブオンツ、ブオンツツツ!!!!!!!

まるでスーパーカーに搭載されたエンジンのような激しい快音を轟かせ、蒼崎青子とORTの周囲に魔力が迸る。

魔法使いとしての蒼崎青子は、サーヴァントを相手取る事が出来る数少ない純粋な人間の一人。

あくまでも並の宝具を持ったサーヴァントという説明がつくが、しかし宝具を使う事の出来ないサーヴァントともなれば、その話しもまた変わる。

「彼方の彼方まで吹き飛ばす！」

先手必勝。

切り札は最初から使い、他に使えるものがあるならば全て使い切る……！

そうすれば、解析されて対応される前に倒してしまえば、それで十

分。

だが――

「させるかよ。」

そうさせない為に、彼女が倒されない為に、サポーターが居るのだ。規格外の脚力で以て、彼は音速で蒼崎青子とO R Tの間に割って入り、蒼崎青子の足元へと拳を振り下ろす。

ドゴツツツ!!!

地面が抉れ!! 凹み、そして地震の如き衝撃と煙幕の如き土煙が、蒼崎青子へと襲い掛かる。

「うわっ」

衝撃は意にも返さないが、しかし煙幕の如き土煙は予想外にも効いたらしい。

蒼崎青子は僅かに目を閉じ、そして彼はその隙にO R Tを抱えて大きく距離を取った。

「無闇に近付くな、O R T。適切に距離を保つように振る舞え。蒼崎を相手取るなら、接近戦より中距離戦がメインだ。」

「中距離戦、ですか。」

「ああ。正直、『逆行銀河・創世光年』は未知数だ。例えお前でもタダで済む威力のものじゃないのは確かだ。」

「……」

物理の外側。銀河の歴史を弾丸とした超電磁砲。もしくは弩。

何よりの脅威はそれだが、その他にも蒼崎青子の恐れる点など幾つもある。

魔法使いは皆等しく危険物。何を仕出かすか、何を引き起こすのか分かったものではないのだ。

「距離を取るなら、ご自由にどうぞ? 取れるものならね!」

破壊の魔弾が空の浮かぶ。

弾丸そのものが、標準を二人に定めて身を落とす。

計二十の弾丸。それら全てが、蒼崎橙子のルーン魔術と礼装を破壊する程の威力を持った破壊の権化。

「あー――クソツツ! 本当に、本っ当に! 魔法使っていうのは

面倒な奴しか居ないな！」

今日初めて、彼は怒鳴った。

怒鳴るように、他者への愚痴を吐き捨てた。

同時に、彼もまた同じく弾丸を装填する。

翡翠の弾丸。童話の怪物すら葬った最速の砲弾。

「魔弾は私が全て落とす！ 頼むぞ、ORT！」

「了解。」

迫真の気魄と信頼を言葉にされ、蜘蛛は鎌を構えて魔弾飛び交う戦場を駆け抜ける。

蒼崎青子の魔弾は全てが蜘蛛へと飛んで行く。

まるで意思を持っているかのように。狙っていると分かっているのにそれが不自然だと思ってしまう程に、弾丸は全て蜘蛛を狙っている。

が、それら全てが悉く撃ち落とされる。群青が、翡翠によって塗り潰されて壊される。

「私の魔弾を凌ぐとか、相変わらずの馬鹿火力ね！」

「そんなこと知るか、さっさと倒されろ！ こっちは晩飯も食べてないんだよ！ 俺もORTも空腹なんだ！」

私情を叫びながら、男は何度も魔弾を放ち、撃ち落とす。

だが、全てが完璧ではない。魔法使いの放った魔弾の幾つかは、彼女にこそ当たらなかったものの彼の体を掠って彼方へと飛んで行く。

「マスター」

「問題無い！ 構わず行け！ さっさと終わらせて、ご飯食べるんだからな！」

そう。男と少女には、世界の命運などという大義は存在しないし持ってもいない。

この二人は、ただ自分達の家に帰るといふ、世界の命運に比べれば実に小さくてしようもない目的の為にだけに戦っているのだ。

家に帰って、夜食を作って、食べて、眠って、明日を迎える。二人が求めるのは、ただそれだけの事なのだ。

だが、世界はそれすら受け入れてくれない。魔法使いはそんな事す

ら許してくれない。

故に、抗う。一人の無銘と一匹の蜘蛛は抗っている。些細でも、とても大切な日常の為に足掻いている。

「――狩る」

蜘蛛が間合いに入る。大剣を構え、鋭い眼光を放つ。

真横に構えた大剣を、魔法使いの体を両断する勢いで振り払う。

白銀の大剣は空を裂き、そして一寸のズレも無く水平線を描いて魔法使いの上半身と下半身の間を駆け抜ける。

「甘いー」

だが、大剣は魔法使いを両断しなかった。

大剣は魔法使いを“通り抜け”、そしてその時、既に魔法使いの拳は蜘蛛の顔面へと振り下ろされていた。

「――」

躲す。真正面から振り下ろされた音速の拳を、体の軸を回してひらりと躲す。

そして分析する。何故、攻撃が当たらなかったのかを。

解析する。何故、攻撃が魔法使いをすり抜けたのかを。

「――成程」

理解する。何故、攻撃が当たらず、魔法使いをすり抜けたのか。

第五魔法。攻撃の飽和。時空間のズレ。時間の前借り。債権の書き換え。

あらゆる特性への対応力と、環境への適応力。そして、それらを可能にする分析力。

それこそが、O R Tの――否。

ワン・ラディアンズ・シングという種族の特性だ。

何より――

彼女の依代も、魔法使いの同類だ。

「アナライズ」

「!？」

ぞわり、と。

魔法使いの背筋が凍る。

そして予感が走る。

「デコード」

自分の何かが失われるような。

自分の何かが壊されるような。

自分の何かが消されるような。

そんな、嫌な予感が。

「ディセーブル」

直後――

蒼崎青子の力の一つが、失われた。

□ □

第五魔法を使用する事により、蒼崎青子は無制限の魔力と負傷の飽和という副産物を生み出す。

負傷の飽和というよりも、それは秒単位の時間旅行。

その時間軸ではない別の時間軸へと秒単位で移動する事によって、数秒間だけ『其処に自分は居ない』という現実を作り出して攻撃を回避するという無茶な御業だ。

其処に自分が居ないなら、当然自分は怪我しない。そんな状況を、無理矢理に作り出す事が出来るのが副産物だ。

だが――

「解析し、排斥し、無効にする。いつだって恐ろしいな、あのスキルは。」

それは今、蜘蛛の力によって無くなった。

アナライズ／デコード／ディセーブル。ORTという強敵が使用した、数多のプレイヤーを絶望に陥れたスキル。

相手のバフを解析し、学習し、無効化させてデバフを課すという最悪のスキルである。

究極のデバフスキルとも呼べるその力によって、蒼崎青子は副産物の一つを失った――！

「時間旅行は使えなくなった。これで攻撃の無効化は出来ないな？」

「…本当ね。うわ、これは酷い。最悪も良いところだわ。」

「ORTの攻撃を喰らえばお前もタダでは済まないだろ。……もう諦

めろ、蒼崎青子。ORTについてはマスターである俺が責任を取る。それで文句無いだろ。」

「……そうね。でも、アンタが無事でいられる保障はどこにも無いわ。」

代行者と執行者。敵に回すと面倒極まりない二匹のハンター。

ORTという極限の単独種が居るとしても、それが必ず彼の安全を保障出来る事には繋がらない。

執行者と代行者がどれだけ多く居るか。彼女が果たして大勢を一気に相手出来るのか。

蒼崎青子は、それを知らない。

対して、彼はそれが出来る方法を知っている。だが、それを使う事は彼女が世界から排除される要因を作る事になる事も知っている。

「アンタや私が良くて、世界はそうじゃない。それにね、私はそいつ一人の所為で私の大事なものの全部が壊されるのは御免なのよ。」

「……」

「……どうしますか、マスター。」

大剣を構えたままの少女が隣に立つ。

彼は手で遮るようにし、これ以上は何もしなくて良い、と意思を示した。

「なら、令呪で証明しよう。ORT、良いか？」

「……それがマスターの為になるなら。」

右手を水平線に掲げ、高らかに。

「令呪を以て、我が星に命じる」

言い切る前に。

視界に——靄が掛かった。

体が動かなくなる。自由が「喰らわれる」。

すぐに理解する。状況を、現状を、絶望を、すぐに頭が理解する。

濃霧の怪物——薔薇の猟犬。三個しかない最古クラスの神秘。

それを解き放ったのは——

(青子の魔弾か……！ ORTの銀糸すら取っ払ったのか……!?)

彼を掠り、通り抜けた彼女の魔弾である。

Happy End✓

何気ない平和な日常

「……久々に、平和な朝だな。」

見慣れた白い天井と空気、聞き慣れた時計の音で、私は暗闇に落ちていた意識を引つ張り上げ、覚醒させる。

吾輩は、同居人にしてサーヴァントである彗星のアルテミット・ワゴンにして根源接続者である「ORT」のお陰で、封印指定から難を逃れた名も無きマスターである。

起源は無銘。魔術回路は13本。魔術師などという高等な熟考者ではなく、魔術という神秘をただの道具として扱うだけの平凡普通な魔術使いだ。

「……さて、と。」

ある事情により塞がってしまった右手は動かさず、左手を上手く使って、掛けられた布団を大きく退かす。

曝け出された体を、冷たい風が撫でる。やはり、とても寒い。季節がまだ冬なのだから、当然と言えば当然ではあるのだけれど。

だが、それを入れたとしても……やはり、寒いものは寒い。しかし、私は朝食を作らなければならない。

私の同居人の数少ない楽しみの一つである、ご飯を作らなければならないのだ。

その為にも、今から起きて下準備をしなければならない。

ので、私の右腕を抱き締めてぐっすりと眠っている同居人を今から起こします。

「ORT、ORT。起きろ、朝だぞ。」

肩まで伸ばした艶のあるサラツとした金髪の髪と、細くもハリのある体を持った少女。

私の同居人にした、私が喚び出したサーヴァント。

遙か先の未来、破滅して荒廃しても尚、人類が生き延びた地球に飛来した各惑星における最強の生物達の集団である『アリストテレス』の一体。

本来の時間よりも早く来てしまったドジっ子にして、型月世界における物理最強の生命体。

彗星より飛来した極限の単独種。究極の単一個体。輝ける一つの存在——その別個体。

本来の存在よりも更に早く南米に墜落し、そして勇者王によって心臓を抉られた星を喰らう大きな蜘蛛。

一年の時と異星の神、その分霊の心臓を得て復活し、長い戦いの果てに倒されてしまった絶望の象徴。

ソレが、別の世界において開催された聖杯戦争の勝者にして『』に繋がった、少女の形をした全能を依代とした英霊。

ワン・ラディアンズ・シング——ORTである。

「んっ……もう、朝なのですか……」

目を擦りながらも、しかし彼女が私の右手を離す事はない。いや、離してほしいんだけど……。

抜こうとしても、力が強くなって抜けられないのでどうしようもないのである。

「おはようございます、ますたあ……」

まだ眠気が抜けていないのだろう。柔らかく小さな声で、ORTはおはようと言う。

可愛いな、と思いつつも、しかし私は彼女の為に、台所に行かねばならないのだ。

「おはよう、ORT。そろそろ朝食を作るから、手を離してくれないか？」

「……イヤです」

「ええ……っ？」

「今日は……まだ寝ましょう。」

「そうは言ってもな……私は仕事があるんだが……」

困った様に頭をかきながら、私は悩む。

私はORTの手を取り、奇跡に等しく何とか『ガルガリンの星』を避ける事が出来た。

それからは色々と危うかった。彼女が真名開放し掛けてしまった時は本気で焦った。

恐らく、アラヤとガイアの狙いはそこにあっただろう。

彼女が自身の力を使い、蜘蛛へと戻る事。そうすれば、ORTを確実に殺す事が出来る唯一無二の人間である「騎士」を呼ぶ事が出来るのだから。

だが、そうしなかった。そうさせないように尽力した。その結果、平和を手にする事が出来た。

ORTに秘められた危険性の進化が続く事、そのトリガーが私の死である事を理解した魔術協会と埋葬機関は、苦渋の決断として封印指定執行は取り消してくれた。

蒼崎青子には私の令呪が如何に大きな力であるかを認識させた、その絶対性を教えた。また、私が見た夢の事についても教えた。

マスターがサーヴァントの夢を見る事は、別に珍しい事ではない。だが、そのサーヴァントが異次元の存在であるならば話しは全く別だ。

クラスがフォーリナーであるなら、尚更。これがアビゲイル・ウィリアムズだったならSAN値激減で発狂ものだ。

その信憑性が確かである事は、私自身がよく知っているのだから。

…まあ、閑話休題。

私とORTは平和を掴んだ。確かな日常を、この手に掴み取ったのだ。

私は仕事がある身だが……

「——そうだな。今日くらい、良いかな。」

やっと手に入れた、平和なのだから。

「あと少しだけだぞ?」

「はい……おやすみなさい、マスター。」

「ああ。おやすみ、ORT。」

□ □

青色の綺麗な花々が咲き誇る花園が、大きく幻想的な神秘の城を強調させるように彩っている。

「……」

花園に倒れている体に力を込め、体を起こす。

視界は良好。意識も、一変の濁り無く清々しい。

此処が何処であるか。自分が何故、此処に居るのか。そんな事は、無銘の男は既に分かり切っていた。

「千年城——ブリュンスタッド。」

千年城ブリュンスタッド。

真祖の姫、吸血鬼の原型となった月の王の新たな形となる地球の分身体——アルクエイド・ブリュンスタッドの空想具現化によって顕現される彼女の居所。

空想具現化。マールブル・ファンタズム。

固有結界の対極。生まれながらの吸血鬼・真祖が『星の触覚』というある種の精霊のような存在であるが故に、自らの意思と星を直結させて思うままに世界を変化させる事が出来るという、神秘の御業。

それによつて作り出された世界、或いは夢の中における中心に、男は居たのだ。

「あ、起きました？ 良かった、もしかしたら起きないんじゃないかって心配しましたよ。」

背後から、生前から聞き覚えがある声があった。

何故、彼が此処に居る？ という疑問は浮かんだが、しかしそんな疑問よりも彼をこの目で見たいという欲求に駆られ、男はすぐに後ろを振り返った。

青色の制服を身に纏い、眼鏡を掛けた『外見普通』の男子高校生。

しかし、その実態は万物の綻びを直視する事が出来る特殊な瞳である「直死の魔眼」を持った、退魔四家の内の一つである七夜の当主であった「七夜黄理」の息子である。

魔を殺す者——アルクエイド・ブリュンスタッドを殺害した張本人。

「遠野志貴……」

「やっぱり知ってるんですね。はい、遠野志貴です。こうして会うのは初めてですね、無銘さん。」

月姫の主人公——遠野志貴である。

「どうして、君が……まだ、時系列的に月姫は始まっていない筈なのに……」

「まあ、これはあくまで『一時の夢』ですから。本来なら居ない俺も、此処に居るんです。……まあ、居るといふよりは連れて来られたの方が正しいんですけど」

呆れた様な顔をして、はあ……と、遠野志貴はため息を吐く。

ああ、なるほど。と、男は察した。どうやら、彼もまたお転婆なお姫様に連れて来られてしまったらしい。

「あ、起きてる！ おーい、こつちこつちー！」

「マスター、こちらです。」

お転婆な真祖とドジっ子な最強が、此方に手を振っている。

片方は笑顔で。片方は無表情で。その容姿も相まって、その姿は何処となく姉妹のようだった。

「ORTまで……」

「あいつ曰く、『似た者同士、恋バナつてのをしましょう！』らしいです。」

「恋バナ……恋バナか。アルクエイドらしいな。」

「でしょ?」

「ああ……まあ、私は君や彼女と比べれば、特に進展も無いし、何なら付き合つてすらいらないがな。」

「え、そうだったんですか?」

「まあ……今はまだ、な。とりあえず、先輩として、色々と話しを聞かせてくれ。」

「波乱ばかりですど……それでも良いのなら。」

笑いながら、少年はそう保険を掛けて言う。

それに対し、男もまた笑って返した。

「波乱なんて、『この世界型月』じゃお約束だ。もう慣れたさ。」

二人の男と二人の乙女は、その日、互いの話しをした。

色々な、日常の話しを。

b a d e n d ✓

「星喰らう蒼き日輪」

■ ■
熱い、熱い、熱い。

体が熱い。意識が遠のいていく。

下半身は無くなった。腰から下の肉体は、切り離されて焼き尽くされた。

だが、だが、だが。ただでは死ねない。このまま、簡単に死んではならない。

焼き尽くされたお陰で出血は多量ではない。傷は焼かれて塞がっている。

まだ——言葉は出せる。

彼女を助ける為の言葉は、吐き出せる。

「……令呪を以て、我が星に命ずる」

言葉を吐き出す。

もはや細かく考える事も出来そうにない頭と、何とか繋ぎ止めている意識を使つて言葉を放つ。

「ますたー……？」

涙を流す少女が、吐き出される男の言葉に耳を傾ける。

男の目は少女を見ていない。否、そもそも光が灯っていない。

もはや視界は靄に埋め尽くされている。蒼い夜空も、男を覗き込む少女の顔もソレは分からない。

ソレは、もはやただ言葉を吐き出すだけの肉塊に過ぎなかった。

「我が心臓を喰らえ。」

「——」

少女の瞳が翡翠に変わる。

少女の顔が歪み、拒絶の意を顕になる。

ぎぎぎ、と使い捨てられた古い機械のように、少女の口が徐々に徐々に開かれる。

涎が溢れる。涙と共に、ソレの肉体へと零れ落ちる。

「何故、何故……!? ますたー、マスター……!」

少女が問う。

されど死体は喋らない。屍は答えない。

ただ、言葉を吐き出す。

「最後の令呪を以て、我が星に命ずる

どうか、私の分も生きてくれ。」

吐き出される、呪いの言葉。

口角が、僅かに上がったよう。少女は、そう捉えた。

少女の顔が、男の胸の真ん中に近づく。

「くっ……! それは、やっちゃダメでしょ!」

焦燥を浮かべた蒼崎青子が、男を喰らおうとする少女に向かって魔弾を放つ。

少女の頭に魔弾が直撃する。されど、少女の頭は消し飛ぶ事もなく、僅かに血が流れる程度だった。

もはや、間に合わない。

開かれた口が、男の胸を——喰らった。

魔力が迸る。魔力が暴れる。

少女の姿をした蜘蛛の体内で、それまで摂取した事のない絶大的なエネルギーが、細胞の隅々まで行き渡る。

だが——

「ああ……ああああああああ……!!!!!!」

そんな事よりも。そんなどうでもいい事よりも。

少女は流血し続ける亡骸を抱き、慟哭を夜へと放つ。

ぽっかりと孔が空いてしまった胸。閉じられた瞳。冷たい体。

名も無きマスターは、遂に存在すら失った。

本当に、名すら無い『物体』になってしまった。成り果ててしまった。

「……」

蒼崎青子が近付いてくる。

物言わぬ死体となった友に。死体を抱く蜘蛛の元に。

蜘蛛は、すぐさま死体を抱き締める。

取られぬように。奪わせないように。もうこれ以上——何も失わないように。

「……生きなければ」

蜘蛛が呟く。

／殺さなければ。

「……マスターが、そう願ったなら」

蜘蛛が立ち上がる。

／復讐しなければ。

「私のマスターが、私に生きろと言ってくれたなら」
蜘蛛が顔を上げる。

／——理想を破ってでも、抗わねば。

「その為に——貴様を殺す。」

翡翠が群青に変わる。白銀が漆黒に変わる。

空が解けていく。宇宙が溶けていく。

蜘蛛の上に浮かぶのは、巨大な召喚式。

これまで、蒼崎青子が一度も見た事のない大規模な召喚式。

否、否、否。

違う、違う、違う。

あれは召喚式であって召喚式ではない。これは召喚術であって召喚術ではない。

召喚式を象った再臨式。召喚術を象った最終式。

この世界が反応しない裏技。霊長の抑止力と惑星の抑止力が反応を示す事が出来ない裏道。

サーヴァント。過去の偉大なる英霊。

その存在を、その概念を、抑止力は容認している。

アラヤは許容している。ガイアは公認している。

蜘蛛が反応を示されるならば。英霊を止めて、本来の姿に戻れば、最果ての未来における最強の剣士が召喚されてしまうならば。

英霊を止めぬまま、しかし絶望の力を手に入れてしまえば良い。

英霊の最終状態という名目で、本来の力を最終霊基になって手に入

る力であると無理矢理に納得させれば。

「膨大かつ濃厚な魔力による霊基グラフの極限化を確認。

英霊体の霊基再臨を開始。無銘の心臓との一体化を同時に開始。

根源への接続を強制容認。座への干渉、観測記録と情報記録の定義改竄を開始。

3億年に渡る異聞人類史と観測宇宙時間146億年を総合統括。

発生観測時間 活動観測時間 149億年に再定義。

真名開放 オルト・シバルバー——再臨完了」

絶望が——現れた。

もはや、それは少女の姿をしていない。だが、大きな蜘蛛の姿もしていない。

蜘蛛を無理矢理人型に加工したような無機質。背丈こそ人間大。

肉体は漆黒。宇宙は、群青に歪んでいる。

心臓を得た蜘蛛。少し先の未来、人理を保障する機関が対決させられた蜘蛛。

その人型こそ絶望の機構。心臓を得て、完全に復活した蜘蛛が、人型になったものと大して変わらない。

「——そう。それが、答えな訳ね。」

もはや正気は無い。

だが、諦めるつもりもない。

無謀な戦いであったとしても——やらなければならない事が、あるのだから。

「炉心駆動によるジンの発生を確認・心臓への即充填を開始。

ジンの完全充填を確認。侵食固有結界《水晶溪谷》の特性を宝具との混同・合成を確定。

根源接続による大規模な銀河の速攻構成を開始。同時に地上においての高速回転を開始。」

空が回る。宇宙が廻る。

世界が廻る。銀河が廻る。

大地が崩れ、境界が歪む。

根源。この世の全て、ありとあらゆる全ての源。究極の一そのも

の。世界そのもの。

それに繋がった彼女は、世界を意のままに操る事が出来る。生態系の変更・系統樹の新たな枠組みの追加など、様々な事を。

それに、O R Tという生物の性質が加わった。

故に、銀河を創り出す事が出来る。そして、それを超高速で回転させ、三次元に収まる事が出来ず、空間そのものを崩壊させてしまう程の膨大なエネルギーを発生させている。

そして、それを風として利用するのだ。

この世界を熔かし、ありとあらゆる全てを悉く滅ぼす暴風を吹かすのだ。

「宝具発動——是即ち、この星を喰らい、焼き尽くす群青の日輪。」

『宇宙熔かす不滅の日輪』

銀河の嵐が息吹く。

融解の暴風が吹き荒れる。

何もかもが、溶けて、彼女になっていく。

□ □

「……？」

途切れた筈の何かが、元に戻った様な感覚がした。

そんな感覚を覚える体ではなくなった筈なのに、何故なのか感覚を覚えた。

瞼を開き、曇った空のような黒色の世界をその目に映す。

「よお、目は覚めたか？」

その声を聞き、バツと体を叩き起す。

焚き火の前に居座り、軽薄そうな笑みを浮かべる金髪の男。

それを、私は知っている。その英霊を…否、その神霊を、私は知っている。

「全能神テスカトリポカ…なら、此処は…」

「そう。此処はミクトランパ。戦士達が休息を得る事が出来る楽園の場所だ。」

南米異聞帯における異聞帯の王にして、マヤ神話における全能神。

戦争と死を司る、善悪を超越した絶対者——テスカトリポカ。
そして此処は、戦死した戦士達が休む事の出来る唯一の場所。

戦士達の楽園——ミクトランパである。

「何故、私が此処に…」

「興味本位さ。お前は決して、相手を殺そうとはしなかった。しかし戦いから逃げる事もしなかった。カルデアのマスターと同じ」

「違う。それは絶対に、違う。」

「……ほう？」

人類最後のマスター、藤丸立香と在り方が似ていると言いつつ切ろうとしたテスカトリポカの意見を、しかし私は素早く否定した。

違うさ、ああ違っても。私と彼を一緒にするのは、彼に失礼だ。

「私は藤丸立香の様に、何もかもが普通であつた訳ではない。生まれの時から凡人であつた訳ではない。何より、彼のように死物狂いで戦いを生き抜いた事がない。ただ相手を殺そうしないというだけで、彼のような立派な人間と私を一緒にするべきではない。」

藤丸立香は死物狂いで足掻いている。決して私とは違う。私よりも、彼は何倍も強い立派な人間だ。

死にたくないから戦う者と、死ぬ訳にはいかないから戦う者とは、確かな差があるのだ。

私は彼より弱い。彼よりも、戦士に値されない人間だ。

「——よく言い切つたな。お前への見方は、変えた方が良くかもしれないな。」

「…それより。興味本位で私を呼んだと言つたが…それは、私がORTのマスターであつたからか？」

「ああ、そうだ！ それだよ、それ。あのORTのマスターになつたお前から、色々と聞きたかつたんだよ。」

「…貴方が興味を持つような話しは、何もない。」

「その心は？」

「彼女は——私達が思うよりも、ずっと人間らしい娘だったからだ。」

「——そうかい。なら、尚更聞きたいね。」

星を滅ぼした奴を、ただの娘であると言うお前の意見が。

テスカトリポカは笑った。彼の意見を、彼のORTへの見方を。

彼は真剣に話した。ORTがどのような人間性を持っていたのかを。

その間に、世界が壊滅寸前にまで進み、特異点となってしまう事など知らずに。

マテリアル
沙条愛歌〔ORT〕

★★★★★

Foreigner

沙条愛歌〔ORT〕

CV：豊崎愛生

《キャラクター召喚》

彗星より飛来し、目覚めと共に星を己が故郷で喰らい尽くす究極の
一にしてどうしようもない絶望。
人理を元に戻す為に戦った彼らの力を学習し、無理矢理に英霊の座
に至った彼（もしくは彼女）は、此度は自身と同類の要素を持つ少女
の身で臨界した。

《パラメーター（第一・第二霊基）》

筋力： ■■■□□・C++

耐久： ■■■□□・B++

俊敏： ■■■□□・C++

魔力： ■■■□□・B++

幸運： ■■■□□・D++

宝具： ■■■■■■・EX++

《パラメーター（第三霊基・最終再臨）》

筋力： ・Error

耐久： ・Error

俊敏： ・Error

魔力： ・Error

幸運： ・Error

宝具： ・Error

《プロフィール》

身長／体重：142cm・37kg

出典：Fate／蒼銀のフラグメント・TYPE―MOON

地域：日本・彗星

属性：秩序・中立 性別：女性

「地球は、思ったよりも平和そうですが。」

《プロフィール2》

聖杯戦争のパラレル、冬木ではなく東京で起きた聖杯戦争にて、その全能性を遺憾無く発揮し、何の苦勞もなく勝利を手にした恋を知った元全能の少女「沙条愛歌」を依代とし、サーヴァントとして召喚された宇宙の蜘蛛。

自身が持つ侵食固有結界『水晶溪谷』の『惑星の表面を自身の故郷の姿で侵食する』という『存在する領域を自分のためだけの世界に塗り替える』特性と空想樹で構築した仮想未来によつて自身を強引に英霊の座に登録した、とんでもない怪物。

倒されようとも記録が消え去る訳ではなく、困り果てた根源は、その怪物と同じく『世界を滅ぼす事が出来る要因』を持った少女を依代にさせた。

少女を依代にした為にパラメーターが本来よりも下がっているが、その強さは依然変わらずだ。

彼女を呼び寄せてしまった名も無いマスターは、いったいどうなるだろうか。

《プロフィール3》

性格は機械的・友好的。

名も無きマスターとの生活と三咲町の人々の接し方のお陰で人間に対する価値観が変わっており、元の性格から大きく変化している。好物なども出来た。

主に肉や甘い物が好物になっており、肉では特に肉巻き（名も無きマスターが初めて作ってくれた食べ物）が好みのように、出されようものなら1秒間経たずに食べ尽くす。

甘い物ならパンケーキ。これまた名も無きマスターが初めて彼女に作った物。パンケーキと言ったらコレ、と固定しており、彼が作るパンケーキ以外は口にしないと決めているようだ。

人類に対する価値観が変わっている為、星がどうしてSOSを出したのが全く以て理解出来なくなっており、彼が死なない限りは自らこの星を喰らう事はしなくなった。

《プロフィール4》

エーテル・ドラムカー：EX

第五架空要素を吸収し、自分のモノにするスキル。転じて、英霊のスキルとしては魔力を用いたありとあらゆる攻撃の威力を半減するというスキル。

EXともなれば、ゼルレッチが用いる魔術すら無効化する事が可能であり、魔術師や並の英霊であれば歯が立たない。

パルセイテイニング・ヴァリアブル：A

異常なまでの環境への適応能力が反映されたスキル。転じて、自分のクラスを自在に変化させる事が出来るスキル。

パラドクス・エフェクター：E↪EX

座の本体に逆接的に干渉して、そこから強化の情報を自身に入れ込むスキル。あらゆる状態を強化し、デバフをバフに変える。

《プロフィール5》

『根源接続・銀河天嵐』

ランク：EX 種別：対界宝具

レンジ：1↪999 最大捕捉：999人

ギャラクシー・ストーム

沙条愛歌の肉体を利用し、根源に繋がる事で範囲内に複数の銀河を創造し、複数の銀河を無理矢理に混ぜて嵐を形成して敵にぶつける。星ではなく、星々を含む銀河そのものを内包させている為、宝具を使用したその空間は決してタダでは済まない。

《プロフィール6》

身長／体重：不明・不明

出典：Fate／Grand Order

地域：彗星

属性：理解不能 性別：不明

《プロフィール7》

有り得たかもしれない未来において、名も無きマスターは自身の心臓を彼女に捧げた。彼女が生き残れる様に。

マスターを失い、悲しみと憎悪に染まった彼女は夢とは違う形で絶望へと至った。

蜘蛛に戻れば剣士が召喚される。ならば、蜘蛛に戻らず英霊という存在のまま絶望に成れば良い。

愛する者の心臓を喰らい、霊基を最終状態へと進化させた彼女はもはや人の姿をしていない。

それこそワン・ラディアンズ・シング。またの名をオルト・シバルバー。

黄金の肉体を漆黒にし、翡翠の宇宙は群青の空に侵された。

《プロフィール8》

ジン・ガンナー：A

人類のみならず、地球そのものに有害な物質を放出するスキル。

それは荒廃した地球にいつか見出されるものであり、人類はそれにすら適応した。だが、今にとつてそれは劇毒である。

PPチェイン／ソーラー・ストーム

太陽が行う核融合を行い、太陽風を発生させて周囲に悪影響を与えると共に自身を強化する。

悪影響を与える相手は敵味方無関係であり、しかしそれをORTが気にする事は無い。

逆説効果／膨張現象：EX

逆説効果による膨張現象で、自身を強化するスキル。

サーヴァントはマスターが居るから現界する。

もしも。もしも、ORTが殺されたとしてもマスターが生きているならば、逆説的に使役されているサーヴァントが存在する事になる

為、ORTは蘇る。そして、更に強くなる。

《プロフィール9》

『宇宙熔かす不滅の日輪』

ランク：EX 種別：対界宝具

レンジ：1～999 最大捕捉：999人

オルトネビユラ

自身を根源に接続し、複数の銀河ではなく超大規模な銀河を三次元空間内に創り出し、超高速で回転させる事で三次元空間を崩壊させる程の膨大かつ濃厚なエネルギーを創り出し、それを太陽風として利用する。

更には侵食固有結界の特性すら混ぜ込み、合成している為、その太陽風に触れてしまえば一瞬で食われてしまう事となる。

小規模とは言えど、一つの銀河が創り出されただけで空間を変貌させるにも関わらず、それが超大規模な銀河となるに加えて侵食固有結界の特性も混ざっているのだから、もはや世界は原型を保つ事で出来ないだろう。

彼女は今も彼を探している。彼を蘇らせる方法を模索している。

この世の全てを変貌させて尚、彼女は彼を愛している。

無銘のマスター

名も無きマスター

令呪

紅蓮のたまり醤油さんが配布している令呪診断のフリー素材の令呪イラストの一つです。

《キャラクター詳細》

沙条愛歌を依代とし、疑似サーヴァントとして顕現したO R Tのマスターにして名も無きマスター。

分かっている情報が少なく、名前は本当に無い為、名を呼ばれる事は本当に無い。

《プロフィール1》

身長／体重：176cm・51kg

出典：無し

地域：不明

属性：秩序・善

性別：男性

《プロフィール2》

彼は彗星より地球に飛来した究極の単一個体O R Tのマスターであり、それでいて彼女（依代が少女である為）の世話係でもある。

一般的な仕事能力が高く、家事のスキルもまた高い。

「仕事はして当たり前だし、彼女は家事が出来ないからな。」

《プロフィール2》

彼はマスターであり、しかし魔術師ではなく魔術使いである。

マスターと言っても、出来る訳も無いと思っていた召喚術を試したら出来てしまったという、謂わばなんちゃってマスターであり、決して聖杯戦争の参加者という訳ではない。

魔術使いとしても決して秀でている訳ではなく、魔術回路は13で、基本的には強化魔術やガンド、変化魔術といった魔術しか扱う事

が出来ない。それに加え、精度も高い訳ではない。

だが、その魔術回路に『異常』は有った。

《プロフィール3》

彼の魔術起源は『無銘』。

誰かに名を付けられない、何かに名を付ける事も出来ないという生涯『誰にも名を呼ばれないし、誰かに名を付ける事も出来ない』運命を辿る起源が無銘。

彼は現実世界から型月世界へと転生した。『転生者』だが、自分が転生者である事を憶えていない。いや、正確には『自分が転生者である』という認識が出来ないのだ。

彼は型月世界に転生する前までは自分の名前、自分の家族の事などが認識出来たが、転生してから『無銘』の起源が刻まれてしまった為に自分の存在を正しく認識する事が出来なくなってしまった。

彼は名は体を表す、という古くからの固定概念が通用しないのだ。『自分の名前が無い』≡自分が何者であるのかを認識が出来ない』という事に繋がっている。

その為、彼は型月作品の知識は有るが、『生前の自分』を認識する事が出来ない。

誰かに名を呼ばれる事も名を付ける事も無く、しかしあらゆる知識を身に付けた名も無きマスターは、それ故に座より彼女を押し付けられた。

だが、逆説的に言えば、彼は『何者にも成れる』という事でもある。

《プロフィール4》

魔術回路：質／EX++・量／E・編成／異常（過去に該当無し）

量こそ13本と平均より少ないが、13という数字は古き時代から現代まで伝わる忌み恐れられる、666と同一視される不吉な数字であり、誰もが認知し恐れる未だ名残りある数少ない確かな『神秘』である。

その一本が起動するだけで鐘が鳴ったかのような音を出し、大魔術を発動出来る程の綺麗かつ濃厚な魔力を生成する質を持っている。

彼が魔術回路の一本を起動し、強化の魔術を使えば、拳の一撃は地

面を叩き割り、脚の一撃は家すら砕き割る威力を誇る。

彼が聖杯やアラヤ、ガイアのバックアップも無しにサーヴァントを召喚する事が出来たのは、ひとえに彼が生成する魔力が多く濃いものであったからである。

《プロフィール5》

○強化魔術：E X

身体能力・身体強度を強化するだけの魔術。一般的な魔術回路を持つている魔術師であれば、苦勞せずに習得出来る簡易的な魔術。

彼が扱うこの強化魔術も、決して精度が高い訳ではない。だが、彼の持つ膨大で濃厚な魔術回路が強化魔術の質を極限にまで高めている。

拳を振るえば大気を揺るがし、足を抜けば地を砕く。

○変化魔術：E X

元から有る物に、本来なら持っていない機能を付与する事が出来る、特性変化の魔術。

斬るだけの剣に発火の能力を付与させるのがこれに当たる。

強化の魔術の延長にある魔術とされているが、本来なら存在しない機能を後付けするこの魔術は強化よりも高難易度。

ただの魔術使いである彼であるが故に、習得するのがやつとであり、スキルで表すならレベル1の状態。つまり、上手く扱う事は出来ないのだ。

だが、これまた彼の魔術回路の影響で、人の身で比べれば規格外に向上してしまっている。

○魔弾：E X

蒼崎青子が使用する魔弾と同じ系統の魔弾。装填する速度・発生させる速度こそ魔術師として完成した蒼崎青子に劣りはするものの、それどその威力と発射速度は魔法使いとしての蒼崎青子すらも大きく上回る。

蒼崎青子の魔弾を適当に放たれるアサルトライフルの弾丸とするならば、彼の魔弾は正確に狙いが定められたマグナム弾である。

《プロフィール6》

『終末を告げる無銘の鐘』

ランク：EX 種別：対軍宝具

レンジ：1〜100 最大補足：100人

ノーツ

心臓に刻まれた七本の魔術回路と、両腕両足両目の其々に二本ずつ刻まれた計六本の魔術回路の全てを駆動させて使用出来る、破壊に特化した大魔術。

蒼崎青子がフラット・スナークに対して使用した魔術の見様見真似だが、蒼崎青子の平凡的な質などではなく、規格外の質を持った彼が使用している為、その出力は本人すらも上回っている。

「空想浸食都市 三咲」終焉を告げる鐘
序章「名も無き英霊」

「ミクトランでの激戦を終え…そして、最後の戦いへの準備を進めていた諸君に、最悪の情報を伝える…」

ノウム・カルデア。新しいカルデア。

その所長を務めるゴルドルフ・ムジークが、顔を青くしながら、そう話し始めた。

何だ何だ、とざわめくスタッフ達と、どうしたんだろう…と、神妙な顔付きをする藤丸とカドツク。

皆、確かな不安を覚えていた。

「我々はミクトランでORTと戦い、そして苦戦の果てに勝利を収めた。だが…どうやら、奴は滅びてなどいなかっただらしい…」

衝撃、なんて言葉は生温い。

驚愕、なんて言葉は生易しい。

絶望。思い浮かんだのは、その一言だ。

何度も体験したソレを、再び体験させられた。

何度も突き刺された刃物を、再び突き刺された。

そんな、酷い気分には陥れられていた。

ORT——最強の侵略生物。カルデアが対峙してきた、どんな敵よりも圧倒的な強さを持った絶望の壁だ。

ORTは、確かに滅びた筈だった。

自身の一部、子供の様な存在である彼女に——ククルカンに、打倒された筈だった。

彼等は、その瞬間を見たのだから。

最後の最期を、その目で見届けたのだから。

間違える訳がない。見逃す筈がない。

だが———— 現実には、そうではなかったのだ。

全員が絶句する中で、ダ・ヴィンチが言葉を紡いだ。

「昨夜、一つの特異点が観測された…その特異点に、我々が戦ったORT…いや、藤丸くん達が見た、『事象転換』によって起こされたORTと同じ反応があった。」

「そ、そんな……」

「ウソだろ…また、あんな怪物と戦えっというのか…」
「……」

オルト・シバルバーという、無限に蘇る絶望と戦う前。

藤丸立香達は、その異聞帯の王である戦争と死を司る神であるテスカトリポカの事象転換によって、『イスカリという心臓を得たORT』を、一時的にだが呼び起こした。

そのORTは、正しく圧倒的だった。攻撃が通る事はなく、当たりはすれど一切の負傷はしなかったのだ。

その戦いは、抵抗すら出来ない蹂躪で終わった。

オルト・シバルバーは、あのORTとは違う。

オルト・シバルバーとは、言ってしまうえば弱体化したORTが選んだ策の一つであり、ある意味ではさらなる弱体化である。

あれはサーヴァントだった。存在こそ異質かつ歪ではあったものの、確かなサーヴァントだった。

だが、その特異点に居るORTは違う。

心臓を得たORTが、オルト・シバルバーの形になっている。凶体が大きく、俊敏だったという訳でもなかったORTが、心臓を得て人型になっている。

侵食固有結界も使えるのだから、もはや勝ち目など皆無同然だ。

「手段は……」

「無いだろうな…あんな怪物を相手取れるヤツなんて、もう……」

『境界記録帯の干渉・改竄、それ伴う、座に新たな英霊の登録を確認。』

立体並行世界による記録帯の改竄

30年に亘る個人歴史の総括

これらを用いた、仮想英霊体の構築を確認しました。

生物分類：人類種 真名：無し

サーヴァント：クラス アーチャー

無銘 が 召喚されます』

「は？」

第一話 「無銘の凡人」

■ ■
吾輩はサーヴァントである。名前など無い。

勘違いしてはいけないのだが、私は決して英霊エミヤに連なる方の『無銘』ではない。

ただ単に、私の起源の都合上、無銘と表記する事しか出来ないからだ。故に、私には真名が無い。

真名が無いからこそ、私の呼称は「無銘」となっているのだ。まあ、クラスまで同じなので、勘違いされても仕方ないとは思うのだが…残念ながら、私は白髪でもなければ褐色でもない。

何よりの特徴である投影魔術も無限の剣製も使えない。

強化魔術と変化魔術、そして魔弾しか使えないだけの魔術使いのサーヴァント——それが、この私である。

…して。

「……ええ？」

私は自分の体を見て、最初に困惑した。

腰から下が有る事は勿論、そもそもとして英霊として生き返った事に困惑していた。

何故？ え、何故？ 吾輩、別に英霊に成れる程の偉業とか記録持っていないよ？

英霊とは、英雄が死後、精霊として祀り上げられた存在だ。つまり、大抵は必ず、誰かがその英霊となる人物の事を知っていて、後世に語っているという事になる。

抑止力に身を捧げ、守護者となった英霊を除けば、私の様な英霊は例外も良い所だ。

知名度補正も無ければ積み上げた歴史も無いし、最低限の前提である偉業すら為していない。

そんな存在は、本来ならば決して英霊になぞ成れはしない。

成れはしない…のだが……。

「成ってるんだよなあ、これが……」

サーヴァントに成ってるんだよなあ、私……

と、私も私で混乱していると、ふと気付いて周りへと目を向ける。すると、やはりと言うべきか……ノウム・カルデアの全員が驚愕していた。

まあ、それもそうか。トリスメギストスⅡが反応を示し、英霊の召喚を報告するなんてO.R.Tの時ぐらいなものだからな。

……なんか、ゴールドルフ所長は有り得ないものを見ている様な顔してるな。もしかして、私の事を知っていたりするのだろうか。

まあ、私、一応ではあるが封印指定にされていたからな……名は広まっているのだろう。

だが、藤丸やマシユ辺りは知らないだろうし、取り敢えず自己紹介しておくか……

「あー……初めまして、カルデアの皆さん。私は……名も無いサーヴァント。無銘、何でも屋さん、アンタ、お前、貴方……兎に角、名前の無い男だ。呼び方に困るなら、アーチャーか無銘と呼んでくれ。あ、あと敵ではないので、よろしくしてほしい。」

取り敢えず、こんな自己紹介で良いだろう。

周りの反応を見るに……まあ、敵対意思を持たれてはいない様だ。警戒はしているが、それは当然と言えば当然か。

いきなりサーヴァントが現れたのだから、そりゃ警戒もするだろう。私ならする。何なら強化魔術を掛けておく。

「あ、藤丸立香です。えつと……よろしく？ 無銘さん。」

「マシユ・キリエライトです。よろしくお願います、無銘さん。」

何と、藤丸とマシユの二人は私に自己紹介を返してくれた。

ああ、やはりこの二人は優しいな。って、あれ？

藤丸の髪はオレンジ色だっただろうか？ 私の憶えている限り、ぐだ男の髪はオレンジ色ではなく黒色だった筈なのだが……

……ああ、これぐだ男じゃねえ。ぐだ子だ、これ。

「あ、ああ……態々ありがとう、二人共。」

私はその事実には戸惑いながらも、何とか感謝を返した。

予想外だ：まさかぐだ男ではなく、ぐだ子とは。

私がやっていたF G Oではぐだ男にしていた筈なのだが：どうやら、そこから間違っていたらしい。

ちゃんとした世界に私は転生していたのだな：正直、私のデータの世界に転生していたとばかり考えていたが、まずそこからは。恥ずかしい限りだ：

いや、閑話休題。

「私が喚ばれたという事は：恐らく、特異点の攻略だろう。合っているか？」

「合っているけど：何故、君がそれを知っているんだい？」

私がおのれに言ってみせると、キャプテン・ネモが怪しむ様な目を向けて追及してきた。

確かにそうか。私はつい先程、召喚されたばかり。それにも関わらず、特異点の事を知っているのだから怪しむのも無理はない。

だが：これは言っていないものか。正直、悩ましいが……。

とは言え、特異点を攻略していればいつかはバレるものだからな：うん、言ってしまうか。

言い逃れるつもりも無し。そもそも、この特異点が出来た原因は――

「私が、この特異点を産む過程を創り出してしまった男だからだ。」

私が、彼女の手を取らなかつた事が……招いてしまった事なのだから。

私の所為で、彼女を苦しめる結果を創り出してしまった。

私の所為で、彼等を苦しめる事態を引き起こしてしまった。

私が召喚された理由は――後始末を付けろ、という事なのだろう。

「…それは、どういう事だい？」

「……話せば長くなる。それでも構わないか？」

私と彼女の始まりから、そしてその最期までを語るのなら。

とても、とても――長くなる。

たった数週間の事だったにも関わらず、私は数年の事を喋っている

様な感覚に陥った。

□ □

私とORTの出会い、私とORTの行動など、様々な事を話し終えた私は、彼等カルデアから少しではあるが、信頼を得る事が出来た。特異点を生み出した元凶。世界を滅ぼす要因。そんな私だからこそ、少しであろうと信頼を得られるのはありがたい事だった。

「三咲町に留まって、世界を破滅寸前まで追いやっている、か……三咲町に留まったのは、思い入れがあるからなのか、ORT？」

此処には居ない、もう私のサーヴァントではない彼女に、私は独り言で問い掛

「うーん、どうでしょう……私には、あんまり分かんないですね。」

□

突如、背後から発せられた声に私は驚き、体の向きを右へと変えて地面を蹴り、一瞬で壁際へと移動する。

まるで、後ろにキュウリを置かれた猫の様な反応で驚いた私に、

「わお！ 貴方、とつても速いですね！」

と、彼女——「ククルカン」は、純粹に凄いという感情を込めて笑った。

「く、ククルカン……」

「はい、ククルカンです！ 初めまして、ORTの元マスターさん♪」
ニカツ、と。太陽の様に、彼女は笑っていた。

ククルカン——マヤ神話に登場する神格の一柱であり、アステカ神話における文化と農耕の神であるケツアルコアトルと同一視される神格。

至高神にして創造神、四つの元素を司る最高の神。全能神テスカトリポカと敵対する神にして、異聞帯の王が一人。

そして——その正体は、異聞帯における太陽の神にして、アーキタイプ：ORT。

つまり、勇者王カマツツソに挟られたORTの心臓、その化身である。

「な、何故、此処に……？」

「特に深い理由は、何も。ただ、純粋に聞きたかったので来ました。」
「聞きたかった…？ 何をだ？」

私は首を傾げる。

彼女が知りたい事なんて、私は持っていない筈だが…。

現代に関する知識であれば、私ではなく彼女のマスターである藤丸に聞けば良い。

だからこそ、恐らく彼女が聞きたいのはそういった事ではないのだろう。

さて、いったい何を聞きたいのだろうか…？

「貴方に従っていた私——貴方が知るO R Tが、どんな人物だったのか。それを知りたいのです。」

「…O R Tについて？」

「ええ。キャプテンから少し聞きましたが、貴方に召喚され、貴方と共に暮らしたO R Tは、とても少女の様だったと言っていた、と。」

「…ああ、そうだ。少なくとも、彼女は…星を喰らおうとする生物ではなかったよ。」

美味しい物を食べると笑顔になってくれるし、町の人達と話す事もあった。近所の子供達と一緒に、色んな遊びをした事もあった。

私が見ていた限り…彼女は、ただの少女だったよ。知らない事が多い、可愛い娘みたいだった。」

私を作った料理を食べて、笑顔になってくれた。

私の知り合いと話し、良くされて気分が良かった。

近所の子供達と知り合い、お姉ちゃんと呼ばれては様々な場所に連れて行かれ、共に遊んで帰って来た事もあった。

そんな彼女は、決して怪物などではなかった。化け物などではなかった。

ただの少女だった。私にとって、彼女は——可愛い娘の様な存在だった。

「へえ……そっちの私は、随分と幸せだったのですね。」

「…どうだろう。」

「幸せでしたよ、絶対に。そうじゃなきゃ、特異点を創るまで世界を壊

そうとしないでしよう。」

「……」

「世界を壊す寸前で止めているのは、貴方が来てくれるから……なんて、思っているからなんじゃないですか？」

「ORTが……私を……」

………どうなのだろう。

いや、それは——明日になって、分かる事だろう。

第二話 「壊れてしまった愛しき故郷」

■ ■
レイシフト。藤丸立香・マシユが特異点・異聞帯へと向かう為に必要不可欠な転移方法。

正式には、疑似霊子転移。

人間を疑似霊子化：即ち、魂のデータ化をさせて、異なる時間軸、異なる位相に送り込み、これを証明する空間航法。

つまる所、タイムトラベルと並行世界のミックスである。

ざっくりと言ってしまうえば、物体を疑似霊子に変換し、任意の座標に転移させる移動法。

だが、その特異点・異聞帯の侵食濃度——本来の歴史からどれだけ変わっているかを示す値が大きければ大きい程、その座標にズレが生じてしまう。

その座標に異常があったり、もしくは異常気象が発生していたりする場合もある。その所為で、外部との連絡が取れなくなったりする。

何故、最初からこの様な事を喋っているのか？

そんなの、決まっている——

「いつものやつだあ…」

「ですよー…」

嘆く藤丸に、私も同意して嘆く。

表示されていた座標とは、全く別の場所。しかも、妙に見覚えのある山の中。

だが——その光景は、その現状は、決して私が見てきたものとは全く異なるものだった。

茶色の幹は濁った漆黒に変貌を遂げており、本来なら生っている筈の木の葉は全てが枯れ果てて青色に変色している。

青空は銀河の様に眩ゆく、同時に様々な色がぐちゃぐちゃに混ぜ込まれた様な禍々しさを放っている。

それを見て、私は理解する。この光景は、恐らくO R Tの侵食固有

結界『水晶溪谷』によるものである、と。

同時に、僅かではあるが息苦しきも覚えていた。

「…マスター、分かってはいるが、一応。外部との通信は？」

「…出来ない。でも、何となく理由は分かるよ。多分、キヤメロットの時みたいな感じなんだと思う。」

「神聖円卓領域キヤメロットか…確か、あの時は砂漠だったな。通信障害も起きていた……が、残念ながら、此処はそれよりも面倒かつ厄介なものが漂ってる…最悪なものが。」

私の予想が正しければ——この特異点全体に漂っている不可解な物質は、恐らく『ジン』だ。

ジンとは、原作者である奈須きのこが学生時代に書いていた短編小説の一つであるNotes——皆さんが知る所の、鋼の大地に登場する概念もしくは物質だ。

臨終した星、死に絶えた惑星、生物が住めない世界。彼等が生きていたその世界を、鋼の大地と呼んでいた。

その世界にはジンと呼ばれる、生物にとって有害な性質のみを持つ物質が溢れている。

だが、大体の生物はそのジンが溢れている環境に適應し、その体に多少なりともジンを含んでいる。

ジンのエネルギー効率は、これまでの人類史に類を見ない凄まじいものだった。ACで言うところのコジマ粒子の様なものだ。

私達は過去の人間だ。故に、ジンに対抗する手段など持つてはいないし、そう簡単に適應出来る訳もない。

「ジンが溢れているなら、この三咲町での活動はだいぶ狭まれる…何より、マシユとカドツクの身が危ない。」

「えっと…そのジンって？」

「ああ、ジンというのは、今より遙か先の未来…荒廃してしまった地球に溢れている物質の事だ。人体に有害なもの、と認識していれば良い。そうだな…マシユが持っている、ブラックバレル・レプリカ。そのオリジナルが効果を発揮する物質と言った方が良いかもしれないな。」

ブラックバレル。黒い銃身、星を撃つ銃器。

鋼の大地において、ゴドーが使ったアトラスが創り上げた禁忌の代物、その一つ。

第五架空要素を崩壊させる弾丸を放つそれは、鋼の大地においては最強の武器の一つだ。

魔剣・斬撃皇帝に並ぶ武器であるブラックバレルのレプリカを、マシユは持っている。

相手の寿命を測定し、マスターの全令呪と運命力を消費して放つそれは主神ゼウスすら殺してみせた。

もしもO R Tに意思が無いならば…意識が無いならば、私諸共、撃ち貫いてもらう他ない。

その為にも、マシユの安否は大切だ。無論、カドックもだが…

「どちらにせよ、まずはジンをどうにかしなければ話しにならないか…とはいえ、私には礼装作製の技術も無し…仕方ない。取り敢えず、今はコレで対処しよう。」

ジンを対処するには、まずダ・ヴィンチと連絡を取らなければならぬ。亜鈴は亜麗とは別の個体だが、星の心臓はある意味ではジンと似た様なものだ。

そのアイデアから、第五真説要素環境用カルデア制服の様な礼装を作ってくれるだろう。

それが出来るまでは——私の『強化魔術』で、彼女を出来る限り援護しよう。

心臓にある回路を開く。

ゴウンツツツ!!! と、鐘の音が声を上げ、森林の奥深くまで鳴り響く。

「すぐ…本当に、回路を開くだけでそんな音が鳴るんですね…」

「質が質だからな…正直、これだけ大きい音が鳴る魔術回路だから、隠密には向かない。」

「あー…確かに。そんな大きな音が鳴ったら、一瞬で場所が分かっちゃいますよね。」

ああ、そうだ。こんなに大きくて、特徴的な音が鳴ってしまえば—

一瞬で、バレてしまう。

本当、何をしているだ…私は。

□ □

「…ORT」

宇宙に立つ彼女の名を、小さく呼ぶ。

漆黒の外殻。群青の彩り。余りあるジン。

オルト・シバルバー——私が自らの心臓を与えた結果、生み出す事となってしまうた正真正銘の怪物。

私にとって、最も大切な家族。ずっと生きていてほしかった、大切な存在。

けれど——

『…待っていてください、マスター。私がすぐに、助けますから。』
青色の風が吹き荒れる。群青の太陽風が全てを侵そうと唸りを上げる。

同時に、体を蝕み、破壊の限りを尽くす有害でしかない物質が散乱する。

それだけで理解する。和解の道は絶たれている、と。

「っ…！ 逃げるぞ、藤丸！」

すぐさま後ろを向き、唾然としていた藤丸を肩に背負う様な形で担って地面を駆ける。

加速の風圧が体を叩く。目に見える景色が、すぐに通り去って消えていく。

音速を身に纏い、荒廃と壊死に取り憑かれた木々を風圧だけで悉く振り払い、全てを打ち破って突き進む。

津波の如き風が、後ろから迫りくる。何もかもを熔かし、侵食する太陽の風が、私達を飲み込もうと追い駆けてくる。

「ORT、無銘さんのサーヴァントだったんだよね?! めっちゃ敵意むき出しで攻撃してきたよ!？」

「私にもよく分からん！ だが、何故かは知らんが怒っている様な気

はした！」

「それ嫉妬じゃないの!?!」

「そんな馬鹿な事があるか、と言い切れないのが辛いな！　だが、嫉妬する要素なんて何処にも無いだろ！」

「此処に有りますよ！」

「自惚れるな小娘！　ORTの魅力に比べれば天と地の差だ！」

「温度差が凄い！」

嫉妬なんてする訳ないじゃない……ないじゃない……多分。

いや、今はそれを気にして考え込んでいる暇なんて無いんだよ。と、私は自分に言い聞かせて更に加速する。

ゴウンツツツ………ゴウンツツツツツツツツツ!!!!!!

回路を二本開く。鐘の轟音が鳴り響き、空を揺らし木々を倒す。

荒れ地に踏み出し、荒れ地を踏み締め、脆い荒れ地を強く蹴って、更に前へと加速する。

それには、バネに押し出された様な感覚、なんて優しい表現では言い表せない衝撃があった。バッテリーングセンターに有るマシンの中で、最も速いマシンに投げ飛ばされたボールの様な感覚。それが、今の私と藤丸に合った表現だった。

まあ、そんな表現をした訳ではあるが、そもそも私はバッテリーングセンターに行った事などないのだが。

「もつと飛ばすぞ！　吐くなよ！」

「善処します！」

「良し——行くぞ」

音速を越えて、神速で。

私は藤丸と共に山を抜き、青色に汚された愛しき故郷へと突入した。

第三話 「廃れなかつた場所」

■ ■

三咲町。時系列的には、型月作品の中で最も古いであろう物語『魔法使いの夜』の舞台にして、私とORTが住んでいた町。

都会に比べれば田舎だろうが、それなりの設備や施設はその時代に比べれば有った方だ。十分に、良い町だった。

だが——その町も、今では見る影もない。

「これは…」

「…これが、『水晶溪谷』だ。」

ORTが持つ、侵食固有結界『水晶溪谷』の力によって、三咲町は荒廃していた。いや、荒廃というよりは壊滅と言った方が妥当かもしれない。

『水晶溪谷』——それ即ち、物理法則の改竄。異界秩序をだだ漏らしにしている力。

異星からの来訪者であるORTは、ただ其処に居るだけで周囲を自身に住んでいた環境——もとい、オールの雲に存在する彗星へと書き換える。

それがもたらした結果が、この有り様だ。三咲町の惨状だ。

太陽風によって何処もかしこも溶かされ、不安定な形のまま侵食されて青色の固形物に成り果てている。

道の端々も侵食され、それに加えて先の山よりも多くのジンで溢れている。

もはや、危険地帯と何ら遜色ない場所だ。いや、遜色ないのではない。もう此処は、危険地帯だ。どうしようもない、壊された場所だ。

「ORTの宝具…もとい、『宇宙熔かす不滅の日輪』は、『水晶溪谷』の『異界秩序』の特性を含んでいる。当たれば即死と考えた方が良い。正直、アルトリア・キャスターやククルカンの対肅清防御を以てしても防ぎ切れないだろう。」

「…宝具以前に、通常攻撃も太陽風なんですよね…」

「恐らく。だが、俺の予想では近接攻撃も使ってくるぞ。」

「え、マジですか」

「マジだ。俺がよく知ってる。」

侵食に呑み込まれている懐かしい故郷の道を、マスターである藤丸を依然として肩で抱え、私は駆けながら説明する。

私が憶えている限り、彼女が使う近接様の武器は二つ。

一つは大鎌。彼女の腕…もとい、蜘蛛状態のORTの腕を模した成人男性程の白銀の大鎌。しかも、宇宙銀糸の特性まで有る。

二つは大剣。私とORTが共闘し、青崎青子と戦っていた時に彼女が新しく創り出した、少女の体に似合わぬ程の大きさを持った白銀の大剣。

私を知る限り、もしくは憶えている限り、彼女が使っていた近接武器はこの二つだけだ。

オルト・シバルバーとしての姿を象っている彼女が使う可能性は低くはあるが、決してゼロではない。

可能性は、低くかろうと必ず有る。

「油断は禁物だ。準備に準備を重ねて挑むんだ。お互いに、彼女の強さを知っている身だろ？」

「…そうだね。私も、マシユも…知ってる。」

「そうだ。だから、入念な準備が要る。心強い味方もな。」

考え、考え、考え、そして彼女を打倒する事が出来るサーヴァントを上げるとしたら、私の頭には三人が浮かび上がる。

一人——アーキタイプ：アース。

二人——アド・エデム。

三人——ゴドー。

ジンで溢れている事は、ある意味で幸運だった。アーキタイプ：アース…もとい、アルクエイド以外の二人、Notesの世界を生きた二人を喚び出す触媒としては十分な代物だ。

アド・エデムの『斬撃皇帝』であればORTを倒す事も出来る。あの魔剣には死の概念が有ろうが無かろうが無関係だ。この惑星からエネルギーを吸い取って成長した剣は、万物を両断する刃となる。

ゴドーは極限の単独種を殺害する事が出来る数少ない武器である
ブラック・バレルを持つている。ジンに溢れたこの地であれば、ブ
ラック・バレルも十分に活かせる。

ジンを触媒にすれば、恐らく召喚は可能だろう。私が座に登録され
たという事は、即ちイレギュラーの容認だ。つくづく面倒な思考回路
をしている様だ、アラヤもガイアも。

「とは言え…一先ずは、マシユ達との合流を優先か。この世界じゃ、呼
吸する事すら苦痛になるだろう。」

「そうなの？」

「ああ。今の私達は、『強化魔術』を使って内も外も強化しているから、
ジンの影響を軽減出来ているが…マシユとカドックはそうもいかな
い筈だ。」

「ダ・ヴィンチちゃんにどうにかしてもらわないとダメって事？」

「そういう事だ。ダ・ヴィンチであれば恐らくどうにか出来る。つと
…着いたぞ。」

目的の場所に辿り着き、私は腰を下ろして彼女の足を地面へと近付
ける。

体を離し、腰を上げて其処を見上げる。

とても懐かしい――

「私の家だった場所だ。…此処だけ、被害が及んでいない。」

私とORTが共に住んでいた、大切な場所。

「無銘さんの家…って事は、ORTの家でもあるって事？」

「ああ。私がORTを喚んだ場所であり、共に暮らした場所だ。」

「…本当に、影響が無い。無銘さんとの想い出だから、汚したくなかつ
たんだね。」

「……だと良いのだがな。取り敢えず、中に入ろう。」

中も大丈夫だと良いのだが。

□ □

「室内にも影響は無しか…しかし、こんな状況なのに電気が通ってい
るとは驚きだな。」

私の部屋は愚か、台所すら無事だった。というか、部屋全体が無事

だった。

清潔感は保たれたまま。埃すら被っていないかった。

部屋はまるで、保存されていた宝物の様に綺麗だったのだ。

それに加え、水は流れるし火は起こるし電気も付く。何なら、冷蔵庫や冷凍庫には食材まで入っていた。

と言っても、私がORTを連れて蒼崎橙子から逃げた時に入れていた食材だが……まあ、それでも料理を作るには申し分ない。

「……久々に、アレを作ろうか。」

過去に私が作った料理——もとい、私が初めてORTに食べさせた料理を。

主な材料は豚肉の薄切りとアスパラ。後は醤油、水、料理酒、味醂といった味付けのような調味料だ。

作るのは、簡単な肉巻き。そう、私がORTに初めて出した料理だ。まな板に肉を敷き、その上にアスパラを載せて丁寧に巻いていく。

これだけの簡単な作業で、取り敢えず十本作った。とても懐かしい。よく昼飯用にと作っていたのを思い出す。

次に、調味料を全てボールに移し、混ぜる。

混ぜるまでの作業に少しばかり時間は掛かるが、手間という程の間ではない。

今の私はサーヴァント。この程度では疲れない。こういう所でも役に立つな、サーヴァントの耐久性は。

混ぜ終えたら、コンロに火を着け、その上にフライパンを乗せ、フライパンにサラダ油を引いてから肉を乗せ、焼く。

肉の両面が焼けて良い色になったなら、混ぜた調味料を掛けて煮詰める。後は味が染みるまで少し待つだけだ。

「……本当に、懐かしいな。」

郷愁に浸る想いで、彼女との日々を思い出す。

まだ機械的な性格だった彼女。感情を表に出す事が無かった彼女。それが、私と暮らし始めてから変わって行った。

そして、私もまた変わっていた。最初は、ただの恐怖心だったにも関わらず、気が付けば私は彼女を家族と同然に扱っていた。

その始まりが、この肉巻きだ。簡単な料理が、彼女との生活の始まりだったと思うと、感慨深い。

「つと。よし、出来たな。」

コンロの火を止め、肉巻きを更に盛り付ける。

米は無いが、まあ肉巻きだけでも十分だろう。

「藤丸、出来たぞ…つて」

リビングのソファの方へと赴いてみると、マスターである藤丸立香はぐっすりと眠っていた。

まあ、ORTと相对したんだ。きっと疲労が一気に溜まってしまったのだろう。

藤丸の分は取っておくか…。

さて、それじゃあ…

「——ちゃんと眠っているな…よし。」

もう出て来て良いぞ。久しぶりに、一緒に食べよう——○

RT

私がそう呼び掛けると、静かにリビングの扉が開かれ、「彼女」が現れる。

腰まで伸びた金色の髪と晴天の空を思わせる群青の瞳。ドレスを思わせるワンピースを纏った少女。

私と藤丸がついさつき逃げた相手——そして、私の元サーヴァント。

彗星から飛来した究極の単一個体——ORT。またの名を、オルト・シバルバーである。

第四話 「再会／宣誓」

■ ■
吾輩は無銘のサーヴァントである。名前など無い。

ORTとの食事を終えた後、彼女と話し合っただとある作戦”を建てた私は、彼女と別れて藤丸の目覚めを待っていた。

作戦と言っても、結論から言っしまえば別に裏切りの計画という訳ではない。寧ろ、その作戦は藤丸達を手助けする為のものであり、この特異点攻略に欠かせないものだ。

危険でないという訳でもないのだが…そこに関しては、その時に納得してもらおう他無い。そうでもしないと、そうでもしてくれないと、この特異点の攻略は不可能だ。

まあ、その特異点を生む原因となった私が、今更何を言っているんだと言われてしまえば、それまでの事ではあるのだが。

「んん…あれ、無銘さん…」

「起きたか。おはよう、藤丸。よく眠れたか？」

そうこう色々と考えていると、遂に我がマスターが目を覚ました。もう一日が経ったぞ、マイマスター。

まあ、空が空なので朝なのか夜なのかは全く分からないし、何なら時計も正確に動いているのかどうか確証を持っていないのだが。

自分用に淹れた珈琲のカップをテーブルに置き、降ろしていた腰をゆつくりと上げて立ち上がり、私は軽い足取りで台所へと向かう。

「ココアを淹れるから、少し待っていてくれ。」

「ありがとうございます…」

ああ…やはり、彼女は普通の女の子なのだなど、未だ眠たそうな彼女の声に、私はこう思わずにはいられなかった。

世界を救った英雄なんて、荷が重い。世界を壊す悪役なんて、荷が重い。彼女はどこまでも普通の、ただの女子高生だ。そうだった筈なんだ。

ただの子供が背負うには、あまりにも重た過ぎるその在り方。普通

から逸脱していく異常な生き方をせざるを得なかった状況に陥った結果から成った在り方。

そう考えると——駄目だと分かっているけど、彼女をこのまま此処に置いた方が良いのではないかと、とも思ってしまう。不躰にも救いたいと、思ってしまう。

「ミルクココアだ。残念ながら、私はエミヤの様に料理の腕は高いのでインスタントだが、我慢してくれ。」

「いえいえ、出してくれるだけでもありがたいですよ！」

「なら良かった。…思い返せば、ココアに関しては、O R Tにも出した事がなかったな。」

「えッ……それ、私、大丈夫？ また嫉妬で殺されたりしない？」

「……まあ、食べ物の恨みは恐ろしいと言うしな。いや、この場合は逆恨みか？」

「怖いよー！」

そうは言われても、仕方ない事なので私から何とも言えない。残念な事に。

というか、ココアのみならず、私はO R Tにインスタント系の食料を振る舞った事がないのではないだろうか？

基本的に料理は全て私が作っていた訳だし、合田教会に居候させてもらっていた時も私や唯架さんが共に作業して作っていたのだ。

全てが手作りで、インスタント系の料理を出した事は無かった。

「偶にはインスタント系の料理も出した方が良かったのか…？」

「驚きはするけど、『マスターのご飯の方が美味しいです。』って言いそう。」

「ほぼ初見であるにも関わらず解像度が高いな。」

「なんか、無銘さん全肯定な気がして。」

「いや、そんな事はないぞ？ 彼女だって、私に意見する時は意見していたよ。過去にゼルレッチの爺さんと戦った時がそうだな。」

「へえ…そのゼルレッチ？ って人は凄い魔術師なの？」

「……………そうだな。良くも悪くも、凄い人だよ。」

「凄い間があったね…」

長く考えた末、私はそう答えた。長く、ながーく間を開けて、悩みながら答えた。

確かに彼は凄い。それこそ、魔術世界における偉人と呼んでも良いくらいに偉く素晴らしい功績を持った男だ。

だが、現実における偉人と同じ様に、彼もまたある種の変人だった。善を噛い、しかし悪に義憤するという不思議な性格の翁だ。時を止める事が出来る霊的存在を操る高校生の様な性格をした老耄だ。

そんな彼は、やはり良くも悪くも言うべき存在である。

まあ、名前的にも存在的にも『無銘』でしかない私が、あれだこうだと偉そうに言える立場ではないのだが。

「…まあ、取り敢えず。今は現状況の再確認だ。

「レイシフトした私達は、本来の場所からズレた所に転移した。恐らく、マシユとカドツクの二人は正しい場所にレイシフト出来た筈だ。しかし、安全であろう二人とは真逆に、私達は特異点のボスとも呼べるORTと接触した。それも、私達の想像を遥かに上回る存在となっていた。それこそ、総力戦を挑んだとしても絶対に敵わないと理解してしまふ程の絶望だった。

「私は強化魔術を使い、ORTから逃げ出して、此処へと逃げ込んだ。そして、それが今という訳だが…問題なのは、此処からどうするかという、これからの展開についてだ。

「ジンによる通信障害で連絡が取れない以上、私達が動かなければ、彼等も私達の事を見付けられない筈だ。仮に見付けられたとしても、それはかなり先の話しになるだろう。

「いや、寧ろ私達が探さなければならぬ状況にあるのかもしれないな。ジンの存在があるのだから、彼等も自由に動く事は出来ていない筈だ。ダ・ヴィンチならば恐らく、ジンが危険なものである事をすぐに理解して指示を出してくれてるだろう。

「だが、危険なのは私達も同じ事だ。ORTに存在を知られてしまった以上、私よりも君の方が危険だ。それに、ジンの事もある。私の強化魔術があつても、正直に言つてジンに完全なる耐性を得られるかどうかは分からない。

「まあ、長々と説明はしたもので…簡単に言ってしまうば——
—かなり詰みの状態という事だ。」

ああ、なんて分かりやすい状況だ。

私にとつても、彼女にとつても——詰みだ。

□ □

時間は少し前へと遡る。

まだ藤丸が起きておらず、そして私とORTが久々の食事を終えた後の事だ。

久しい再会を遂げた元マスターの私と元サーヴァントの彼女の間
に有ったのは——

「…」

「…」

互いに、沈黙だった。静寂のままだった。

私としても、正直に言つて気不味く感じている。だって逃げたし…
彼女の前で、別の少女を抱いて逃げちゃったし。

面目ないというか、申し訳ないというか…何と言うべきか。

しかし——

「…大きくなったなあ」

そんな感想が、出てきてしまった。

「…そうでしょうか？」

「ああ。本当に大きくなった。そうだな…女子高生ぐらいか？ 子供っぽさが無くなって、大人っぽくなった。」

「——はい。私も、大きくなりました。でも、マスターは変わらずです。すね。」

「まあ、私はもう大人だからな。それに、英霊になつてしまった以上、私は全盛期の姿にしかねないから、変わる事はないんだ。まあ、霊基再臨をすれば、もしかしたら変わるかもだが…正直、想像がつかん。」

「私も、マスターが変わる様は想像出来ません。霊基再臨をしても、衣服が変わるだけ…という可能性が高いと予想します。」

「ああ…確かに、そうだな。しかし、私はこの服以外を着ていた事はあ

「まりないぞ?」

「そうなのですか?」

「ああ。私は幼少期から、まんまこの服装だったよ。大人になってから、自分のサイズに合った同じものを買って直したというだけだ。」

「: : : そうなのですか。少し残念です。衣装の違うマスターも見たかったのですが: : :」

「あはは: : : 私なんかが衣装を変えても、別に何の見栄えも得もないだろう?」

「あります。私にはあります。いえ、私にしか得はありません。」

「うーん: : : ありがたいと言わなければならないか、それとも悲しいと言わなければならないか?」

「困った風に笑いながら。しかし、とても楽しそうに: : : いや、実際に楽しかった。」

私は、ORTとの雑談が楽しかった。元従者との久しぶりの雑談が、会話が、とても楽しかったのだ。

だが――

「さて: : : ORT。此処から、別の話し合いをしよう。」

「: : : マスター、私は」

「平和的に終われるなら、どれだけ良かったかな。でも、残念ながらもはいかない。しかしね、ORT。私は――」

「君だけを死なせるなんて事は、君を孤独に追いやるなんて事は、絶対にしない。」

同じ主犯なら、今度こそ最期まで――

第五話 「月の花園に佇むお姫様」

■ ■
吾輩はマスターと共に特異点解決に勤しむサーヴァントである。名前など無い。

現在、私は藤丸と共に三咲町の山の上に有る校舎を目指していた。魔法使いの夜という物語において、主人公の一人にしてメインヒロインである蒼崎青子が、第五魔法を使用して、自身の姉である蒼崎橙子と戦った舞台。

私達が其処に向かう理由は、単純に一つ——現地に居るサーヴァントの確保だ。

特異点と異聞帯、その両方には必ずサーヴァントが居る。まあ、それが絶対という訳ではないのだが。

サーヴァントではなく、あくまでサーヴァントになる前の本人である場合もある。

「でも…本当に大丈夫なの？ この特異点じゃあ、サーヴァントも碌に活動出来ないんじゃない？」

「普通のサーヴァントなら、まず無理だろう。だが、私達が探してるサーヴァントは決して普通のサーヴァントじゃない。どちらかと言えば、O R Tに近い存在だ」

「え、それって危ないんじゃない？」

「いや、問題無い。『姫様』の方であれ、『淑女』の方であれ、彼女は他のアルテミット・ワンに比べれば接しやすいし、人間らしい。まあ…過去に地球を支配しようとした事もあるがな」

「やっぱり危ないじゃない？」

「過去の事だ。それに、それをしたのはタイプ・ムーンだ。私達が探すのはタイプ・アース——いや、アーキタイプ：アースだったか」

「え——」

アーキタイプ：アース。その単語を聞くと、彼女の足が止まった。どうかしたか？ と一瞬考えたが、すぐに答えが出た。

ああ、そうだった。そういえば、彼女はあの異聞帯で——その異聞帯における『アーキタイプ：アース』と出会っているんだったな。確か、ジユラシツク月姫なんて言われてもいたか。まあ、あの異聞帯には志貴やアルクエイドまんまな存在が居たからな。そう言われるのも仕方がない。

「淑女（笑）の方が良いんだがな…あっちの方が接しやすい。人間社会で暮らしていたら人の人格だから、恐らくO R Tともやりやすい…筈………」

「自信無くなってるじゃん…」

「だってなあ…親しくない女性が居ると直ぐに不機嫌になるからなあ、O R Tは…未だによく分かん」

「はー、罪な男ですねー、無銘さんは。乙女心を知らないの？」

「女の夫は居る上に恋人も居るし、同属嫌悪の仲間も居る君には言われたくないぞ、英霊たらしの藤丸さん」

「うぐつ…：カウンターが強い…」

「…：運命力とは、何ら関係無い」

「え？」

荒れた大地を踏み締め、大きな一歩で坂を上がりながら、断言する。

君のそれは——決して、運命がどうだの世界がこうだのしている様な、定められた結果からくるモノではない、と。

「藤丸立香は、そういう人間なんだ。だった、ではなく。最初から、そうなんだ。君が英霊達と仲良くしている現状は、決して君が人理の旅をして変わったからじゃない」

「……」

「君は変わっていない。他人とズレた訳でもない。君は君だ、藤丸立香は一人の『英雄』ではなく、一人の『少女』だ。世界を救っても、それは変わらない。だが、憚れる事もあるかもしれない。周りから、変わったなんて事を言われるかもしれない。もし、そんな事が起きたら——」

「…起きたら？」

「此処に——三咲町に来れば良い」

「——へ？」

「マシユを連れて来てても良い。カドツクを連れて来てても良い。カルデアの職員を連れて来てても良い。とにかく、何かがあれば三咲町に来れば良い。あのO.R.Tですら受け入れた町だ。一人の少女くらい、直ぐに受け入れるさ」

大人になった訳ではない。成長などもしていない。

藤丸立香は、まだ子供だ。そして彼女の精神は成長したのではなく、悪化したという表現の方が正しい。

まだ未熟な精神に、大人でも経験しない様な苦痛を掛け続けて今に至ったのだから、それは決して成長とは言えない。

例え成長したと言っても、プラス方面への成長ではなくマイナス方面への成長だ。良いものじゃない。

悲しいものだな……子供を導く筈の大人が、子供に世界の命運なんて重苦しいものを丸投げする事しか出来ないなんて。

「…ありがとう、無銘さん」

「感謝される様な事じゃないさ…」

私は大人だが、このザマだ。

英霊にでもなれなければ、共に過ごしてきた家族の一人すら救えない惨めな大人だ。

選択を誤り、こんな惨状を生み出してしまった。私が選択を誤らなければ、こんな事にはならなかった筈だ。

彼女達も、再びO.R.Tと戦う事にはならなかった筈なんだ……この特異点における全ては、私が招いてしまった過ちだ。

私には責任がある。だからこそ——出来る限り、彼女を巻き込まない様にしなければ。

その為にも、まずは仲間を増やさねば。

「よし。着いたぞ——此処が、目的地だ」

木々を通り抜け、私達はようやくと綺麗な大地を踏み締める。

白く美しい花々が咲き誇る花園。O.R.Tの侵食を一切として受けていない、幻想的な景色を保った一つの世界。

そして——その中心に、一人の少女が立っていた。

白いドレスに身を包んだ金髪の少女。この地球におけるアルテミット・ワンにしてタイプ・ムーンの後釜を象った存在。

真祖の姫君。現代を生きた箱庭育ちのお嬢様。

「あ、やつと来た！ 私を待たせるとか、良い度胸してるわねー、貴方」
「大変申し訳無い。色々とごたついてしまったものでね。なので、菓子や紅茶を自宅に用意してあるよ」

「準備が良い！ そういう所もあの子が貴方を好いてる理由なのね。あーあ、あの人にも見習ってほしいなー」

「まあ、良いや。取り敢えず、お久しぶりね、『IF』の何でも屋さん！」

「ああ、そうだな。初めまして—— 『アルクエイド』」

星の触覚、そのお姫様。月の王様のバックアップ、その最高傑作。アルクエイド・ブリュンスタッド。

□ □

「何この紅茶…すごい美味しいんですけど。これ、本当に市販されるものなの？」

「市販の品だよ。午後の紅茶…全く、素晴らしいものを作ったものだよ、日本は」

ティーカップに注いだ午後の紅茶を舌で嗜みながら、私は改めて感動していた。

午後の紅茶。何と素晴らしい味わいだろうか。平民である私は、この紅茶以上に美味しい紅茶を飲んだ事がない。

マリアージュ・フレールやロンネフェルトの様な高級品を買い取る程のお金を持っていなかった私にとって、午後の紅茶ほど嗜める紅茶は無かったのだ。

「クッキーも美味しいよ、無銘さん」

「ありがとう。だが、私は菓子作りに関しては素人だからな。知識と技量で何とかしただけのものだから、大した味わいは出せていないんだよ。それこそ、エミヤやブーティカが作ったものの方が美味しい」

「カルデアってすご…私も行きたーい！」

「終わったら、きつと喚ばれるさ…させて」

ティーカップを机に置き、緩んだ気を張り直す。

茶会は勿論良いのだが、私達にはやるべき事がある。いや——私には、やらなければならぬ事がある。

「これからの事だが、私達はマシユ達との合流を目的に、魔女の家を指す」

「魔女の家…確か、蒼崎青子が住んでいた家の事よね？ 最後の魔女が居たっていう」

「ああ。情報阻害も無く、校舎以外でORTの被害を受けていない場所があるとすれば其処以外は有り得ない。もしかすれば、蒼崎が生きている可能性もある」

蒼崎の魔法であれば、ORTの太陽風を先送りにする事も可能の筈だ。

とは言え、蒼崎はORTから恨みを買っているからな…。

可能性があるとは言ったものの、正直、彼女が生きている可能性はかなり低いだろう。

「彼処なら安全だろうし、最初に目指すなら、まずは其処からだ。とはいえ、途中から敵が現れる可能性もゼロじゃないからな。ORTの侵食を受けた敵なら、私達も攻撃を受ければ危険だ。警戒して挑まなければならぬ」

「侵食固有結界の効力…厄介なものね。それじゃあ、『空想具現化』も碌に使えないじゃない」

「ああ。最悪、『千年城』まで侵食が行き届く可能性もあるからな」

「面倒…：貴方、とんでもない能力を与えたわね」

「そこを突かれると、ぐうの音も出ないな…：だが、その通りだ。だからこそ、私が片を付けなければならぬ」

今度こそ、選択を間違わない様に。

第六話 「後悔／誤った正答」

■ ■
吾輩は紅茶を嗜むサーヴァントである。名前など無い。

私は藤丸、アルクエイドと共にティータイムを楽しんだ後に、ようやくマシユ達の探索へと赴いた。

本来なら私達も転移するべきだった場所——魔女の家。それ即ち、旧久遠寺邸だ。

蒼崎青子、久遠寺有珠、静希草十郎の三人が住んでいた場所であり、三人の帰るべき場所だ。

ストーム・ボーダーからこの三咲町全体を観測した結果、侵食濃度が最も低い場所である久遠寺邸へと転移する手筈となった。

まあ、私と藤丸は失敗してしまったのだが：しかし、あの二人は成功している筈だ。

マシユ一人だけでなく、魔術師であるカドツクも居るのならば、安心も出来るだろう。

とはいえ、完全に安心出来るという訳でもない。何故なら、あくまでも侵食濃度が低いというだけであって、決してゼロではないのだから。

低くとも、少なくとも、ジンはジンだ。

微量であろうとも、人間の体に莫大な被害をもたらす危険物質に変わりはない。

「ほんっと、此処って静かねー」

「まあ、人が居ないからな。当然だ」

「だとしても静か過ぎでしょ。敵すら居ないじゃない」

「退屈ー、と言わんばかりの不満げな顔を浮かべるアルクエイドだが、こちらとしてはその方がありがたい。」

私は別に強いサーヴァントという訳でもない。無数の敵が現れれば、マスターである藤丸を護りながら戦える自信は無いに等しい。

強化魔術を使用してギリギリ：といったところか。いや、この特異

点の敵なら私の手に負える強さなんてしていないか。

ORTの侵食が行き届いている上にジンが漂う世界だ。そんな世界で生きている生物など、「亜麗」に他ならない。

亜麗——その正式名称を、亜麗百種。鋼の大地に登場する、ジンによつて新たに誕生した霊長類達の事だ。

ジンが漂う環境に適応し、荒廃した惑星での生存能力を獲得した霊長類。即ち、最新の系統樹。

ジンを含む彼らの戦闘能力は凄まじく、その強さは藤丸もよく知っている。

亜麗とは似て異なる者——亜鈴。第六の異聞帯で、彼女はそれと対立しているのだ。

「敵が居ないに越した事はないんだ。アルクエイドならば兎も角、私や藤丸では亜麗には勝てそうにない」

「亜麗…？ 亜鈴百種とは違うの？」

「まあ、違うと言えば違うが…強い事に関しては大して変わらないよ。どちらも人の手に負える相手ではない…それこそ、アルクエイドの様な真祖にしか相手取れない存在だ」

「まあ、間違つてはいないかもね。でも、幾ら私でも鋼の大地じゃ相手取れないわよ？ 星が死んじやつてる訳だし」

…あ、確かに。そう言われてみればそうだ。

真祖とは星の触覚。アルクエイドが夜に無敵となるのは、星からのバックアップがあるからこそその話しだ。

だが、鋼の大地はそうならない。バックアップしてくれる星が、既に壊死してしまっているのだから。

…あれ、もしかしてこの特異点でもアルクエイドって危ない？

「まあ、バックアップは期待出来そうにないわね。そうなったら貴方に頼るしかないわね、丁度良い魔術回路持つてるし」

「…まあ、そうだな。私の魔術回路なら、アルクエイドのサポートくらいなら出来るだろう」

といつても、使えるのは強化魔術と変化魔術だけなのだが。

何なら変化魔術は碌に扱いこなせていないから、実質的には使える

のは強化魔術だけである。

何とも情けない話した。

「私は？」

「無理ね」

「無理だ」

「二人から即答された…」

だって事実だし。

そもそもとして、彼女は真祖の事についても詳しく知らないのだ。そんな素人がアルクエイドのサポートをしたら、すぐに魔力切れを起こして気絶するに決まっている。

もしくは——死ぬかもしれない。

「真祖のバックアップが出来る人間なんて、そう居ないんだからね？
十全なバックアップが出来るのなんて、この人かゼルレッチのお爺ちゃんぐらいなんだから」

「無銘さんってさ、本当に現代を生きる人間だった？ 最初からサーヴァントだった訳じゃない？」

「まさか自分のマスターから疑われる事になるとは思わなかったな：人間だったよ、私はちゃんと。ただ少し魔術回路と起源が特殊だった、というだけの事だ」

「アルテミット・ワンと過ごせる時点で普通じゃないのよ。この人はそういう所の自覚が足りてないんだから」

「それは私に限らず、藤丸や遠野くんにも言える事じゃないか？」

「志貴は良いの！」

「相変わらずの甘い意見をありがとう」

アルクエイドの遠野くんに関する話しは、いつ聞いたって砂糖の味があります、はい。

だが——同時に、複雑な感情を抱いてしまう事もある。

こんな甘い関係ではなくとも：私とORTも、私が間違っていないければ、それなりの関係になれていたのではないかと。

要するに、後悔だ。自分が選択が間違っていないければ、とか。もつと別の事を考えていれば、とか。

変えられない、変わる訳もない過去の事を、どうしても考えてしま
う。

情けないのは分かっている。選択をしたのは自分だ、私自らを生贄
にしてO R Tを生き永らえさせようという答えを選んだのは私自身
だ。

だからこそ…自己犠牲が間違っていると理解してしまったからこ
そ、悔やみが止まらない。

「…でも、だからと言って、今更止まれない」

かつて間違えてしまったなら、次こそは。

私と彼女の両方が、共に道を歩める選択を――